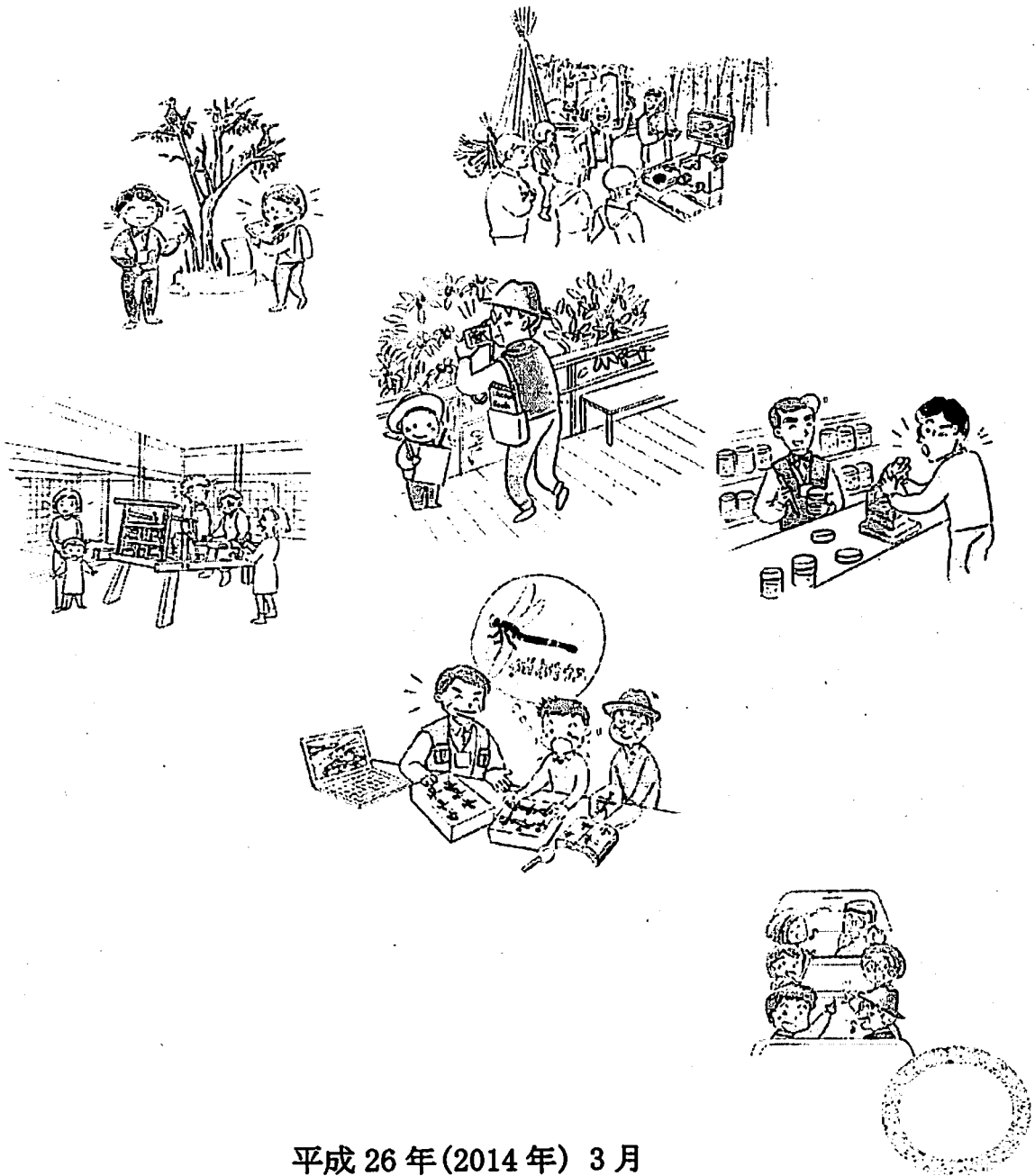


# 新琵琶湖博物館創造基本計画案

## 資料編



平成 26 年(2014 年) 3 月

## 目次

### 資料1 琵琶湖博物館のこれまでの実績

(1) 研究・調査	.....	1
(2) 展示	.....	5
(3) 交流	.....	7
(4) 資料整備	.....	10
(5) 多面的機能	.....	11

### 資料2 意見聴取・利用者調査

(1) 琵琶湖博物館協議会での意見	.....	18
(2) 新琵琶湖博物館創造基本計画検討会議での意見	.....	21
(3) 県民ワークショップ・ピアレビューでの意見	.....	25
(4) 来館者アンケート等での意見	.....	30

### 資料3 展示空間の再構築詳細案

(1) A展示室	.....	41
(2) B展示室	.....	46
(3) C展示室	.....	52
(4) 水族展示室	.....	58
(5) ディスカバリールーム	.....	62

### 資料4 交流空間の再構築詳細案

(1) 大人のディスカバリー ～大人も遊べるリアルな知的空間～	...	64
(2) ワクワク体験スペース ～だれでも楽しく体験～	...	64
(3) レストラン・ショップのアミューズメント機能強化 ～地域のオリジナルな魅力を発信～	...	65
(4) 樹冠トレイル ～自然に近づき、琵琶湖を感じる～	...	66
(5) 環境学習センター ～多様な主体とのネットワークを活かす～	..	66
(6) 地域環境活動交流室 ～活動の輪を地域から広げる～	...	67
(7) 学校・団体向け屋内スペース ～団体利用の快適性向上～	...	67

<b>資料5</b>	<b>交流機能の再構築詳細案</b>	
(1)	見える、伝わる、広がる 参加と交流	68
(2)	琵琶湖を感じる・体験する交流	69
(3)	地域をつなぐ交流	72
(4)	利用者とともに成長する交流	74
<b>資料6</b>	<b>ICT（情報通信技術）の活用</b>	75
(1)	来館者が快適で楽しく情報を得られるシステムの整備	76
(2)	展示や交流活動に参加しやすいシステムの整備	78
<b>資料7</b>	<b>施設整備・運営、建築に関する計画</b>	
(1)	ユニバーサルデザイン化の向上	80
(2)	展示室の再構築にかかる建築設備の改修	83
(3)	現状の課題を踏まえた施設設備整備計画（ストックマネジメント）	83
<b>資料8</b>	<b>外部資金の確保等</b>	84
	<b>あたらしいびわこはくぶつかん</b>	86

## (1) 研究・調査

## 1) 総合・共同研究について

## (1) 総合研究

琵琶湖博物館の設立理念を実現することに直接結びつく研究として、総合研究を10件行った。

	研究課題	開始年度 (平成)	終了年度 (平成)
001	住民参加による生物と生活環境調査の方法論的研究	8	8
002	水田生態系と人間活動に関する総合研究	8	10
003	東アジアの中の琵琶湖 - コイ科魚類の展開を軸とした - 環境史に関する研究	8	18
004	琵琶湖沿岸生態系の構造と動態	8	12
005	博物館資料の収集・整理・保管と利用に関する研究	9	16
006	琵琶湖沿岸帯の生物群集における生物間相互作用に関する研究	13	15
007	水田における水域ネットワークの構造と生物群集の関係性に関する研究	18	18
008	琵琶湖およびその集水域の生物学的探査：分類学、形態と分子に基づく系統学	18	22
009	湖に隣接する水田地帯の特性の解明ーニゴロブナを媒体としてー	19	22
010	琵琶湖の生物多様性の成立過程の解明	23	27

## (2) 共同研究

琵琶湖博物館のテーマにしたがった研究として共同研究を以下のテーマで85件行った。

	研究課題	開始年度 (平成)	終了年度 (平成)
001	古琵琶湖層群の足跡化石に関する研究	8	9
002	高等学校における博物館利用の実践的研究	8	10
003	植物化石の保存方法の確立	8	8
004	森林伐採が環境に及ぼす影響	8	8
005	地域博物館の情報システムの開発と利用に関する研究	8	9
006	日本産希少淡水魚の遺伝的多様性	8	9
007	琵琶湖水系産トンボ類の分布と生態	8	9
008	琵琶湖水系産水生昆虫等の系統分類	8	8
009	歴史資料の保存、利用方法の共通化に関する研究	8	8
010	博物館展示における「ハンズ・オン」の効果とその意義	8	15
011	屋外展示生態観察池および水路における生物モニタリングに関する研究	8	12
012	住民参加による気象情報システムの開発と利用に関する研究	8	11
013	琵琶湖集水域における中世村落の考古・文献資料の総合評価にもとづく研究	8	14
014	魚類における音響生理と利用に関する研究	9	9
015	参加型博物館についての博物館学的研究	9	9
016	生活と科学の接点としての環境調査の手法開発に関する研究-参加型から対話型へ-	9	10
017	琵琶湖の生態系の長期的変遷	9	10
018	社会的要因が内湖の生物環境に与える影響	9	11
019	琵琶湖周辺域における過去1万年間の自然環境と人間活動の変遷	9	13
020	滋賀県内におけるオサムシ類の分布	9	12
021	京都市伏見区横大路沼干拓地から産出した大型植物化石について	10	10
022	古琵琶湖層群の堆積環境と堆積過程-古琵琶湖層群下部におけるデルタ成堆積物の研究	10	10
023	カワウによる水域生態系から陸域生態系への物質移動とその影響	10	12
024	大分県安心院町での長鼻類化石の発掘と解析	10	11
025	古琵琶湖および海洋における魚類群構造：そのパターンとプロセス	10	10
026	滋賀県における陸産貝類の分布等に関する研究	10	14
027	沿岸域モニタリングのための常設型リモートセンシングの運営に関する基礎的研究	10	14
028	東アジアにおける現生・化石淡水棲貝類に関する研究	10	13
029	琵琶湖とその流域の魚類に関する研究	10	10
030	琵琶湖の水生植物の種分化と生態分化	11	14
031	水利形態の詳細復元による地域環境史の総合的把握	11	13
032	琵琶湖周辺の水田利用魚類の生態と人間とのかかわり	11	12

## 資料1

## 琵琶湖博物館のこれまでの実績

033	野洲川下流域平野における水田成立期の古環境復原	11	12
034	日本と台湾における古琵琶湖層の時代の哺乳動物相の比較研究	12	12
035	滋賀県内の魚類分布調査および琵琶湖博物館収蔵魚類標本の充実	12	17
036	堅田内湖における魚類の生態に関する研究	12	14
037	環境変遷研究のための今昔映像収集とその理論的展開-日仏における湖と人間の百年を中心として-	12	12
038	琵琶湖とその集水域における水生動物の寄生虫相に関する研究	12	15
039	琵琶湖堆積盆地の後期鮮新世約 250 万年前前後の古環境変化と古植生変化	12	16
040	たんぼにおける大型鯉脚類 (ホウエビ・ガトビ・カレイ類) に関する研究	12	15
041	地球物理学的知見および住民参加型手法による琵琶湖地域の気象情報に関する民俗学的研究	12	13
042	島の動物相の成立過程-古琵琶湖時代の動物相の特殊性解明にむけて-	13	15
043	「カワウ問題」解決に向けての生態学的アプローチ	13	16
044	鳥丸半島における自然環境・景観保全に関する研究	13	13
045	南湖の富栄養化過程に沈水植物が及ぼす影響の解明	13	16
046	古代湖および海洋における魚類群構造：そのパターンとプロセス	13	14
047	琵琶湖水系に生息するイワナの地理的分布とその形成過程	14	16
048	東アジアにおける第三紀起源昆虫の分子進化学的研究	14	18
049	外国産シジミ類に関する研究	14	15
050	珪藻電子図鑑の増補改良	15	19
051	ヘラブナの放流に伴う琵琶湖在来のフナ集団への遺伝的影響	15	16
052	内湖-水田間の水辺ネットワーク構築による在来魚復活に関する研究	15	17
053	滋賀県の蝶類分布および生態に関する研究	15	17
054	貝類を指標とした湖底の酸素環境の把握について	16	17
055	古琵琶湖誕生期の古地理・古生物復元	16	18
056	企画展「(仮称)植物が動くとき」におけるハンズ・オン展示の評価から考える効果的な展示手法のあり方	16	16
057	古琵琶湖出現期の古環境解析	17	19
058	マンジミの遺伝育種学的研究	17	18
059	カワウの物質輸送に関する研究成果の整理と統合	17	17
060	琵琶湖の富栄養化への影響を最小限にする森林管理方法の探求	17	17
061	琵琶湖の伝統的木造船「丸子船」の構造の研究～操船性とも関連して～	18	18
062	河川残留型を含むビワマス地域個体群存在の可能性	18	20
063	「魚が確認できない」データに基づく魚類が脅威にさらされている地域の特定と要因の解明	18	20
064	信仰を理由に保護されてきた森林の保全システムに関する社会史的研究-滋賀県竹生島森林における鳥獣害への対応を事例として-	18	18
065	北半球の多様な水辺に生息する双翅目昆虫の進化学的研究	19	20
066	近畿地方におけるオオオサムシ亜属の歴史生物地理	19	20
067	カワウ営巣林における森林衰退-回復過程の解明：異地性流入モデル構築のための調査方法の検討	19	21
068	「琵琶湖の過去 5 万年間の自然環境史解析」研究のための事前準備	19	19
069	日本列島の旧石器時代における環境変動と人間活動の関係性解明のための研究	19	21
070	琵琶湖周辺のボーリングコアから見た琵琶湖の成立	20	22
071	琵琶湖の過去 5 万年間の自然環境史解析	20	22
072	琵琶湖北西地域安曇川河床の化石林の古植生復元とその年代	21	22
073	竹生島および鶴の山におけるカワウ営巣林の森林衰退-回復過程の解明	22	23
074	琵琶湖地域における堆積環境変化の広域性と古気候変化との関係	23	24
075	山と湖をつなぐ地下水環境	23	24
076	「ミュージアム・リテラシー」を軸とした戦略的博物館学への展開	23	23
077	水田からみた環境負荷抑制に働く社会的総合作用の解明	23	25
078	定期サンプリングによる湖内におけるビワマスの基礎的生態情報の取得	23	25
079	レイク・モンスターなど湖や川の未確認生物の歴史と多様性、その生物学的小および民俗学的検証に関する研究	23	25
080	針葉樹トガサワラ風化石の系統と生育環境の解明	23	25
081	モンゴル北部森林被害(火災・蛾食害)跡再生困難地での「倒木遮蔽更新」仮説の検証と再生促進手法の開発	23	24
082	侵略的外来魚の生息抑制に関する総合的研究	23	25
083	2010 年代の滋賀県のトンボ類の分布状況に関する研究	24	26
084	古琵琶湖の置き土産-滋賀県南部のミズゴケ湿地群の総合的研究～	24	28
085	「人をつなぐ人材」を軸とした戦略的博物館学への展開	24	27

(3) 研究活動および出版物

年度(平成)	原著論文	専門分野の著述	一般向けの著述	学会等発表	一般書物(市販)	研究調査報告書	特別研究 セミナー		研究 セミナー		研究 発表会		研究 最前線		連続講座 回数	琵琶湖 新種 セミナー		特別講演会 回数	新聞掲載数	雑誌掲載数
							回数	発表数	回数	発表数	回数	発表数	回数	発表数		回数	発表数			
8	14	36		40	5	2	2	2											348	15
9	32	240		45	9	1	8	8											269	23
10	21	75	127	107	6	3	5	5	11	32	1	7							225	30
11	31	58	89	109	4	4	14	14	11	33	1	5							270	30
12	26	80	100	116	6	2	2	2	13	37	1	5							366	15
13	36	62	143	170	10	2	3	3	12	35	1	7	15	44					355	29
14	26	68	123	91	8	0	2	2	11	32	1	0	11	11					246	20
15	33	66	136	11	6	2	1	1	11	33	1	5	11	11					199	24
16	30	53	136	178	5	2	1	3	12	35	2	12		7					358	13
17	35	48	83	79	5	1	5	12	12	36	1	5							385	11
18	33	82	165	119	4	1	3	6	12	35	4	15							289	0
19	44	46	147	132	6	0	3	8	12	35	1	6							401	4
20	42	36	40	83	10	0	4	16	12	36	1	6				12	24		294	1
21	21	28	57	40	0	0	2	3	12	34						10	19	12	292	7
22	19	44	38	60	4	1	4	5	12	34						6	12	12	293	9
23	28	57	153	71	16	2	2	5	12	34						5	10		310	2
24	25	77	42	60	6		1	3	12	35						5	10		269	12
計	496	1156	1579	1511	110	23	62	98	177	516	15	73	37	66	7	38	75	24	5169	245

2) 新種について

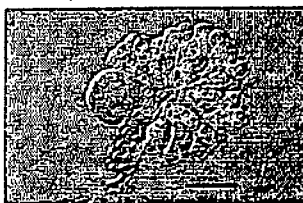
平成9年～平成26年の期間に、琵琶湖博物館の学芸職員または共同研究者による琵琶湖博物館研究の一環として発見され記載された滋賀県における新種は53種である。

	中分類群	属(亜属)	種または亜種	記載者	和名 (ラテン語 のカタカナ 以外)	採集場所
甲殻類	カイミジンコ類	<i>Fabaeformiscandona</i>	<i>paterea</i>	Smith & Janz, 2008	無	琵琶湖
甲殻類	カイミジンコ類	<i>Fabaeformiscandona</i>	<i>okubo</i>	Smith & Janz, 2008	無	琵琶湖
甲殻類	カイミジンコ類	<i>Fabaeformiscandona</i>	<i>velifera</i>	Smith & Janz, 2008	無	琵琶湖
甲殻類	カイミジンコ類	<i>Fabaeformiscandona</i>	<i>condylea</i>	Smith & Janz, 2008	無	琵琶湖
甲殻類	カイミジンコ類	<i>Fabaeformiscandona</i>	<i>dolabella</i>	Smith & Janz, 2008	無	琵琶湖
甲殻類	カイミジンコ類	<i>Fabaeformiscandona</i>	<i>yajizao</i>	Smith & Janz, 2008	無	琵琶湖
甲殻類	カイミジンコ類	<i>Fabaeformiscandona</i>	<i>pedana</i>	Smith & Janz, 2008	無	琵琶湖
甲殻類	カイミジンコ類	<i>Fabaeformiscandona</i>	<i>nishinoae</i>	Smith & Janz, 2008	無	琵琶湖
甲殻類	カイミジンコ類	<i>Fabaeformiscandona</i>	<i>akaina</i>	Smith & Janz, 2008	無	琵琶湖
甲殻類	カイミジンコ類	<i>Pseudocandona</i>	<i>abei</i>	Smith & Janz, 2008	無	琵琶湖
甲殻類	カイミジンコ類	<i>Cypria</i>	<i>matzkeae</i>	Smith & Janz, 2008	無	琵琶湖
甲殻類	カイミジンコ類	<i>Undulacandona</i>	<i>spinula</i>	Smith, 2011	無	井戸
甲殻類	カイミジンコ類	<i>Cavernocypris</i>	<i>cavernosa</i>	Smith, 2011	無	湧水・川の間隙水
甲殻類	カイミジンコ類	<i>Cryptocandona</i>	<i>tsukagoshii</i>	Smith, 2012	無	川の間隙水
甲殻類	カイミジンコ類	<i>Ilyodreus</i>	<i>intermedius</i>	Okubo in Smith, Janz & Okubo, 2011	ドロナガカイミジンコ	琵琶湖
甲殻類	カイミジンコ類	<i>Limnocythere</i>	<i>kaniyai</i>	Smith & Janz, 2009	無	琵琶湖
甲殻類	カイミジンコ類	<i>Limnocythere</i>	<i>fude</i>	Smith & Janz, 2009	無	琵琶湖

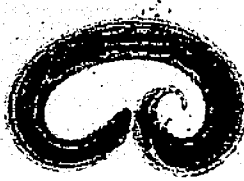
資料1

琵琶湖博物館のこれまでの実績

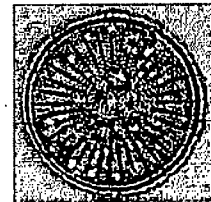
甲殻類	カイミジンコ類	<i>Limanocythere</i>	<i>levigatus</i>	Smith & Janz, 2009	無	琵琶湖
甲殻類	カイミジンコ類	<i>Limanocythere</i>	<i>cyphoma</i>	Smith & Janz, 2009	無	琵琶湖
貧毛類	ミミズ	<i>Drawida</i>	<i>eda</i>	Blakemore in Blakemore & Kupriyanova, 2010	無	水田
貧毛類	ミミズ	<i>Metaphiro</i>	<i>tanbode</i>	Blakemore, 2010	無	水田
貧毛類	ミミズ	<i>Amyntas</i>	<i>yazade</i>	Blakemore, 2010	無	川の上流
貧毛類	ミミズ	<i>Helodrilus</i>	<i>hachiojii</i>	Blakemore, 2007	無	水田
貧毛類	ミミズ	<i>Eisenia</i>	<i>anzac</i>	Blakemore in Blakemore & Grygier, 2011	無	神社の森
コケムシ類		<i>Fredericolla</i>	<i>toriumii</i>	Hirose & Mawatari, 2011	リュウコツカラクサコケムシ	琵琶湖
コケムシ類		<i>Hislopia</i>	<i>prolixa</i>	Hirose & Mawatari, 2011	アカリコケムシ	琵琶湖
	鉤頭虫類	<i>Acanthogyrus (Acanthosentis)</i>	<i>alternatspinus</i>	Amin, 2005	無	内湖の魚の寄生虫
	鉤頭虫類	<i>Acanthogyrus (Acanthosentis)</i>	<i>parareceptaclis</i>	Amin, 2005	無	川の魚の寄生虫
線虫類		<i>Tripyla</i>	<i>grygieri</i>	Gagarin, 2011	無	琵琶湖
線虫類		<i>Calodorylaimus</i>	<i>limnophilus</i>	Gagarin, 2011	無	琵琶湖
扁形動物	二生類	<i>Philopinna</i>	<i>kuwamutsu</i>	Shimazu, Urabe & Grygier, 2011	無	川の魚の寄生虫
扁形動物	二生類	<i>Allogenarchopsis</i>	<i>yaritanago</i>	(Shimazu, Urabe & Grygier, 2011)	無	川の魚の寄生虫
絨毛虫類	ツリガネムシ類	<i>Apocarchesium</i>	<i>rosettum</i>	Ji & Kusuoka, 2009	無	琵琶湖
絨毛虫類	プロロドン目	<i>Levicolaps</i>	<i>bivae</i>	Foissner, Kusuoka & Shimano, 2008	無	琵琶湖
アピコムプレクス門	コクシジウム類	<i>Goussia</i>	<i>bivaensis</i>	Molnár & Ogawa, 2000	無	琵琶湖の魚の寄生虫
アピコムプレクス門	コクシジウム類	<i>Goussia</i>	<i>grygieri</i>	Molnár & Ogawa, 2000	無	琵琶湖の魚の寄生虫
アピコムプレクス門	コクシジウム類	<i>Goussia</i>	<i>nipponica</i>	Molnár & Ogawa, 2000	無	琵琶湖の魚の寄生虫
アピコムプレクス門	コクシジウム類	<i>Goussia</i>	<i>wakabayashii</i>	Molnár & Ogawa, 2000	無	琵琶湖の魚の寄生虫
昆虫類	ハエ目	<i>Tanypus</i>	<i>nakazatoi</i>	Kobayashi, 2010	無	琵琶湖
扁形動物	渦虫類	<i>Prorhynchus</i>	<i>stagnalis bivaeensis</i> (亜種)	Timoshkin, Grygier & Kawakatsu, 2004	無	琵琶湖
扁形動物	渦虫類	<i>Moriniurella</i>	<i>nakanoi</i>	Timoshkin, 2011	無	琵琶湖
甲殻類	カイアシ類	<i>Morariopsis</i>	<i>grygieri</i>	Karanovic & Abe, 2010	無	洞窟
甲殻類	カイアシ類	<i>Eucyclops</i>	<i>bivensis</i>	Ishida, 1998	無	琵琶湖
甲殻類	カイアシ類	<i>Diacyclops</i>	<i>bivensis</i>	Ishida, 2005	無	人工ヨシ帯
甲殻類	カイアシ類	<i>Diacyclops</i>	<i>brevifurcus</i>	Ishida, 2006	無	琵琶湖
甲殻類	カイアシ類	<i>Diacyclops</i>	<i>ishidai</i>	Karanovic, Grygier & Lee, 2013	無	川の間隙水
甲殻類	カイアシ類	<i>Diacyclops</i>	<i>parahanguk</i>	Karanovic, Grygier & Lee, 2013	無	川の間隙水
腹毛類	イタチムシ類	<i>Lepidodermella</i>	<i>acantholepida</i>	Suzuki & Furuya in Suzuki, Maeda & Furuya, 2013	カギウロコイタチムシ	水田
腹毛類	イタチムシ類	<i>Dichaetura</i>	<i>filispina</i>	Suzuki & Furuya in Suzuki, Maeda & Furuya, 2014	ケトゲトゲオイタチムシ	水田
珪藻類	中心珪藻類	<i>Stephanodiscus</i>	<i>suzukii</i>	Tuji & Kociolek, 2000	スズキケイソウ	琵琶湖
珪藻類	中心珪藻類	<i>Stephanodiscus</i>	<i>pseudosuzukii</i>	Tuji & Kociolek, 2000	スズキケイソウモドキ	琵琶湖
珪藻類	中心珪藻類	<i>Navicula</i>	<i>subtrophicatrix</i>	Tuji, 2003	無	琵琶湖
珪藻類	中心珪藻類	<i>Navicula</i>	<i>pseudobrasiliiana</i>	Tuji, 2003	無	琵琶湖



繊毛虫の新種



線虫の新種



珪藻の新種

## 3) 保護増殖センターの繁殖賞等の実績

## (1) 繁殖賞

(社)日本動物園水族館協会加盟の動物園・水族館において、飼育生物の繁殖に国内で初めて成功した場合に授与される。

繁殖年月日		動物名
年(平成)	月日	
8	4/18	シロヒレタビラ
9	1/15	スゴモロコ
10	11/6	アブラヒガイ
11	4/14	アオバラヨシノボリ
	5/15	イチモンジタナゴ
12	6/1	バルブス・シネンシス
14	5/2	スジシマドジョウ小型種琵琶湖型
	5/2	スジシマドジョウ大型種
	5/6	イトモロコ
	5/17	ズナガニゴイ

## (2) 古賀賞

飼育下の野生動物において、繁殖が難しく世界的にも重要な種の繁殖に成功した場合に与えられる国内最高の賞である。(社)日本動物園水族館協会会長、上野動物園園長を歴任した古賀忠道博士の功績を記念して昭和61年に制定された。

受賞年	動物名
平成8年	希少淡水魚の系統保存(継代飼育)

## (2) 展示

## 1) 企画展示

回	タイトル	年(平成)	月日
1	今森光彦写真展 里山-生命の小宇宙-	8~9	10/20(日)~1/19(日)
2	博物館ができるまで	9	3/8(土)~4/27(日)
3	古代湖の世界		6/15(日)~8/31(日)
4	私とあなたの琵琶湖アルバム	9~10	10/10(金)~2/1(日)
5	近江はトンボの宝庫	10	7/18(土)~9/23(水)
6	絶滅と進化	11	1/15(金・祝)~4/11(日)
7	湖の船-木造船に見る知恵と工夫		7/20(祝・火)~11/23(祝・火)
8	湖の魚・漁・食-淡海あれこれ商店街	12	7/15(土)~11/23(祝・木)
9	鯉-“魚がむすぶ琵琶湖と田んぼ”-	13	7/20(金・祝)~11/25(日)
10	中世のむら探検-近江の暮らしのルーツを求めて-	14	7/20(土)~11/24(日)
11	外来生物 つれてこられた生き物たち	15	7/19(土)~11/24(日)
12	のびる・ひろく・ひろがる-植物がうごくとき-	16	7/17(土)~11/23(火・祝)
13	歩く宝石オサムシ-飛ばない昆虫のふしぎ発見-	17	7/16(土)~11/27(日)
14	湖辺~水、魚、そして人~東アジアの中の琵琶湖	18	7/15(土)~11/26(日)
15	琵琶湖のコイ・フナのお話 ~東アジアの中の湖と人~	19	7/14(土)~11/25(日)
16	フェアブルにまなぶ	20	4/29(火・祝)~8/31(日)
17	骨の記憶 -あなたにきざまれた五億年の時-	21	7/18(土)~11/23(月・祝)
18	湖底探検 ~びわ湖の底はどんな世界?~	22	7/17(土)~11/23(火・祝)
19	こまった! カワウ-生きものとのつきあい方-	23	7/16(土)~11/23(水・祝)
20	ニゴローの大冒険 ~フナから見た田んぼの生きものにぎわい~	24	7/14(土)~11/25(日)
21	生きものがたり-生物多様性 湖国から 世界から-	25	7/20(土)~11/24(日)



## 2) ギャラリー展示

タイトル	年 (平成)
ワクワクたんぼ探検 茶わん一杯のごはんから	10
ワクワク たんぼ探検パート II	11
フナをとる漁具	13
湖沼の伝説 中野晴生の旅	13
鉱物・化石展 「湖国の大地に夢を掘る」	13
写真のナゾとき大作戦 ～子どもによる地域調査～	13-14
米をつくる道具 一春・夏編一	14
湖の十字路-野洲川平野の弥生・古墳時代-	14
うるこの輝きに魅せられて 今森洋輔「琵琶湖の魚」原画展	14
森づくり～琵琶湖をはぐくむ森と人～	15
世界の水辺の暮らし 100年	15
のぞいてみよう博物館の舞台裏	15
楽石(らくせき)注意!	16
滋賀の植物標本・写真展 -村瀬忠義植物コレクション-	16
糸を紡いで布を織る -民具の復元・再現・体験-	16
ミクロの世界を探検しよう ～プランクトンの不思議～	16-17
淡海の川-水害、そして川とともに生きる-	17
タガベエのため池探検-人と歩む歴史と未来	17-18
こどもが見つめる ふるさとの川	18
博物館を楽しもう	18
つかんだ・つんだ・いつもいた あの生き物は、 いま…?	18

タイトル	年 (平成)
平成 18 年度「滋賀県民環境学習のつどい」	18
企画展でふりかえる琵琶湖博物館の 10 年	18-19
鉱物・化石展 「続・湖国の大地に夢を掘る」	19
注文の多い湖魚(こぎよ)の料理店	19-20
淡海の博物館・美術館	20
うるわしき琵琶湖よ永遠に -父子の見た湖国-	20
細密画で見る琵琶湖の水鳥たち	20-21
百年前の大震災 ～姉川地震に学ぶその備え～	21
古生物の復元 -科学と芸術が会うところ-	22
鉱物・化石展 22 ぼくらは大地に夢を掘る	22
「神秘の鍾乳洞 河内の風穴」写真展	22
近江のふるさと絵屏風と未来予想絵図	22-23
温故知新・近江の糸と織り	23
食事博 -未来につなごう近江の食とくらし-	23
化石が語る 350 万年前の生きものたち	23
湖国の鳴く虫たち-庭の小さな音楽家-	23
民具を科学する	24
鉱物・化石展 24 湖国の大地に夢を掘る IV	24
かわいいモンスター ミクロの世界の新発見	24-25
近江の博物学者 橋本忠太郎 -植物研究にかけた情熱-	25
アケボノゾウ -発掘から 20 年-	25

## 3) 水族企画展

回	タイトル	年 (平成)
1	里山の水生生物	8
2	ブラジルの淡水魚	9
3	古代湖の世界	9
4	北海道の淡水魚	9
5	南の島のさかなたち	10
6	都会にくらす魚たち	11
7	ため池の生き物たち	11
8	食卓にのぼる湖の魚	12
9	琵琶湖と大陸を結ぶ魚たち	12~13
トピック 展示	レッドリストの魚たち	13
10	おもしろナマズ大発見	13
11	滋賀のカメたち	14
12	魚の群れ探検	14
13	びわ湖・淀川・大阪湾 水の旅	15
14	外来生物 つれてこられた生き物たち	15

回	タイトル	年 (平成)
15	植物のある暮らし	16
16	飛ぶことを忘れた虫たち	17
17	ボテジャコは、いま…?	18
18	水辺の生き物	18
19	東アジアのタナゴたち	19
20	湖魚の今…。そして未来!	19
21	ぼくらのファール昆虫記	20
22	バックボーンができるまで!!	21
ギャラリー -展示	守ろう!琵琶湖・淀川水系の魚たち	22
23	魚はなぜ田んぼにやってくるのか	22
24	レッドリストの魚たち	23
25	ぼくらは田んぼの合唱団 -滋賀にすむカエルたち-	24
26	水中の忍者たち～滋賀の水生昆虫～	25

## (3) 交流

## 1) 17年間の交流事業件数の推移

(\*企画展関連講座・博物館実習・国際交流除く)

(\*連続講座等は総回数、複数日開催のイベントは日数)

## 事業別件数

		総合計
研究部	シンポジウム	8
交流事業	観察会見学会等	287
	ミュージアム観察会	9
	博物館探検	24
	博物館入門セミナー	59
	博物館講座	6
	入門専門講座	101
	指導者向け講座	63
	夏休み自由研究講座	33
	夏休み相談室	16
	夏休み生き物飼い方講座	6
	子ども一日学芸員事業	6
	たんぼ体験教室	82
	里山体験教室	52
	おうみ昔くらし探検塾	11
	教職員等研修	670
	学校体験学習	2133
	一般体験学習	248
	わくわく探検隊(体験学習の日)	308
	サテライト博物館出前授業・教員研修	39
	びわこ学習21プラン	3
	ミュージアムスクール	92
	自然調査ゼミナール	2
	職場体験	29
	教育普及視察対応	66
	地域活動の支援(館内)	656
	地域活動の支援(館外)	620
	家族対象環境学習プログラム	12
環境学習	博物館ガイダンス	300
	環境ほっとカフェ	8
	環境と科学のフェスティバル	3
	びわこ大縁日	8
	こどもエコクラブ事業	5
	あさひるぼん	6
	合計	5971

年度 (平成)	合計
8	84
9	262
10	200
11	312
12	307
13	232
14	313
15	374
16	399
17	514
18	543
19	434
20	380
21	357
22	454
23	374
24	432
総合計	5971

## 2) フィールドレポーター

琵琶湖博物館では、開館翌年の平成9年から、フィールドレポーター制度を運営している。「フィールドレポーター」とは、地域の方が滋賀県内の自然や暮らしについて、身の回りで調査を行い、その結果を定期的に博物館に報告していただくという「地域学芸員」のようなものである。

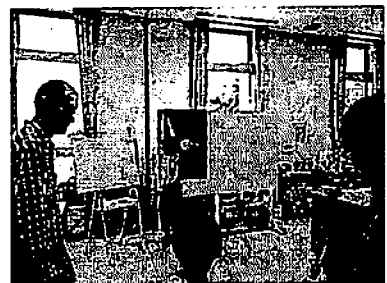
任期は1年で、原則として毎年3月後半に募集し、更新すれば何年でも引き続き行うことができる。（\*登録者数 平成25年12月31日現在 105名）

## フィールドレポーター登録者数の変遷

年度(平成)	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25
会員数	105	143	125	105	123	136	139	146	169	172	122	157	137	95	95	90	105

## これまで実施してきた調査

年度	調査名	年度	調査名
9	ツバメの巣を調べよう	16	夏のセミ調査
	水辺の貝を調べよう		野生生物の予知能力調査
	あなたが使った水の量	17	エドヒガン調査
セイタカアワダチソウを調べよう	夏のセミ調査-2		
10	タンポポ調査	18	竹の利用法調査
	ホタル調査/案山子調査		オオヨシキリさえざり調査
11	たんぼの生き物調査	19	2006年ミノムシ調査
	お地蔵様と地蔵盆調査		ツバメ調査2007
12	案山子調査/お雑煮調査	20	ボタンウキクサ分布調査
	田んぼの生き物調査2000		野生生物の予知能力調査-2
13	ドングリを調べよう	21	みちしるべ 今昔調査
	カマキリの卵のう調査		年末年始の食調査
14	私の選んだ21世紀に残したい湖国滋賀	22	TENTウムシを調べましょう
	へちま栽培完全マニュアル		“近江ことば いまむかし”調べ
15	身近な鳥を調べよう	23	イチョウウキゴケを探そう
	タンポポを調べよう		お正月遊び
16	ため池を調べよう	24	滋賀の天然水と水の神さま
	アオマツムシは鳴いていませんか		ミノムシ...その後~オオミノガはどうなったのか?~
	庭を訪れた蝶の調査		スクミリンゴガイ および タニシ類の分布調査
17	ガマ(蒲)を探そう調査	25	身の回りの生き物と環境について
	我家・我地域の年中行事の調査		カタツムリ調査
			小さい冬みつけた



## 3) はしかけ制度

「はしかけ」は男女の間にはいつて縁談のきっかけをつくる人を指す言葉である。本来の意味とは違うが、人と人の出会いを応援する人の役割は「はしかけ」さんの活動に通じると考えこの名称を使用している。

資料1

琵琶湖博物館のこれまでの実績

「はしかけ制度」とは、琵琶湖博物館の理念に共感し、共に琵琶湖博物館を作っていこうという意志を持った方のための登録制度である。登録を行うことで博物館内外での活動ができ、活動に関する情報を知ることができる。また、自分たちで様々な活動を企画・運営することができる。

この制度は平成12年8月から始まった。336名(平成25年12月31日現在)の登録があり、17のグループに属して活動を行っている。

はしかけグループ数と登録者数の変遷

年度(平成)	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25
グループ数	0	6	9	11	11	14	13	15	15	16	16	15	15	17
登録者数	89	104	120	204	294	361	381	347	374	371	300	340	356	336

はしかけグループの変遷

	グループ名	平成21年度以前のグループ名	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25
1	ザ! ディスカバはしかけ															
2	近江昔くらし倶楽部	展示室を楽しむ会														
		近江昔くらし倶楽部														
3	近江はたおり探検隊	中世のおんなたち														
		近江はたおり探検隊														
4	温故写新															
5	湖(こ)をつなぐ会															
6	ほねほねくらぶ															
7	たんさいぼうの会															
8	植物観察の会															
9	里山の会															
10	田んぼの生きもの調査グループ															
11	うおの会															
12	昭和歯倶楽部															
13	びわたん	休学学習の日														
		びわたん														
14	水はしかけ															
15	緑のくすり箱															
16	からすま通信局															
18		丸子船探検隊														
19		展示交流倶楽部														
20		中世なんでも探検隊														
21	淡海湧き水の会															
22	古琵琶湖発掘調査隊															
23	暮らしをつづる会															
24	タンポポ調査はしかけ															

## (4) 資料整備

### 1) 収蔵資料 平成 25 年 3 月末現在

	登録資料数	収蔵概数
地学	43,817	51,400
動物	106,147	298,709
植物	84,308	166,580
微生物	0	70,659
水族(生体)	22,647	22,647
考古	0	1,429箱と392
歴史	2	205
民俗	6,721	6,770
環境	0	45箱と765
図書	123,175と4,227タイトル	134,630
映像	75,766	101,700
合計	466,810	855,931

### 2) 重要文化財

琵琶湖博物館が保管する滋賀県指定文化財東寺文書(滋賀県所有本)のうち、中世分107通が国の重要文化財に指定された。

(主な史料)

山城国上桂庄重書案(東寺文書)

文亀2年(1502)10月5日、山城国上久世庄流田内検帳(東寺文書)

文亀元年(1501)9月18日、山城国上久世庄流田内検状(東寺文書)

永徳元年(1381)4月27日、山城国拝師庄年貢算用状(東寺文書)

長享3年(1489)4月26日、越後法橋裕深山城国拝師庄一方所務職条々請文(東寺文書)

### 3) 県指定文化財

滋賀県指定有形文化財(美術工芸品)

- ・松原内湖遺跡出土筥状木製品 2点 (H15.4.16指定)

滋賀県指定有形民俗文化財

- ・貫井の木地屋用具と製品 25点 (S59.3.30指定)
- ・八日市の柄屋用具及び製品 137点 (S61.3.28指定)

## (5) 多面的機能

## 1) 環境学習・生涯学習の拠点として

## (1) 学校団体の受け入れ 【平成23年度・平成24年度実績】

地域	校種	入館学校団体数		入館児童生徒数	
		平成23年度	平成24年度	平成23年度	平成24年度
県内	小学校	183	170	13,026	11,343
	中学校	23	26	2,053	2,280
	高等学校	27	21	834	649
	特別支援学校	17	13	272	142
	大学など	6	4	284	175
	合計	256	234	16,469	14,589
県外	小学校	266	253	24,000	21,746
	中学校	112	110	16,083	14,381
	高等学校	24	26	2,809	1,975
	特別支援学校	26	17	724	311
	大学など	33	48	1,643	1,806
	合計	461	454	45,259	40,219
総合計		717	688	61,728	54,808

## (2) 教職員等研修 【平成24年度実績】

実施日	曜日	講座名	受講者数	共催・後援
6/19	火	県中学校教育研究会 環境教育 部会研修会	20	滋賀県中学校教育研究会環境教育部会
7/24	火	草津養護学校教員研修	14	草津養護学校
7/25	水	滋賀県中学校 理科教育研究委員研修会	20	滋賀県中学校教育研究会理科部会
8/7	火	滋賀県小学校理科部会 研究委員総会	21	滋賀県小学校教育研究会理科部会
8/9	木	滋賀県環境教育協議会 (シジミ)	35	滋賀県教育委員会学校教育課
8/23	木	滋賀県中学校理科部会研修会	20	滋賀県中学校教育研究会環境教育部会
10/15	月	滋賀県視聴覚部会授業研究会	20	県小学校教育研究会視聴覚部会
10/23	火	初任者研修	36	滋賀県総合教育センター
10/25	木	初任者研修	36	滋賀県総合教育センター
10/30	火	初任者研修	36	滋賀県総合教育センター
11/1	木	初任者研修	36	滋賀県総合教育センター
11/16	金	滋賀県社会科部会授業研究会	30	県小学校教育研究会社会科部会
12/1	土	滋賀の教師塾	141	滋賀県教育委員会
2/26	火	理科支援員研修会	55	滋賀県総合教育センター
合計			520	

## ◆初任者研修のようす



# 資料1

## 琵琶湖博物館のこれまでの実績

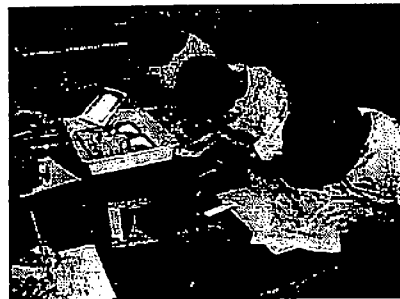
### (3) 学校団体向け体験学習 【平成 24 年度実績】

校種	主な活動内容
小学校	講義（琵琶湖と環境、琵琶湖の魚、琵琶湖の生き物、博物館の展示について など）、ヨシ笛作り、化石レプリカ、プランクトン採集と観察、昔のくらし体験（石臼・脱穀・手押しポンプ）、シジミストラップ、琵琶湖の富栄養化問題、魚の解剖、質問対応
中学校	講義（琵琶湖と環境、琵琶湖の魚、琵琶湖の生き物、博物館の展示について など）、ヨシ笛作り、化石レプリカ、水質検査、プランクトン採集と観察、プランクトンネットの作製、シジミストラップ、魚の採集（釣り）と解剖、外来魚の調理、野外観察（ヨシ群落など）、野外植物観察、水の汚れの測定、貝の観察、昆虫の観察、火山灰の観察、大地のつくり、3D琵琶湖、琵琶湖の富栄養化問題、質問対応
高等学校	講義（琵琶湖と環境、琵琶湖の魚類、博物館の展示について など）、プランクトンの採集と観察、シジミストラップ、魚の採集（釣り）と解剖、水質調査、湖岸調査（地形・植生ほか）、昆虫の生態観察、火山灰の観察、野外植物観察、大地のつくり、琵琶湖の環流について、展示利用学習、課題研究、質問対応

### ■体験学習実施数 【平成 24 年度実績】

校種	県内		県外		合計	
	学校数	児童生徒数	学校数	児童生徒数	学校数	児童生徒数
小学校	35	2554	39	3360	74	5914
中学校	16	2557	13	1154	29	3711
高等学校	11	204	5	132	16	336
特別支援学校	2	30	2	61	4	91
大学など	1	80	13	380	14	460
合計	65	5425	72	5087	137	10512

### ◆体験学習のようす



### ■サポートシート利用報告数とダウンロード数 【平成 24 年度実績】

	内容	利用報告数	ダウンロード数
学習シート	今と昔のくらし	1685	82
	むかしの道具と生活	2925	66
	森林の働き	2151	84
	琵琶湖の水・川の水	1513	123
	大地のつくり	1844	42
	琵琶湖のおいたちをさぐる	664	55
発見シート	小学校3年生	284	37
	小学校4年生	107	58
	小学校5年生	158	57
	小学校6年生	141	53
ナマズ博士の挑戦状	全館コース1問	1306	37
	全館コース2問	1143	40

※上表は、サポートシート様式をダウンロードした数と報告があったサポートシート利用児童数

### (4) 琵琶湖博物館環境学習センター 【平成 24 年度実績】

#### ○ 環境学習に関する相談対応、情報提供

自治会や子ども会などの地域団体、学校、NPO、企業、市町などから相談を受け、環境学習・活動に関する活動団体や講師の紹介、研修場所や企画内容等について情報提供を行うほか、

ホームページやメールマガジンなどにより発信を行い、環境学習の活動の場づくりを応援した。

① 環境学習に関する相談対応等

相談件数 249 件                      教材貸出件数 124 件

② 環境学習情報のホームページ「エコロレーが」の運用

アクセス数 158,072 件

③ 環境学習情報メールマガジン「そよかぜ」の発行

発行回数 計 21 回                      登録者数 719 人

④ ブース出展・発表等

5/23 「会員連携による環境学習出前講座について」

滋賀グリーン購入ネットワーク 通常総会発表 於：コラボしが 21

7/21・22 「第 5 回水辺の匠交流会」出展 於：ウォーターステーション琵琶

8/7 「滋賀県学校支援メニューフェア」出展 於：ピアザ淡海

11/15 「中学校理科教育講座『気軽にシンポジウム』」発表

1/12 「第 6 回生物多様性協働フォーラム」出展 於：コラボしが 21

1/14 「環境学習センターは緑の下の力持ち」第 12 回川づくりフォーラム  
発表・出展 於：コラボしが 21

2/2 「第 12 回草津市こども環境会議」出展 於：草津市役所

2/24 「第 12 回びわ湖レイクサイドマラソン」出展 於：烏丸半島

○ 環境学習の交流の場づくり

① 環境・ほっと・カフェ

地域団体等と協力して、環境活動を促進していくための活動交流会の場を設けた。

- ・ 「親子で自然で遊ぼう」 [1] 2/21, 37 名参加, 琵琶湖博物館  
[2] 2/28, 32 名参加, 朽木いきものふれあいの里
- ・ 「未来(これから)のくらしの作り方」 [1] 2/17, 13 名参加, 琵琶湖博物館  
[2] 3/10, 34 名参加, 針江生水の郷等

② 環境と科学のフェスティバル

県内の自然系博物館等と共同して、体験・工作コーナー、顕微鏡観察コーナー、展示などを実施し、環境や自然科学について関心を高める機会を設けた。

- ・ 7/22 「第 6 回博物館による環境と科学のフェスティバル」  
参加者 727 名 於：ピバシティ彦根

③ こどもエコクラブ事業

地域における子どもたちの自主的な環境学習や環境保全活動の取組である「こどもエコクラブ」の活動を、市町と連携して応援した。(県内会員数 124 クラブ 計 5,407 名)

- ・ 12/2 「淡海こどもエコクラブ活動交流会」 9 クラブ 123 名参加, 琵琶湖博物館
- ・ 3/24 「こどもエコクラブ全国フェスティバル 2013」 県代表 ホタルの学校(大津市)  
参加 於：早稲田大学(東京)





第6回環境と科学のフェスティバル「お魚コーナー」 環境ほっとカフェ「親子で自然で遊ぼう」

## 2) 文化・観光の拠点として

### (1) あさ、ひる、ばん 博物館を楽しもう！ (平成23年度から実施)

博物館の展示や様々な体験交流プログラム等を通じて、身近な自然や自分達の暮らしについて感じ考える機会を多くの方に持ってもらうと、朝から晩まで開館し、48プログラムの交流イベントを実施した。

はしかけ、フィールドレポーター、地域団体の方など、様々な人のご協力があり、3日間で1万人を超える方が博物館を訪れ、体験イベントに参加されたり、コンサートに聴き入っておられた。

#### <来館者数> 平成24年度

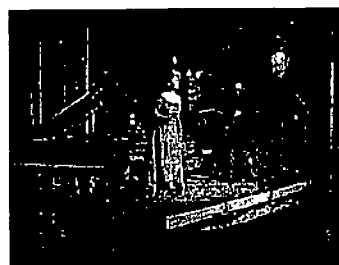
10/19 (金)、20 (土)	6,056名	9:30 - 21:00
10/21 (日)	4,431名	9:30 - 19:00
計	10,487名	



夜の森ミニ探検



昼のアトリウムコンサート



夜の atrium コンサート



アトリウムでのフロアトーク



バリ・ガムラン演奏体験



虹のレストラン出店風景

資料1

琵琶湖博物館のこれまでの実績

タイトル	内容	共催・協力
フロアトーク「さかなと俳句」	徳原館長による、俳句に読みこまれた琵琶湖の魚のお話	
森の観察会	屋外展示の森を散策しながら、植物を観察。	
夜の森ミニ探検	森の中を散歩しながら、昆虫を観察したり、バットデテクターを使ってコウモリや鳥の声に、耳を澄ませます。	
星空観察会	この時期は、月がよく見えます。望遠鏡で月や星たちを見てみましょう。宇宙や星について、スタッフがわかりやすくお話しします。	
琵琶湖博物館 とっておき？！資料展	博物館の収蔵庫の中には資料がいっぱい！ その中からいくつかを、今回のこのイベント限定で紹介。	
水族展示バックヤード・ミニ探検ツアー	ふだん見られない水族展示のバックヤードをご案内(所要時間約20分間)。10名毎に15分間隔で出発。	
富江家をもっと知ろう！本庄地区の水利模型	富江家のあった本庄地区の築内水路や水路と民家との関係を模型で紹介。	
富江家のくらし案内ツアー	S.39.5.10彦根市本庄町の富江家のくらしについて紹介します。	近江昔くらし倶楽部
近江の昔ばなし	近江に伝わる昔ばなしを、スクリーンや紙芝居を使いながら、お話しします。	草津おはなし研究会
魚の名前あてクイズ「わたしはだぁ〜れ！」	生きた魚を水槽に入れて展示し、魚の名前あてクイズなどをします。	うおの会
田んぼのエビ類の観察とペーパークラフト	顕微鏡で、田んぼのエビ類の顕微を観察したり、カブトエビのペーパークラフトを作ります。	田んぼの生き物調査グループ
びわたと絵本で楽しもう♪	幼児から小学校低学年の子ども向けに、手遊びと絵本の読み聞かせを行います。	びわたん
紙芝居「びわこの旅」	紙芝居「びわこの旅」を上演、「生きている琵琶湖」を合唱。	湖をつなぐ会
虫むし☆さいはっけん！〜リラックスしてきこう♪ホテルのおはなし・みんなであつろう！石の虫〜	天井に映し出された光と影の紙芝居をみたり、河原の石に絵を描いて、針金で足をつけたりして石の虫をつくります。	ザ！ディスクはしかけ
木の突で遊ぼう！	草の突グーツ遊びや、ドングリのおもちや作りをします。	フィールドレポーター
三度のメンよりたんさいぼう〜建屋であそぼう！〜	建屋の顕微鏡写真などをつかって遊びます。	たんさいぼうの会
里山の木を使った名礼づくり	生活実験工房周辺の木を使って、名礼をつくります。	里山の会
どんぐりで染めてみよう	生活実験工房周辺のドングリを採集し、煮出してハンカチを染めます。	近江はたおり探検隊
森の中で簡単ハンモックづくり	森の中で、ハンモックをつくるのんびりした時間を過ごします。	里山の会
みんなの写真展	はしかけグループ退故写新の会員の作品を展示。	退故写新
骨格標本を「触ってみよう！並べてみよう！」	骨格標本に実際に触れてみたい、組立てたりして、骨をつかって遊びます。	ほねほねくらぶ
バリ・ガムラン演奏 & 体験	バリの伝統楽器であるガムランを野外で演奏。	大阪音楽大学音楽博物館
<アトリウムコンサート1>	①アコースティックライブ(佐倉井マリ 平魚泳) ②南米JAZZバンド(ザ海千山千ズ) ③ヨシ笛コンサート(守山琵琶湖ヨシ笛アンサンブル)	
<アトリウムコンサート2> [Classic Night☆〜きらめきの音空間〜]	リコーダー 藤田隆 ピアノ 恒川裕子 ソプラノ 田中郷子 聴き応えのある各ソロと華麗なアンサンブル。	
<アトリウムコンサート3> [音楽博物館の楽器を使ったコンサート〜自然を感じる楽器の紹介と演奏〜]	動物の鳴き声や、雨の音など、自然の世界を感じることでできる楽器などの紹介と演奏。	大阪音楽大学音楽博物館
<アトリウムコンサート4> [クラリネット・アラ・カルト]	アンサンブル・クロリンによる、クラリネットのソロとアンサンブル演奏をお楽しみください。	
EFEM進賢「radio max」サテライト公開生放送	学芸員のトークも交えながら、博物館内から生放送。 パーソナリティ: 仙石幸一 ファミリーレストラン みずき	EFEM進賢
<虹のレストラン>	豚肉カレー おいしいがうれしが特産マーケット 魚のゆりかご水田米 地域食材などによる食のコーナー	

(2) 地域発見！参加型移動博物館

平成23年度に「マザーレイク滋賀応援基金」を活用して製作した移動型の展示キット（12点）を琵琶湖淀川流域をはじめとする各地で移動展示し、併せて学芸員や交流員によるワークショップ等を開催することで、滋賀県や琵琶湖に対する興味と関心を高め、琵琶湖博物館への誘客を図っている。

開催実績（平成23年度）

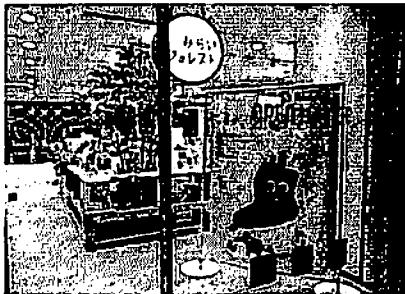
展示日程	イベント名	展示場所
1/10	知事の定例記者会見による記者発表	県庁広報室
1/14	第10回 地球研地域連携セミナー 「水辺の保全と琵琶湖の未来可能性」	ピアザ淡海
2/12	第3回生物多様性協働フォーラム	兵庫県公館
2/15～2/19	出前博物館事業	イオンモール草津(イオンホール)
2/28～3/13	サロン展示	県立図書館
3/15～3/25	出前博物館事業	ビバシティ彦根
3/26～4/6	ロビーギャラリー展示	甲賀合同庁舎

## 開催実績（平成24年度）

展示日程	イベント名	展示場所
4/8	ルシオールアート・キッズ・フェスティバル	守山市（立命館守山）
7/21～22	滋賀・琵琶湖ブランド展	イオンモール京都
7/26～8/4	琵琶湖がやってくる！もっと知ろう！日本一の湖	東京丸の内
8/4～5	滋賀・琵琶湖ブランド展	イオン高槻店
8/7	しが学び発見！	ピアザ淡海
8/25～26	滋賀・琵琶湖ブランド展	イオンモール草津
10/27～28	地域発見！参加型移動博物館	フォレオ大津一里山
11/11	生物多様性協働フォーラム	大阪
11/17～18	おいでーな滋賀 in 福岡天神 観光キャンペーン	天神タイムズスクエア
11/23	びわ湖源流のたかしま平成24産業フェア&そばフェスタ	今津総合運動公園
12/8～9	京都環境フェスティバル	京都総合見本市会館
2/26～3/4	大近江展 高島屋	高島屋日本橋店

## 開催実績（平成25年度）

展示日程	イベント名	展示場所
4/7～8	ルシオールアート・キッズ・フェスティバル	守山市（立命館守山）
4/28～29	ラ・フォル・ジュルネ	ピアザ淡海
6/15	移動展示を考えるシンポジウム	兵庫県立人と自然の博物館
7/1	びわ湖の日	大津市立瀬田北中学校
7/12～14	滋賀ブランド展	東京新国立劇場
7/15	びわ湖環境フェスタ	奥びわ湖スポーツの森
7/20～21	水辺の匠	ウォーターステーション琵琶
7/31	しが☆まなび☆発見！	ピアザ淡海
8/6	しが☆まなび☆発見！	米原文化産業交流会館
8/23～25	滋賀ブランド展	イオンモール草津
9/21～25	滋賀ブランド展	JR大阪駅時の広場
10/27	遊びの宝島へGO！	大津市立瀬田公園 体育館
10/30	第3回淡海の人大交流会	品川プリンスホテル
11/23	第7回近畿「子どもの水辺」交流会	琵琶湖汽船ピアンカ 船上
12/14	京都環境フェスティバル平成25	京都府 総合見本市会館
2/10～19	ニッセイ・ライフプラザ丸の内 みらいフォレスト	滋賀県 東京事務所
2/15～19	近鉄百貨店草津店 4階催事場	滋賀県水産後継者連絡協議会



東京丸の内会場



滋賀県高島市会場

## 3) 国際研究・交流の拠点として

## (1) 海外博物館との交流協定

博物館名	締結年月日
フランス国立自然史博物館	平成10年9月25日
中国科学院水生生物研究所	平成14年9月22日
湖南省博物館	平成25年11月19日

## (2) 海外からの視察・研修 【平成24年度実績】

海外からのさまざまな団体による視察や研修に対応しており、平成24年度は38件に対応した。

月	日	団体名	依頼者	人数
4	10	JICA研修第1回産業廃水処理技術(B)コースによる一般研修	北九州国際技術協力協会	6
4	20	韓国市役所および京畿道庁	日本電気硝子株式会社	22
5	16	インド高校生訪日団	財団法人日本国際協力センター	25
5	15	関西高級中学交流	台湾国立中学校	37
5	23	日中共同SD人材育成事業短期研修	京都大学	12
6	21	JICA環境保全型稲作技術研修	農業技術振興センター	4
7	17	中国の博物館間の情報交流(文化庁事業の一環)	日本ミュージアム・マネジメント学会	4
7	22	社会福祉法人近江ふるさと会の夏季奉仕学生受入にかかわる友好交流団(県事業の一環)	社会福祉法人近江ふるさと会	37
7	23	環境問題にかかわる海外学生視察団	神戸女学院大学	16
8	20	日中青少年サイエンスキャンプ	独立法人科学技術振興機構	60
8	21	中国昆明理工大学視察団	京都大学	20
8	23	中国湖南省視察団	社団法人日中協会	16
8	26	台湾桃園県視察団	社団法人びわビジターズビューロー	20
8	29	集団研修「水環境を主題とする環境教育」	国際湖沼環境委員会	7
9	2	中国貴州省視察団	宇部環境国際協力協会	27
9	8	台湾台北芸術大学視察団	台湾台北芸術大学	8
9	19	JICA集団研修「水環境モニタリング」	日本環境衛生センター	14
10	2	JICA研修団視察	横浜ウォーター株式会社	18
10	2	JICA研修団視察	公益財団法人国際江メックス	13
10	11	JICA研修関連	国立民族学博物館	10
10	24	平成24中東地域持続可能な観光開発研修	太平洋人材交流センター	9
11	1	工学部留学生視察団	大阪大学	50
11	2	中国清華大学交流視察団	京都大学	8
11	15	JICA産業廃水処理技術コース研修	北九州国際技術協力協会	7
11	16	JICA「生活排水対策」コース研修	北九州国際技術協力協会	9
11	16	JICA「アフリカ都市上水道技術者養成」研修団	横浜ウォーター株式会社	11
11	24	JICA「インド上下水道事業の運営・維持管理技術」研修団	横浜ウォーター株式会社	15
11	27	ASEAN大学生環境フォーラム	イオン1%クラブ事務局	110
11	28	台湾文化部	台湾文化部	3
11	28	マレーシア政府機関	(株)ミヤコ国際ツーリスト	3
12	4	韓国華城市長ら視察	日韓交流支援センター	4
12	18	カンボジア国「淡水魚養殖技術」研修	独立法人国際協力機構横浜国際センター	2
1	10	体験学習	ELIZABETH ARMSTRONG 大学教授	12
1	19	中国無錫市人民政府	中日文化経済交流協会	23
1	29	JICA研修「湖沼環境保全のための統合的流域管理」	国際湖沼環境委員会	10
3	6	外国人専門家の団体視察	国際湖沼環境委員会	10
3	21	中国教育関係者視察(県事業の一環)	社団法人びわこビジターズビューロー	8
3	26	環境観光キーパーソン招請事業	社団法人びわこビジターズビューロー	8

(1) 琵琶湖博物館協議会での意見

1) 設置趣旨

博物館の運営に関し館長の諮問に応ずるとともに、意見を述べる機関として、博物館法第20条第1項の規定に基づき、滋賀県立琵琶湖博物館の設置および管理に関する条例第6条の規定により設置されている標記協議会を開催し、議論いただいた。

2) 委員名簿

氏名	所属団体・職名等(※)
市川 聡平	姫路市立水族館館長
小田 典宏	公募委員
河上 哲昭	野洲市立中主中学校校長
菊池 玲奈	結・社会デザイン事務所代表
北島 泰雄	草津市立常盤小学校校長
津屋 結唱子	滋賀次世代文化芸術センター副代表
出口 晶子	甲南大学文学部歴史文化学科教授
中田 春美	近江歴史回廊倶楽部
西川 輝昭	東邦大学理学部教授
橋詰 純子	カワセミ自然の会
伴 修平	滋賀県立大学環境科学部教授
廣畑 諭	パナソニック株式会社ホームアプライアンス社 総務グループひろげるエコ推進チームチームリーダー
前田 雅子	公募委員
松江 仁	京都放送(KBS京都)滋賀支社長
山本 尚三郎	滋賀県脊髄損傷者協会副理事長

※所属団体・職名等は、平成24年9月～のものです。

3) 開催概要(平成24年度以降)

年度	回	議事内容
平成 24年	1	(1)新琵琶湖博物館の創造(リニューアル)について (2)琵琶湖博物館中長期基本計画平成23年度行動計画の実績および平成24年度行動計画について
	2	(1)琵琶湖博物館中長期基本計画平成24年度行動計画の実績・評価および平成25年度行動計画について (2)新琵琶湖博物館の創造(リニューアル)について
平成 25年	1	新琵琶湖博物館の創造(リニューアル)について
	2	(1)新琵琶湖博物館の創造(リニューアル)について (2)琵琶湖博物館中長期基本計画平成25年度行動計画の実績および平成26年度行動計画について

## 【意見抄録】

## (1) リニューアルの方向性について

- ・ 滋賀県外からも多くのお客さんに来ていただく仕掛けが必要。「関西をリードする環境学習、情報発信の拠点」にするのがリニューアルの一つの目標。
- ・ 琵琶湖の汚染、温暖化が琵琶湖に与える影響など、滋賀県だけでなく流域の人たちにも、琵琶湖博物館が中心になって情報発信していく。

## (2) 展示について

- ・ いまのディスカバリールームにある「ザリガニになろう」のような展示が、全体にひろげられたらいい。最初に遊ぶ要素がある。遊ぶところから発見があり、そこから環境に対する感覚が生まれてくるような展示。
- ・ 展示について、人が生で説明する仕組み、人と会話して展示物について話をしていく仕掛けが、やはり必要ではないか。
- ・ 例えば、水槽の魚を見ていると別の展示で見た琵琶湖の歴史がリンクしてくるなど、知識のクロスオーバーは新しい発見につながるし、おもしろい。フロアの上下で異なるテーマや展示物が有機的につながっているなど。
- ・ 大きな博物館なので、「あれ、何だろう」と振り向いて立ち止まるというような工夫が増えるといい。例えば、野鳥の標本の展示の中でフクロウがつぶやくなど。
- ・ 体験する、さわるといのが重要。ここへ来れば、かならず琵琶湖の水に、足もしくは手で触れる機会がある。そういう空間がほしい。ドクダミの葉っぱを子どもたちにかがせると、「臭い」という体験を忘れない。そういう体験をどれだけたくさん与えていくか。
- ・ その温度でしか棲めない生物というのがいる。極寒、高温多湿など環境を疑似的に体感できる空間、自分の肌で体験できるものがほしい。
- ・ 季節ごとに、「いま、この鳥が来ています」というようなことを、水辺・畑・山などに分けて示されているといい。自分の家の庭に来ていた鳥を発見できたり、探しに行こうかという気になったりする。夏場の哺乳類の展示が冬場には変わっているようなことができれば、宝探しみたいな楽しみ方ができるのでは。
- ・ 疲れたときに休む場所がない。一日で緩急をうまく使い分けられるような空間・展示配置の工夫がほしい。

## (3) 交流について

- ・ 中学校でも、子どもたちがいろんなものを集めて、環境展示をつくる。そういう取り組みと協働しながら、学べる機会、場所になればいい。
- ・ 高校の科学部の生徒たちと一緒に研究するなど、待っているだけではなく、大学や高校に自分たちが出ていって、交流を進める。交流のために積極的に出ていく博物館になってほしい。
- ・ 淀川水系の環境保全に関わっている多くのボランティアグループと連携がとれないか。内部に限定せず、外部のグループの人もここに来て、何かできるような場があるといい。
- ・ 博物館で資料を見てから地域で調べる、地域で調べたが、わからなかったことを博物館に来て確認するというようなことができると、子どもたちはもっと博物館に興味をもつのでは。

- ・「これを調べるには、この地域の、この場所なら安全」というような情報提供があるといい。
- ・夜の博物館ツアーは大成功しているが、春夏秋冬でやってほしい。スペシャルな異種コラボができると、新たな博物館の空間の楽しみ方が出てくる。「いつ来てもワクワク」より、素敵なプログラムをプロデュースする方が集客につながるのではないかと。
- ・滋賀県教育委員会の教育振興基本計画の中に「うみっこ」「やまのこ」「たんぼのこ」「ホールのこ」「つちっこ」があるが、6本目の柱に「びわ博っこ」構想を入れていただき、滋賀県の教育と連携した取り組みをさらに推進してはどうか。
- ・企業との連携では、生態系の管理のようなことを、実際に社員が参加をしながら学べるような場所がほしいと企業の方には言われていた。例えば、植生管理など。地元のおばあちゃんに四季折々の家の飾りつけを行ってもらうなど、得意分野を活かせる参画の仕組みをもっと取り入れていけばいいのではないかと。

### (4) その他

#### 集客について

- ・集客層を決めて、方向を明確に示す必要があるのではないかと。来るお客さん全てにうけるような総花的な内容だと、逆に魅力につながっていかない。
- ・1回来た人に、「楽しかった。また来よう」とどうすれば思ってもらえるのか。博物館で何を体験させられるか。例えば1回目は化石掘りで、次回はまた異なる体験ができるのであれば、3回、4回と来るようになる。
- ・1人でも多く、滋賀県に住んでいる人に来てもらいたい。そのためには、来館が1回きりの年配の方々に再訪してもらいたい。年配の方々の中には、里山の自然に直にふれている方もいる。そうした生活に根差した「取り組み」をつなげ、発信する役割を博物館が中心になって行えるといい。

「親子三代」は、いま重要なターゲット。親子三代向けのプログラムは大事で、集客がいちばん見込めるのではないかと。家庭教育の方にベクトルを向けて、「生活文化の発信」という貴重な部分を担ってもらいたい。

#### ICT（情報通信技術）の活用

- ・ウェブ上に関心を引く資料をアップすることで、実物を見たくなる気持ちを喚起し、集客につなげる。人をどうやってここに来させるのかを考えることが大事。

#### ユニバーサルデザインの推進

- ・現在考えられる最良のシステムを導入しても、さらに変化していく状態だが、先のことを考えた最良のシステムを考えて導入してほしい。

#### レストラン・ショップ

- ・伝統野菜、昔野菜、地産地消などに、とことんこだわったレストラン。昔と今をつなぐ体験につながる。
- ・魅力的な食事があると、長居もできるし、パスポートを買う気にもなる。

## (2) 新琵琶湖博物館創造基本計画検討会議での意見

### 1) 設置趣旨

本年度「新琵琶湖博物館創造基本計画」を策定するにあたって、専門的・具体的な検討をしていくため、各分野に精通した有識者による「新琵琶湖博物館創造基本計画検討会議」を開催。

### 2) 委員名簿

氏名	所属団体・職名等	分野	主な検討内容
金山 喜昭	法政大学 キャリアデザイン学部 教授 NPO 法人野田文化広場事務局長	博物館学 博物館経営	・博物館学 ・博物館経営 ・博物館の基礎機能 ・博物館の役割 ・博物館評価
松野 精	武庫川女子大学 生活環境学部情報メディア学科 教授 前CD I 取締役	展示	・展示手法 ・展示技術 ・プログラム開発
芝原 達也	習志野市谷津干潟自然観察センター(指定管理者 社団法人アーバンネイチャーマネジメントサービス) 第三事業部長	交流	・交流事業、課題の抽出、改善点 ・教育・学習プログラム ・幼児利用 ・環境学習センター ・新たな協力者制度
毛利 公一	立命館大学 情報理工学部情報システム学科 准教授	情報	・ICTの見直し ・システム形成、新手法 ・受発信機能の強化
山本 哲也	新潟県立歴史博物館 経営企画課 専門研究員	UD等	・ユニバーサルデザイン ・館内環境の改善

### 3) 開催概要(平成 25 年度)

回	開催日	主な議題
第1回	平成 25 年 6 月 20 日	ビジョンと基本計画策定に向けて
第2回	平成 25 年 8 月 1 日・7 日	現地視察、現状の議論
第2-2回	平成 25 年 8 月 11 日	ICT (情報通信技術) について
第3回	平成 25 年 9 月 13 日	中間とりまとめに向けた検討
第4回	平成 25 年 12 月 22 日	素案に向けた検討
第5回	平成 26 年 2 月 25 日	案に向けた検討



### 【意見抄録】

#### (1) リニューアルの方向性について

- ・ 市民などに対し、「博物館は変わったんだ」というアピールが必要。「誰が見ても変わったんだ」ということを、どうアピールするか。応援団がいる。
- ・ 世界へ情報発信をしていくためにも、琵琶湖博物館は滋賀県の“ブランド”というものの1番の核になるもの。
- ・ 20年前とは時代背景が変わっている。少子高齢化になり、高齢者をどう攻めるか。格差社会で、社会的に排除されている人も増えている。県内すべての人を対象にするリニューアルであってほしい。興味がない人も来られるような場にしてほしい。
- ・ 学びで終わるのではなく、生活スタイルに反映され、実践・参加につながっていくべき。スタイルを習う体験を提供するのは、館内ではなくフィールド。展示はフッキング。
- ・ 地域の人と守っていこう、というつながりをつくること。いかに一緒にやっていくか、そのためのプログラムができるとよい。館全体、内外をフル活用する。
- ・ マーケティング的なセンスを持った人など、外部の人たちとのつながり、協力が重要になってくる。これまで博物館に関心のない人を考えるときに重要になる。
- ・ 博物館の樹を増やすことが博物館の目的だとは考えていない。博物館の樹が触媒になって、県民の樹がたくさん生えて育って林となり森となることを夢見ている。
- ・ 来館者の増加に効くのはリニューアル（目新しさ・話題づくり）だが、本質は生活様式の提案にある。裾野の拡大（一般の人が楽しめる博物館になること）も課題。
- ・ 発信力があっても「湖と人間」のあり方につながらないものは意味がない。

#### (2) 展示について

##### 全体

- ・ 地球の成り立ちから現在までの時間を一つの帯で追いかける展示はできないか。いま自分が見ている展示が、どの時代のものなのかがよくわからない。ICT(情報通信技術)などで、個々の展示がどの時代と関わっているのかがわかるような工夫がほしい。
- ・ 現在の展示では、「いまの自分と琵琶湖との関係」に戻っていかない。琵琶湖とのかかわりについて考えるものが入口・出口にほしい。
- ・ 「総合博物館」というのは、いろいろな分野がつながり合っていないといけない。「別コーナーのここを見れば、つながる」というような仕掛けがあるといい。
- ・ 20年の間に、資料の入れ替えやキャプションの手直しなどが出てくる。業者に頼らないネットワークが軽い組織、仕組みを考えたい。
- ・ 多くの利用者は展示を見て判断する。展示にちょっと手を入れたところがあり、それが頻繁に行われていると利用者は敏感に感じとる。そうしたことも行うべき。
- ・ 展示の説明をパネルだけでなく、小型プロジェクタ等を使って表示するか、タブレット等を活用するなど可能な限り検討してみてもいい。
- ・ 研究の楽しさを伝えて欲しい。研究室・フィールド等の場所、研究のプロセス、発見のプロセスなどを体験・共有してもらおう。

- ・ 知識を伝達する展示が詰め込まれると、疲れてしまう。分類展示的なものは、収蔵展示のように、ある意味「隠す」工夫が必要か。
- ・ 各室のメイン展示くらいは、見た瞬間に素人でもその意味がわかる、理屈ではなく、一目でその部屋の展示が何を訴えようとしているのかわかる展示であるべき。

### A展示室

- ・ 「変化」については、映像を支援的に使って示していくのか、モノそのもので見た人に直観的にわかるものがあればいい。映像・音響を使ってほしい。地学・生物・気象などの分野では自然の偉大さを表現してほしい。
- ・ 来館者が自分で手回しで時間を動かしてみるというのはいい。

### B展示室

- ・ 「自然へのまなざし」展示は、「昔の人が自然をどう見ていたのか」と「いまの私たちが琵琶湖をどう見ているのか」と対比できる、いい軸になる。
- ・ 昔の人の暮らしが実感できる展示にできないか。為政者の記録より庶民の暮らしが伝わるもの。丸子船が商人や権力者の乗り物なら、湖畔で生活していた庶民が利用した舟を置く。琵琶湖の恵みから何を得ていたのかなど。貝塚の展示だけでなく、貝を食べてどんな暮らしをしていたのか実感できる展示にしてはどうか。当時の衣装を着る展示はどうか。
- ・ 例えば掛け軸のレプリカをつくって、それを実際に掛けさせてみる。資料を取り扱う体験をさせることも、研究とモノの間をつなぐことになる。

### C展示室

- ・ 富江家を残すのは意義があるが、バブル崩壊という大きなエポックで成長していく社会が大きく変化した。それで、琵琶湖と人々の生活がどう変わったのかを入れておかないと、昭和39年の生活は唐突に映るのではないか。今は人と琵琶湖の関係が希薄になっている。ヨシの利用など、琵琶湖と共生している例を出しながら、今と昔の暮らしの対比があるとよい。
- ・ 「湖と人の関係を考える」うえで、「いまのままでいいのか？」という問題提起を行うのがC展示室。自分たちの暮らしへの反省を促すメッセージが必要なのは。暮らしがどこで変わったのかを、A・B展示室に遡ってみる動機づけになる。

### 水族展示

- ・ 魚の名前がわからない。泳いでいる魚をさわると、魚の名前が出てくればいい。
- ・ 水槽群のなかに映像の水槽を設ける。「なぜ映像なの?」「これは絶滅危惧種」といった展示。水槽と写真、水槽と標本もできる。公開を制限することで、危機感を生み出すことも。
- ・ スマホでCGの魚と情報を持ち帰り育てられるというのは、展示を広げる発想の事例。
- ・ 主役は魚だが、壁面はその引き立て役。色彩デザイナーなどの力をかりて、全体の調和を見ながら魚を活かすアイデアを考えてもらい、館で総合的に検討してはどうか。

### 屋外展示

- ・ web カメラの設置、各種インターネット動画サイトの活用をしてはどうか。

### (3) 交流について

- ・ イベントを手づくりで考えようというのは盛り上がるし、結びつきを深めていく1つの手段になる。活動団体を招いて交流会やポスターセッションを行う。特産品の出展ブースもよい。
- ・ ジュニアレンジャーのような日常の制度と、1年に1回、力を合わせてやるのと。イベント自体、関心のある人をふやしていけるのでいい。
- ・ 教養が深まるだけでなく、今度は自分が琵琶湖のために実践・参加する。直接、琵琶湖に関わっていくような、気がついたら湖岸のゴミをひろっているような行為が、この博物館から育っていけばいい。
- ・ フィールド活用の比重が増すと、利用者の野外活動をガイドするスタッフ、漁業や農業、琵琶湖の文化体験を案内・指導できる地域の方の協力・参加が必要。地域の関係者との交流は、研究の充実にも寄与する。学芸員には、様々な関係者の間に入るコーディネーターの役割が求められる。
- ・ 親子向けに、飛び込み参加できるイベントがほしい。ものづくりは時間を過ごせ、人気がある。地域の人が指導するイベントやプログラムが欠かせない。
- ・ 実用性、生活のなかの“必要性”と結びつく仕掛けがないと。大人に利用してもらおうというのは難しい。
- ・ ラムサール条約の紹介がどこにもないのはまずい。交流の根拠として特に重要。
- ・ 高校や大学との連携では、調査や文化体験などフィールドワークが有効ではないか。

### (4) その他

#### ICT (情報通信技術) の活用

- ・ 展示での ICT の使い方については、①利用者が、ICT があると便利に感じるもの ②展示を魅力的に見せるもの ③展示を深めていけるもの この3つくらいの使い方がある。
- ・ ICT はコンテンツの理解や魅力の倍増に役立ち、参加を促す。展示の流れに誘導するにも ICT は親和性がある。ダイナミックな動きのあるもの、目に見えないものを見せるにも有効。Wi-Fi やサイネージなど、新しいものを導入すると便利になる。
- ・ 学芸員の研究成果をシェアする、一般の人とコラボする、といったことを、いかに簡単にできるようにするかといった観点から情報システムを考えたい。

#### ユニバーサルデザインの推進

- ・ 車椅子で回ると、広いから疲れるのは当然。そのストレスをどこかで緩和しないと。
- ・ 聴覚障害者やカラーUD の視点など、いろんな障害について考えていく必要がある。
- ・ ソフト面を含めて考えていかないと、本当の意味でのUD整備はできない。

#### レストラン・ショップ

- ・ 水族の魚がレストランのメニューにあったり、とれたての魚が食べられたり、展示とつながるものがあると面白い。

**(3) 県民ワークショップ・ピアレビューでの意見**

1) 県民ワークショップ

**開催趣旨**

「新琵琶湖博物館創造ビジョン」の策定にあたり、琵琶湖博物館のリニューアルに期待すること、さらなる連携、新たな展開の可能性等について、今後さらに博物館を活用していただきたい大学や地域企業、関係者の方々にそれぞれご意見、ご提案をいただき、意見交換を行った。

場所	実施日	主催	内容
滋賀県立琵琶湖博物館 1階セミナー室	平成24年11月25日 13:00~16:30	滋賀県立琵琶湖博物館	○大学と琵琶湖博物館との連携について

**【意見抄録】**

(1) 琵琶湖博物館への理解を高める宣伝・広報活動

- ・ 大学生には、博物館が何をやっているところかイメージできない。博物館の知を利用するための方法もわからない。博物館から大学にアプローチして教えてほしい。
- ・ 学生が博物館を知るための取り組みをもっとしてほしい。企画展等トピックスの提供、出前授業、顔の見えるイベント、気軽に参加できる観察会、SNSの広報、博物館系のフェスティバル等への出展など。

(2) 大学生が活用しやすく参加しやすいしくみの構築

- ・ 大学との連携で何をするか、目的を明確化する。大学とともに、県民とともに調査・研究し、情報発信する交流研究が大切。
- ・ 大学生の特質であるマンパワーを活かしたさまざまなボランティア活動への参加を促す。博物館はスタッフ不足を解消、大学生は館員や一般市民との対話でコミュニケーション力を高める。

(3) 展示、学芸員、設備等についての感想・要望

- ・ 博物館は敷居を低くするため、スタッフが見える場、仕事を知ってもらう、見せる場があるとよい。
- ・ 学生が楽しめるアカデミックなコーナー、学生向け企画展、参加型体験プログラムなどがほしい。
- ・ 自分の発見や意見をリアルタイムで話題にできるように、展示室内へテーブルや椅子を設置してほしい。
- ・ 大学生が「遊びに行こう!」と思えるようなエンターティメント性をプラスしてほしい。隠れたデートスポット、夜景がきれい、見晴らしのよい場所にベンチ、おしゃれなカフェやスイーツ、変わったお土産、レストランで食材の豆知識、季節感のある展示、レンタサイクルや地元の店などと連携したスタンプラリーなど。

## 資料2 意見聴取・利用者調査

場所	実施日	主催	内容
滋賀県立琵琶湖博物館 1階セミナー室	平成25年2月7日 13:00～15:30	滋賀県立琵琶湖博物館	○館内視察 ○意見交換会 『地域企業と琵琶湖博物館との さらなる連携と新たな展開の可能性』

### 【意見抄録】

#### (1) 企業のCSR活動の支援

- ・ 博物館の学芸員と共に、絶滅危惧種を増やす活動を行っているので続けていきたい。
- ・ 博物館と地域の子どもたちと、企業との交流をさらに増やしていきたい。交流を増やすためには、今やっているそうした活動を博物館で紹介してほしい。
- ・ 工場の裏山で、生態系の保全、希少種を保護するという活動を行っているので、博物館からのアドバイスをもとに進めていきたい。
- ・ 貸切という形で、小中学生を対象に、湖上で環境学習を行っている。学芸員が船の中でお話をするなど、内容が濃いものにしたい。
- ・ ビオトープ開放の時に、市民と交流することになるので、博物館の色々なコミュニケーションの方法を借りたい。

#### (2) 博物館の活用

- ・ 企業の社員教育として実物を見て体験をする、移動博物館的なものをしてほしい。
- ・ 経済団体と琵琶湖博物館とで、生物多様性やCO2削減をテーマとし、サテライト博物館のような形で行ってほしい。
- ・ 企業の新人研修がある日は、それに使えそうなセミナーがあるなど、特別なイベントをつくり、行く動機とし、企業が集まるために開放する日をつくってほしい。
- ・ 企業側がやっている事例紹介をしてもらおうと、住民の方が参加できる。企業が出すイベント等を案内してもらおう、など、直接住民の方々とコミュニケーションをとれるような場をつくってほしい。
- ・ 琵琶湖博物館が持っているイベントに活用できるツールを、共同企画で開発したい。

#### (3) サポーター組織

- ・ 15年前と比べて、生物多様性という言葉で集まる企業が増えた。琵琶湖博物館の理念に賛同した、サポーターのような組織をつくり、予算取りの大きな力となるようにするとよい。

場所	実施日	主催	内容
滋賀県立琵琶湖博物館 1階セミナー室	平成26年2月8日 13:00~16:00	滋賀県立琵琶湖博物館	1. 学芸員による琵琶湖博物館現場解説 2. リニューアルの説明および意見交換

## 【意見抄録】

## A 展示室

- ・ 普段気づかない点を、音声ガイド・解説リーフレット・ボランティアガイドなどで伝える。
- ・ 聴く・さわるなどの体験性。興味や関心に合わせて背景をさらに調べられる工夫もほしい。
- ・ 毎日1時間程度のガイド・ツアーや、「クラゲの話」のように石の話をする時間を設けては。
- ・ 鉱物探しや、化石にさわれる。クイズもいい。イベントでも大掛かりな展示も楽しみたい。
- ・ 光る石などを見たい。ブログでの宣伝も有効。黄色いナマズのような目玉もほしい。
- ・ 月1でも夜まで開館している日があるとよい。比叡山に沈む夕日を見るだけでもすばらしい。

## B 展示室

- ・ 自然災害についてまとまった展示が滋賀県にない。長いスパンで課題提示できる展示を。
- ・ 殺生のある暮らしは、「石にも木にも神様が宿っている」という思想から入る方がいい。
- ・ 丸子船は浮かべて乗るべき。リピーター対策の五感展示。神楽をする場所があるといい。
- ・ 歴史セミナーは人が集まる。歴史的な場所を案内、博物館でおさらいというルートをつくる。
- ・ 景色のいい所にペアチャーターもほしい。二人でできる体験メニューがあると彼女を誘える。
- ・ 表層なだれを守る祠の存在など、地域で聞いてまわった話を示せる場所を作ってほしい。

## C 展示室・屋外展示

- ・ 屋外展示は解説を聞きながら観察するとおもしろいが、情報がないとわからない。
- ・ 新しい話題や次回のイベント告知などが展示内に頻繁に入っていると次も来たくなる。
- ・ 展示やイベントと連動したランチ、(沖島などの) 伝統食をレストランで食べられるといい。
- ・ 自分の共感を残せる展示、自然科学部系の学生の展示コーナー、裏側を伝える展示など。
- ・ 展示の「みどころポイント」があるといい。それが手づくりのポップだと身近な感じがする。
- ・ 「富江家」は、若い世代にとっては違和感。昔のおもちゃなど生活感のあるもの、赤ちゃんがいる当時の生活表現、セルフガイドや思い出の語り等があればもっと浸れる。
- ・ カワトの暮らしを伝える写真など。家と川とのつながりをもっとうまく表現できるといい。

## 水族展示

- ・ 説明版の目に入りやすい場所の工夫。キャラクターを使った案内、スマホを活用したテーマ別コースや見どころ案内も。見どころを教えてもらえると興味が出る。共感したい人もいる。
- ・ フロアトークがないと伝えたいことが伝わらない。解説する人の人柄や生活がわかる展示も。
- ・ アユの飼育の苦勞など、娯楽施設ではないことをバックヤードツアーで知らせるとよい。
- ・ 田んぼの生態やナマズの産卵など他の展示室との関連を、サイン誘導などで連動させる。
- ・ 体験的な展示、金魚や錦鯉など華やかな展示、ビワコオオナマズがもっと目立つ展示など。
- ・ 個水槽にも自然な雰囲気。古代魚コーナーは狭く、擬岩もないのでさみしく感じる。
- ・ マイクロアクリウムでは水質の変化と暮らしとの関係も解説するとよい。
- ・ 放流してはいけない生き物の紹介などで、固有種を守ることを啓発してほしい。

## 資料2 意見聴取・利用者調査

### 2) ピアレビュー

有識者より、琵琶湖博物館の課題、リニューアルへの提案等について意見をいただいた。

#### ◆開催概要

回	実施日	テーマ
第1回	平成24年11月6日	国際化、ユニバーサルデザインについて
第2回	平成24年11月29日	当館展示、基礎機能に対する評価、今後の展開等
第3回	平成24年12月19日	当館に対する評価、広報戦略等
第4回	平成25年3月14日	当館、ビジョンに対する評価、提案等
第5回	平成25年3月29日	評価システム等
第6回	平成25年3月30日	当館、ビジョンに対する評価、提案、交流制度等

#### 【意見抄録】

##### 国際的な視点

- ・ 館内の表示は多言語表記する。在住外国人の特徴(携帯あり、車は所有など)を考慮し、道中に外国語表記を増やし、招き入れることを検討。
- ・ やさしい日本語を使うなど、相手にとって必要な情報を選ぶ。次の行動を具体的に示す。
- ・ ICTを活用し、電子機器の導入(多言語対応) / 電子ペーパーによる多言語対応解説パネル
- ・ 来館者の知識から入り込んだ、外国人来館者の持つ、知識・興味につながる展示への工夫。

##### 展示

- ・ 動植物が住んでいる環境等について、直感的に理解できる工夫があればよい。
- ・ 来館者がどこに立ち止まってどのくらい解説を読んでいるのかを見、再考する必要あり。
- ・ 水族でいうとタッチングや音を聞くなど、体を動かすことや五感で感じる必要がある。

##### 全般

- ・ 関心をもたない多数の住民のどこまでターゲットとし、誰にどのように伝えていくのか? 学ぶことと楽しむことの接点をさぐる必要がある。関心を持っていない人に学ぶ必要がある。
- ・ 直接利用者に聞くなど、調査からはじめることが大事。
- ・ 答えがあるものを提示するだけでなく、答えのないものを投げかけることが博物館として重要。
- ・ グローバルな視点を取り入れていく。UNEPとの連携に期待。世界の湖沼展示も工夫を。
- ・ アメリカでは寄付によって成り立つのは、市民の方が文化施設の重要性に対して意識が高い。

##### 広報方法

- ・ 企画展は今現在やっていることをPRするものなので、あちこちに招待状を出す。
- ・ 展示できるまでの工夫も書くべき。

- ・大人と言っても、細かく見る必要があるのでは。そこだけをターゲットにするのか、ターゲットの中心、比率を考えてはどうか。専門性の高い大学生か、60歳以上は老後の楽しみ/生きがい、週末のみ動ける人など。
- ・世界の中での琵琶湖・琵琶博について書く。広い目線でのタイトルや内容、キャッチが必要。
- ・琵琶湖の認知から価値まで、その重要性、おもしろさ、価値、ヒントを与えるような内容に。

#### 現状からみた提案

- ・「琵琶湖」の何を展示しているのか？入ってすぐのところに概略図等あると時間配分がしやすい。アイキャッチ、引き込むような導入を。
- ・現状の展示が詰め込みすぎているので、ストーリー性やポイントポイントでの工夫が必要。
- ・地元のお年寄りなど昔の暮らしを知る方に実際に語ってもらう。変化への関心を高める。
- ・他と差別化し、琵琶湖、環境問題、魚と食文化との関係などをからめた展示で魅力となる。

#### レストラン、ショップ

- ・うまく宣伝していくことが必要。レストランだけの利用者層の獲得をねらうことも重要。地元でしか食べられないもの。毎回特別展にあわせたデザートを出す。
- ・ショップは、斬新なものを。学芸員の協力が必要。楽しめるデザインを。

#### 調査(未来館者調査)・評価

- ・行ってみたいかという一つ目の山、さらに行けるかどうか(可処分所得、時間、距離)という二つ目の山があると考えているが、一つ目の山は博物館で工夫可能。
- ・館自体の価値についてのメッセージを県民にしっかりと伝え、県民に館自体の価値を理解してもらい、誇りを持ってもらうことを目指す。調査は、このような仮説に基づいて、結果を評価し、方向性を決めていく流れが重要。

#### 来館者増に向けて

- ・博物館だからやるというわけではないことをやっていき、基準を設けて、若者がたくさん来て話題をつくる。発想の転換をして、新規開拓を考えることも手。
- ・4回目以上のリピーターを濃くしていく。交流事業というものの新規なプランを考えていく。

#### 入館料について

- ・この館の役割を考えると、環境教育、自然と人間の共生、といった現代的なテーマに果たす役割は大きいので、無料という考え方もできる。
- ・親子にやさしい博物館は、子育て世代の支援を受ける。そういう考え方で、社会に博物館からメッセージを発信していくと、博物館の社会的な認知を高めていく。

#### 交流機能について

- ・少しでも多く、博物館で働く人たちの姿を見せることも、博物館が社会で認知されるために重要。障害者の雇用も。



## (4) 来館者アンケート等での意見

### 1) 来館者アンケート

#### (1) 目的

博物館利用者のニーズや満足度を的確に把握しながら、今後の博物館運営や展示の企画、広報活動のあり方などを考え、利用しやすい博物館づくりを進めるため、来館者アンケートを年3回実施してきた。(平成24年度は博物館リニューアルの立場からの来館者・非来館者調査を別途行い、博物館の来館者アンケートは年2回の実施となった。)

#### (2) 実施時期と方法

アンケートを実施する日程は原則として平日と休日を含んで連続する3日間とし、アンケート用紙は来館者への券売時に毎日1,000枚を限度として手渡しで配布し、アンケート協力をお願いをしている。アンケート記入台はアトリウムに1箇所、玄関横に1箇所、計2箇所設置(8月実施の際は回収率を上げるため、アトリウム内に1箇所増設)し、券売時に配布したものと別々にアンケート用紙を置いている。平成24年度の実施内容は以下のとおりである。

平成24年度 来館者アンケート概要

回	日時	回答者数	調査内容
第1回	平成24年8月24日～26日	363名	来館回数／博物館来館／滞在時間／満足度
第2回	平成25年3月22日～24日	134名	記入者自身の年齢／性別／住宅地域

2回の調査ともほぼ平成23年度と同じ時期(8月、3月の20日前後の金土日)に実施した。  
(博物館リニューアルに関連した来館者調査を10月19日～21日(金～日)に実施)

### (3) 傾向

#### ①リピーター

例年、約半数が「はじめて」の来館であるが、平成24年度は34.4%、40.4%と減少し、逆に、例年2～3割程度の「4回以上」の来館者割合4割近くに増加している。

#### ②情報源

来館のきっかけとなった情報源は例年と同じく、友人・知人、家族・親戚による口コミが多かった。湖周道路の看板も微増している。県市町の広報は掲載されると確実に効果がある。平成24年度より項目を追加した移動博物館もわずかではあるが回答があった。

#### ③満足度

来館者アンケートの満足度調査(博物館を訪ねて「非常に満足した」と「満足した」を合わせた満足度)で「年3回平均目標値80%」を目標とし達成してきた。平成20年度85.2%、平成21年度82.1%、平成22年度81.2%、平成23年度84.4%と推移し、平成24年度は85.0%とアップしている。

## 資料2 意見聴取・利用者調査

### ④不満

例年のように、平成 24 年度も駐車場、交通の便、道路案内、レストラン、昼食場所、休憩場所に対する不満があがっており、博物館リニューアルの中での対応が期待される。

### ⑤来館目的

8月の調査では避暑・省エネのためが 15.1%（前年度 6.1%）と大幅に増えている。滋賀県が実施している節電クールライフキャンペーン（県立文化施設の無料開放）の成果とみられる。常設展示観覧を目的とする 8月の来館が 54.6%と前年度の 41.3%に比べて増えているのも、来館者層の変化を物語っている。

また、平成 24 年度も「また来たい」が例年並みの 95%程度、「観察会や体験学習、講座に参加したい」も例年並みの 35%程度の回答があり、来館者の博物館への期待は高い。

### ⑥来館者

年齢別では、これまでと同様、30～40 歳代が来館者の中心で 70%程度が家族と同行であり、例年通り、家族・親子での来館が多い結果となっている。居住地は、例年、約 3分の 1 が滋賀県内であるが、8月の調査では県内が 50.2%と多く、節電クールライフキャンペーンの影響がうかがえる。

## 2) マーケット調査

### 調査結果

#### (1) 調査の概要

下記により琵琶湖博物館に関するマーケット調査を行った。

No.	調査名	日時	調査内容	回答者数
①	琵琶湖博物館による 継続調査	継続して実施	来館者アンケート調査	
		継続して実施	学校団体アンケート調査	
②	インターネット 調査	平成 24 年 10 月 22 日～23 日	琵琶湖博物館の利用者・非利用者の傾向、 施設の認知度等、来館者の推移や傾向	600
③	館内アンケート 調査	平成 24 年 10 月 19 日～21 日	琵琶湖博物館の各室、設備、サービス等、 来館者の満足度やニーズ	429

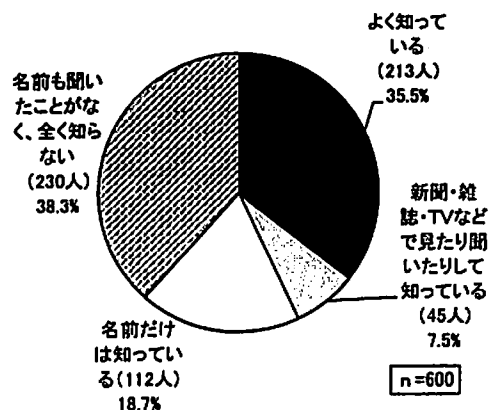
## 資料2 意見聴取・利用者調査

### (2) 琵琶湖博物館の認知度

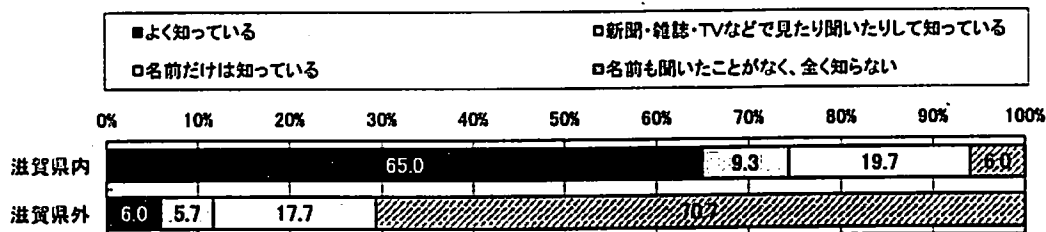
②インターネット調査（600サンプル：滋賀県内300、京阪神200、東海その他100：平成24年10月22日・23日に実施）より

- ・琵琶湖博物館について、「名前も聞いたことがなく、全く知らない」と答えた人が4割弱（38.3%）を占めている。（グラフ2参照）
- ・滋賀県内では琵琶湖博物館を「よく知っている」と答えた人は7割弱（65.0%）と高いが、近隣の他府県では琵琶湖博物館を知らない人が7割（70.7%）に上る。（グラフ3参照）

グラフ2: 琵琶湖博物館の認知度



グラフ3: 琵琶湖博物館の認知度(居住地別)



### (3) 琵琶湖博物館の利用者像

①琵琶湖博物館による継続調査結果より

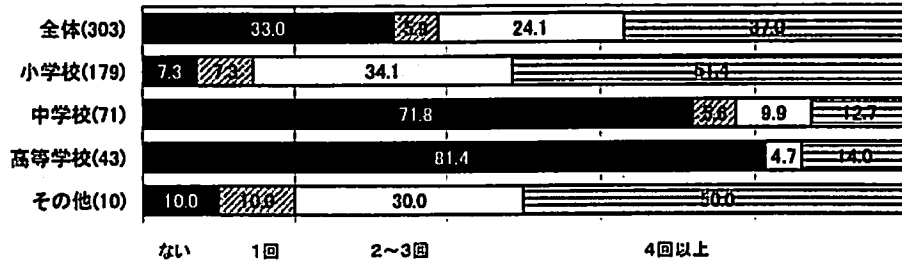
- ・年間総来館者数の減少は、「一般」（大人）の来館者数の落ち込みが大きく影響している。
- ・学校団体の利用は、比較的安定はしているものの、学校数・人数ともに漸減傾向である。
- ・利用した展示や施設は、水族展示が特に高く、80～90%を維持しているが、その他の展示室は60～80%で推移している。
- ・平成12年度以降から、アンケートの記述に「かわりばえない」「情報が最新でない」といった意見が見られるようになってきた。
- ・「不便だったこと、不満に思ったこと」は、常設展示室への不満回答がやや上昇傾向にある。また、昼食場所、交通の便、駐車場、道路案内、観覧料金への不満が多い。

⇒大人の落ち込み、学校団体の減少に歯止めをかけるような展示やイベント、施設改修について対応しきれていないと考えられる。

- ・5年以内の県内学校団体の利用について、小学校では、来館したことが「ない」は低いですが、中学校、高等学校では「ない」が大半で、中学校で7割強（71.8%）、高等学校で8割強（81.4%）となっている。（グラフ4参照）

## 資料2 意見聴取・利用者調査

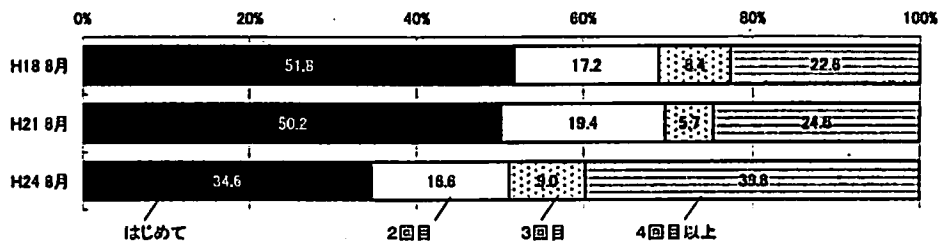
グラフ4: 学校団体の利用動向(①学校団体アンケート調査) 平成23年度 80% 100%



⇒中学校以降では、自分で課題を設定し解決できるような学習を求めるようになっており、学年が上がるほど博物館高度利用へのニーズがあると考えられる。

- ・ 来館回数の経年変化では、「はじめて」が減少し、「4回目以上」が増加している。(グラフ5参照)

グラフ5: 来館回数の経年変化(①来館者アンケート調査)

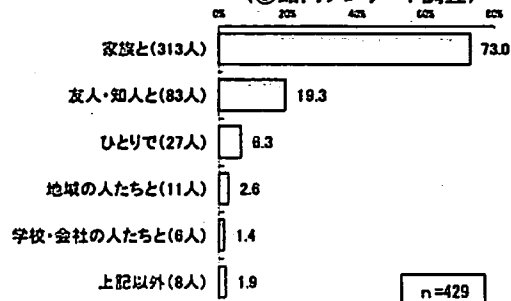


⇒「はじめて」は年を追って減少しており、新規性・話題性が薄れてきたことが原因であると考えられる。  
 ⇒一方で「4回目以上」は年を追って増加しており、今後さらにリピーター対応が必要であると考えられる。

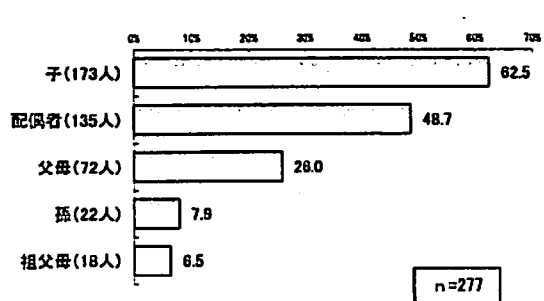
③館内アンケート調査(小学5年生以上の来館者への自記式、429サンプル;平成24年10月19日~21日に実施)より

- ・ 「本日はどなたと来館」したかに関する回答を見ると、「家族と」が全体の7割以上(73.0%)と圧倒的に多い。(グラフ6参照)
- ・ 「子どもと訪れている親」「父母と訪れている子ども」の回答が多い(親子での来館者が多い)。(グラフ7参照)

グラフ6: 来館にあたっての同伴者の割合(③館内アンケート調査)



グラフ7: 家族同伴者の内訳と割合(③館内アンケート調査)



## 資料2 意見聴取・利用者調査

### ①琵琶湖博物館による継続調査結果より

- 琵琶湖博物館だけを目的とする来館者数の割合は、平成19年の60%から平成24年には40%前後に低下している。
- 主な立ち寄り先としては、「道の駅グリーンプラザからすま」「水生植物公園みずの森」「イオンモール草津(平成20年オープン)」があげられている。

⇒余暇時間の過ごし方の多様化等により、周辺施設等とセットで回遊する志向が高まっていると考えられる。

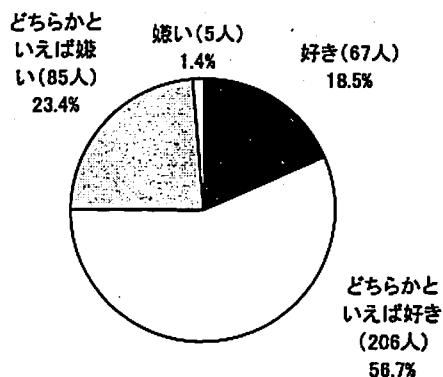
⇒1日中過ごせる博物館としての機能が十分でないと考えられる。

### (4) 琵琶湖博物館の非利用者像

#### ②インターネット調査 (600サンプル：滋賀県内300、京阪神200、東海その他100：平成24年10月22日・23日に実施) より

グラフ8：非利用者の博物館に対する好き嫌いの割合

- 琵琶湖博物館の非利用者は、600人中363人、うち8割弱(76.0%)が県外の人である。
- 非利用者の5割弱(47.1%)は、他の「博物館」を訪れており、7割以上(75.2%)の人は「博物館は好き」と答えている。(グラフ8参照)

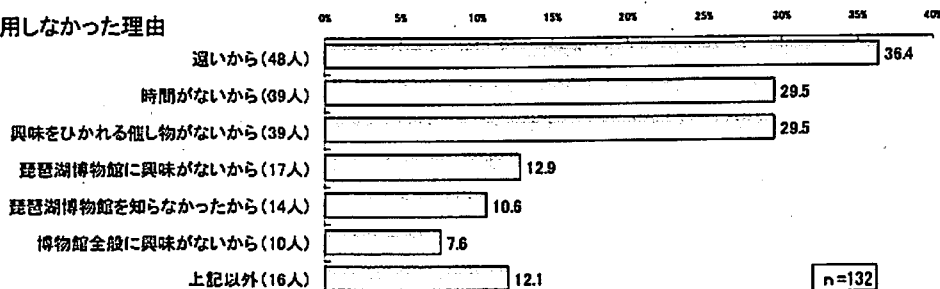


n=363

⇒非利用者においても、博物館そのものを嫌いなわけではなく、内容やきっかけによって琵琶湖博物館に来ていただける潜在利用者層であると考えられる。

- 琵琶湖博物館を利用したことがないと答えた人の主な理由は、「遠い(4割弱/36.4%)」「時間がない(3割弱/29.5%)」「興味をひかれる催し物がない(3割弱/29.5%)」などがあげられる。(グラフ9参照)

グラフ9：利用しなかった理由



n=132

⇒非利用の理由のうち、「博物館全般に興味がないから」という人は少数で、「興味をひかれる催し物がないから」という人が多いことから、琵琶湖博物館の魅力を向上することにより、「遠いから」「時間がないから」という人も含め、潜在利用者に来館していただくことが可能であると考えられる。

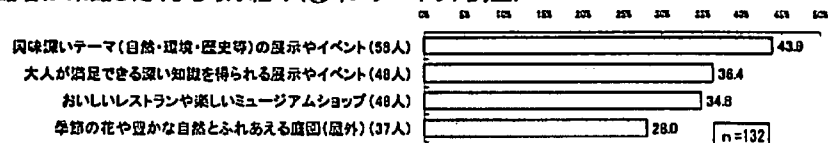
## (5) 琵琶湖博物館への期待

- ②インターネット調査 (600 サンプル: 滋賀県内 300、京阪神 200、東海その他 100: 平成 24 年 10 月 22 日・23 日に実施)
- ③館内アンケート調査 (小学 5 年生以上の来館者への自記式、429 サンプル: 平成 24 年 10 月 19 日～21 日に実施) より

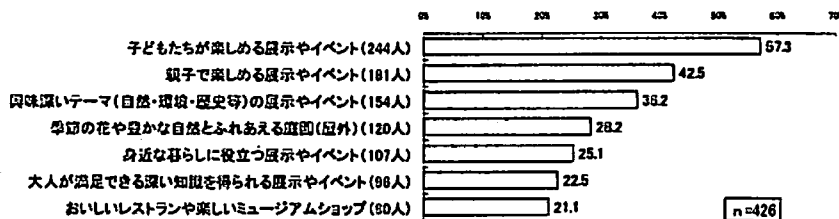
## 要望の多いもの

- ・ 興味深いテーマ (自然・環境・歴史等) の展示やイベント
- ・ 大人が満足できる深い知識を得られる展示やイベント
- ・ おいしいレストランや楽しいミュージアムショップ、休憩スペースの充実
- ・ 親子で楽しめ、子どもも楽しめる展示やイベント
- ・ 地域における自然体験イベント
- ・ 地域や環境に関する学習の推進、情報の発信、研究・調査

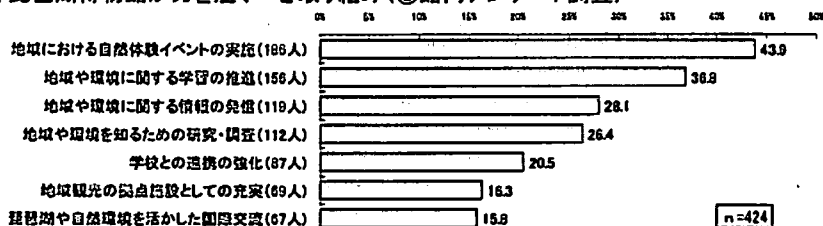
グラフ10: 非来館者が来館したくなる取り組み(②インターネット調査)



グラフ11: 今後、琵琶湖博物館で参加したい取り組み(③館内アンケート調査)



グラフ12: 今後、琵琶湖博物館が力を注ぐべき取り組み(③館内アンケート調査)



⇒来館者、非来館者とも、地域・自然・環境に関する展示やイベント、学習、情報のニーズが高い。非来館者は大人が満足できる展示やイベント、おいしいレストランや楽しいミュージアムショップ、季節の花や豊かな自然と触れ合える庭園の充実への要望が多い。記述回答では、ここでしかない展示、「何度でも行きたくなる」新たな魅力ある展示や更新性、親子で楽しめ、子どもや幅広い年代の人びとが楽しめる展示やイベント、興味を引く展示、参加・体験型の展示等への期待が多い。

## 資料2 意見聴取・利用者調査

### 3) 大学生アンケート

#### 【調査の概要】

下記により琵琶湖博物館に関するマーケット調査を行った。

大学	実施日	回答者数	アンケート回答前の館内体験
A大学	平成25年6月30日	33名	講義：「豊かな水産資源の宝庫、琵琶湖」 体験実習(選択)：①外来魚解剖・調理 ②プランクトン観察
B大学	平成24年7月	30名	館内自由見学
C大学		16名	

#### 【意見抄録】

##### (1) 琵琶湖博物館への来館経験

- ・アンケート対象者は、3大学79名。来館経験者は19名(24%)、アンケート当日に初めて来た人は60名(76%)。
- ・来館経験回数は12名の回答を得た。2回目3名、3回目2名、4回目1名、5回目2名、7回目3名、20回以上1名。
- ・来館経験者は全員が「また来たい」と回答。来館経験者はリピーターになる確率が高い。今回初めて来た方の中にも「また来たい」との記入がかなり見られた。

##### (2) 琵琶湖博物館に来たことがない理由

- ・「琵琶湖博物館を知らなかった」37名(47%)、「知っていたが行く機会がなかった」22名(28%)、「行きたいと思わなかった」1名(1%)。
- ・「知っていたが行く機会がなかった」理由は、住んでいる所から遠い、交通が不便など、全員がアクセスの問題を指摘している。

##### (3) 興味のあることを知るときの情報源

- ・46名の回答を得た。複数回答。ウェブ検索(インターネット+HP)32名(70%)が、情報源として極めて高い比率となっている。特に重視する情報源でも同様の傾向。
- ・さらに、テレビ(46%)、友人の口コミ(41%)も重要な情報源となっている。電車吊広告15名(33%)、雑誌14名(30%)がそれに続く。

##### (4) 博物館にどんなものがあったら行って見ようと思うか

- ・45名の回答を得た。複数回答。ほぼ全員が展示内容への期待をあげ、その内訳は概ね以下のようなものになる。
- ・自分に興味があるもの 27名(60%)
- ・めずらしい、貴重なもの 16名(36%)

- ・さわれる展示など体験できるもの 14名 (31%)
  - ・展示内容以外 8名 (18%)
  - ・「興味があるもの」としては、民俗資料的な展示、生物展示、美術やアニメなどをあげる方もいたが、大多数はジャンルを特定していない。「貴重なもの」としては、その館にしかない、その土地にしかない、普段見ることができない等があげられている。展示手法として体験性への期待も高い。
  - ・展示内容以外では、ワークショップやギャラリートーク、ツアーガイド等のほか、わかりやすい導線、休憩スペース、カフェスペース、トイレ、アクセスなど、主にサービス関係への期待や要望があげられている。
- (5) 博物館はどんな事を期待する場所か
- ・77名の回答を得た。博物館イメージとしては「知識を得る、興味を持つ、発見する、見る、触る、好奇心を満たす、気づく、楽しむ」など、主体的に利用するコメントが大多数を占める。66名 (86%)。
  - ・「展示している、公開している、展示保存研究をする」など客観的で親近感を感じていないことをうかがわせるコメントも少数ながら見られる。9名 (12%)。「おもしろくない」など否定的なコメントは2名 (2%) にとどまっている。
- (6) 琵琶湖博物館の良かったところ、残してほしい展示
- ・63名の回答を得た。水族展示と民俗系展示への評価が、ほぼ同数を分け合う結果となった。各コメントの主な要素を要約集計すると、概ね以下ようになる。
  - ・水族展示 31名 (39%)
  - ・琵琶湖の環境と人々の暮らしB・C展示室 28名 (35%)
  - ・コウガゾウの骨格標本等のあるA展示室 4名 (5%)
  - ・館内での学芸員とのコミュニケーション、等身大切り出し、収蔵庫写真、研究成果の掲示、遊び心のある仕掛けなど細かな展示手法への言及も見られた。
- (7) リニューアル計画へのアイデアや思い
- ・67名の回答を得た。
  - ・A大学では、来館経験者を中心に、淡水魚の魚種をもっと増やしてほしいとの声が多い。初めて来た方のアイデアでは、魚と一緒に泳げる、釣りができる、飼育を学べるなどのアイデアも出された。少数ながら展示は今のままでよいとした方もいる。
  - ・B大学では、パネルの読みやすさ、順路のわかりやすさ、飲物自販機、トイレ、アクセス等利用した際にやや不満に感じた点についての改善要望が目立った。具体的な展示アイデアは少なく、デジタルブック、シアター形式4D映像、大型映像等に併せ、さわれる展示・ふれあえる展示のさらなる充実を求めている。
  - ・C大学もB大学同様、水槽の見やすさ、パネルの読みやすさ、アクセス等についての改善要望が目立った。体験型ワークショップ、夜の魚見学ツアーなど参加型プログラムの充実への要望も見られる。



4) 学校アンケート

【調査の概要】

下記により琵琶湖博物館に関するマーケット調査を行った。

学校地域	学校種別	実施日	目的
県内 淀川水系流域	小学校、 中学校、 高等学校、 特別学校	平成 23 年 11 月～12 月	現在の学校利用の現状等を調査すること

【意見抄録】

(1) 来館状況

- ・ 過去5年以内については、来館率でも来館学校数でも小学校がもっとも多い。4回以上（5割強）、2～3回（約3割）、0～1回（約2割）。小学校と特別学校の来館率が似ている。中学校、高等学校は0回が7～8割で、4回以上は1割程度となっている。
- ・ 今後5年以内の来館予定も来館状況とほぼ同じ傾向。小学校の利用状況は安定しているといえるが、中学校・高等学校の多くは今後も来館する予定はないと回答。
- ・ 来館実績0～1回の「利用しない理由」は、「遠い」が全体的に多いが、地域格差はほとんど見られない。
- ・ 利用していない学校は入館料無料や減免措置の認知度も低い。小学校で約5割、中学・高等学校へとあがるにつれてさらに大幅に低下している。
- ・ 来館実績2～4回の「利用している理由」は、小学校では学習効果が高い、次いで他の施設では学べないことをできる点が評価されている。中学校や高等学校では博物館の独自性を感じていることが多い。特別学校では、集団行動や公共の場所の利用方法を学ぶことを重視。

(2) 小学校の博物館利用状況

- ・ サポートシートは、8割程度が利用。そのうち半数以上が独自もしくは博物館のものを参考にした独自プリントを使用している。展示には補助的ツールを必要とする学校が多い。
- ・ 体験学習等は、半数以上が利用していない。これには、全部の学校に対応しきれない琵琶湖博物館側の人的事情もある。
- ・ 校外学習の時間は、約1/4は減ったと答えているが、増減がないとしているところが多い。利用が少ない・ない小学校のうち、5年以上前に利用していたところが利用しなくなった理由は次の通り。・以前はフローティングスクールで利用、・交通が不便、・他の施設の見学、・遠くて時間がかかる、・総合的な学習の時間の時数、内容が変更されたため、・他の施設と1日でまわるコースが設定しにくい、・校外行事の厳選、など。

(3) 学校の期待する博物館

- ・ 期待するサービスとしては、学校種別に関わらず、昼食場所、事前学習の資料、体験学習の要望が高い。小学校と特別学校では子ども向け体験型展示、中・高校で高いのは講演や展示室での説明といったやや専門的な話を聞くことを要望している。

- ・ 学習効果への期待としては、琵琶湖の生き物と環境問題が全体的に高い。さらに、小学校・特別学校では「昔の暮らし」、中・高校では「水利用」が高くなっている。
- ・ 全体的な傾向として、博物館へ期待する内容が小学校と中・高校でやや異なっている。中学校と高等学校ではその傾向が類似しており、来館状況を考えても、中学校と高等学校は同じくくりで来館を促す検討が望まれる。

#### (4) リニューアルについての要望 (自由文)

- ・ 小学校では、各学年の教科書の単元に準じた展示の充実への要望がもっとも多い。3年では昔の暮らし、4年では地域学習、5年では環境学習が主な主題となるが、例えば6年では理科の地層、社会の平和学習(琵琶湖を護ってきた人々の歴史等)など複数の教科の学習が同時に行えることも期待されている。
- ・ 生物とのふれあいや展示に関連する体験展示の充実は、学校種別に関わらず要望が高い。

##### 【小学校】(0~1回来館)

- ・ 教科書に準じた展示、ふれあい・体験展示。
- ・ 遠方で見学しにくい学校では、インターネットで展示室を見たいとの要望もある。

##### 【小学校】(2~3回来館)

- ・ 教科書に準じた展示、ふれあい・体験展示。3年生用サポートシートや解説の充実。
- ・ その他は、プラネタリウム設置、ホールで展示内容への興味づけ。

##### 【小学校】(4回以上来館)

- ・ 教科書に準じた展示、ふれあい・体験展示。3年生用サポートシートや解説の充実。
- ・ 教科書に準じた展示では、昔の暮らし、地域学習、環境学習への期待をあげる学校の割合は、ほぼ同程度となっている。ふれあい体験展示では、生物とのふれあいや顕微鏡観察、昔の道具の使用体験、漁師さんの話を聞く、よし笛づくりなどの要望もある。
- ・ 3年生用サポートシートでは、設問の展示物が探しにくい、該当する展示物の名称や用途の説明文の漢字が3年生には読めないなどの問題点が指摘されている。
- ・ その他としては、プラネタリウム設置、映像の活用のほか、水鳥観察や琵琶湖一周アスレチックなど屋外の自然環境を活かした展示への要望がみられる。

##### 【中学校】(0回~4回以上)

- ・ 教科書に準じた展示。エネルギー、気象、公害、里山の保全、外来種の脅威等があげられた。
- ・ ふれあい・体験展示。生物とのふれあいを評価する一方、水質検査等の科学的な実験展示、カヌー体験や外来魚釣り体験など屋外での体験への要望も高い。
- ・ 館外学習への細やかなサポート、職業体験への協力への感謝の言葉、このままでいいとのコメントもみられる。

##### 【高等学校】(0回~4回以上)

- ・ 教科書に準じた展示。ふれあい・体験展示。高校生に合った展示内容の充実が求められている。

##### 【特別学校】(1回~4回以上)

- ・ ふれあい・体験展示への要望が極めて高い。音・光などで琵琶湖がイメージできるコーナーとの要望も。

## 資料2 意見聴取・利用者調査

### 5) 展示交流員との交流会での意見

場所	実施日	主催	内容
滋賀県立琵琶湖博物館 1階セミナー室	平成26年2月10日 15:00~17:00	滋賀県立琵琶湖博物館	○各展示室グループでの意見交換 ○グループごとに発表・全体で意見交換

#### 【意見抄録】

##### A 展示室

- ・ 骨格標本に復元図・映像が浮かび上がるなど、想像力と対話を生む展示を工夫してほしい。
- ・ 展示物にさわると嬉しいが、安心して触ってもらうためには、人がついている必要がある。
- ・ 地震の仕組みを体験できる展示があれば、交流の場になりやすい。社会的に関心が高い。
- ・ 駐車場からの道を、琵琶湖の生い立ちがわかる遊歩道にしてはどうか。

##### B 展示室

- ・ 琵琶湖名物の水産物料理の「臭い」のコーナーはつくれないか。フナズシの臭いとか。
- ・ 展示交流には、きっかけになるものが必要。交流ツールをいくつか用意し、好きなものをチョイスしてもらって、お堂に持って行って交流するなど。昔話、妖怪教室などの交流も。
- ・ お堂の中を時間制で「真っ暗」にし、その中でこわい話を聞けたらいい。こういう怖さが昔の日本にはあったんだよという体験。

##### C 展示室

- ・ 「空びわ」にはルーペがあるといい。変化している所は、PADなどで対比させて見せるといい。
- ・ 「水を運ぶ」「リヤカーを押す」「昔の遊び」など、子どもが生活体験できるといい。
- ・ 例えば魚になって水草の繁茂の中を通る疑似体験展示。水草のいい点・悪い点が体感できる。
- ・ オビニオンコーナーは付箋紙にメッセージを書いて貼ってもらい、一週間ごとに整理する形。
- ・ 持ち帰れる「フィールド情報」でフィールドへ誘い、そのフィードバックがあるといい。
- ・ 学校団体は、事前学習ルームで学習後、展示室でそれを発見すると混雑が避けられるのでは。

##### 水族展示

- ・ 素通りされるところがある。サインや動線に工夫が必要。ちょっとした工夫で見てもらえる。
- ・ 観察を促すピック解説パネルなど、季節感をつくってはどうか。
- ・ 普段とはちがう魚の行動や生態があると発見を促し交流しやすい。
- ・ ふれあい体験は通年行ってほしい。触り方を教える人がつかないといけない。

##### ディスカバリールーム・屋外展示

- ・ 部屋の中の見通しの改善。トイレが近くにあるといい。大人も楽しめるディスカバリーBOX。
- ・ 部屋内では携帯電話使用禁止にしてほしい。カサなどを入れるロッカーを用意してほしい。
- ・ アミやカゴなど採集道具を貸して屋外でとったものをディスカバリーで調べられるといい。

##### 全体について

- ・ 新しい機器は遊びになるデメリットも。人とふれあう、やさしい展示室を大切にしたい。
- ・ 「さわっていいもの、悪いもの」をわかりやすく。イベントは当日参加だと参加しやすい。



積年の交流の内容、来館者の思いを聴きとってきた交流員ノート→

## (1) A展示室

### ○ A展示室のテーマ

「変化し続ける大地と気候と生き物 ～四百万年間から考える琵琶湖～」

### ○ A展示室のねらいと全体構成

現在の琵琶湖や生き物を理解するための、数百万年～数万年という長い時間スケールでおこる大地、湖、気候、森、生き物の変化のものがたりを紹介し、現在とは大きく異なる環境であった過去を伝える。その変化が現在の環境をつくる要素となり、さらには未来へも続いていくことを知ってもらう。また、人間が関わらないでおこる長期的な自然の営みの中で見た、生き物としてのヒトを伝えることで、湖と人の関係について考えてもらう。

全体構成は、中央部で琵琶湖と生き物の生い立ちについての概要を示し、地形と湖の変動、気候と森の変動、生き物の変動のそれぞれを、3つのコーナーで詳しく紹介する。また、地域の博物館や人びとと連携した、化石、岩石などの展示および交流を行う空間を設ける。

### ○ 各コーナー展示のねらい

#### 1. 導入：いまの琵琶湖と生き物

現在の風景や生き物に隠れている過去の痕跡を示し、琵琶湖と生き物が歩んできた過去のものがたりの重要性を伝える。

#### 2. 琵琶湖と生き物のものがたり（中央部）

過去の琵琶湖と生き物の姿を映像で紹介。さまざまな証拠をもとに過去の復元を行う研究者の視点を伝える。A展示室で紹介する展示内容の概要をここで示して、より深く理解したい人を各コーナーへ導く。

#### 3. 変わる大地と湖

現在の琵琶湖環境や人びとが暮らしている地形的な環境は、私たちの暮らしの時間では変化していないようにみえるが、長い時間をかけてきた結果によるものであり、ダイナミックな変化がこれまでも、またこれからも行われていること、さらに、そのような変化が災害に結びつく地球の運動によるものであることを紹介する。

#### 4. 変わる気候と森

数万年以上の長い時間では、地球規模の気候変動と、それに影響を受けた動植物の変化の記録が琵琶湖においても顕著に見られる。このような変化が起こってきた結果としての、現在の琵琶湖環境という側面から、琵琶湖地域の気候の変化や、その影響として現れた森林環境の変化について紹介する。

#### 5. 変わる生き物

現在の琵琶湖やその周辺の生き物は、ごく最近に持ってこられたものや、移入してきたものを除けば、琵琶湖の非常に長い時間の中で成立してきた。このような琵琶湖やその周辺に生息する動物の起源や、進化と絶滅のドラマを紹介する。

6. 結び：琵琶湖と生き物の歴史からみた人

琵琶湖、地形、気候、森、生き物の変化をまとめ、最後にヒトの登場を示す。大きな環境変化の中でのヒトが生きてきた環境について考えてもらう。長い時間スケールからみたヒトという生き物について考えてもらいながら、B展示室へ導入する。

○ 展示の手法

過去の環境を理解するためのジオラマや参加型の展示とともに、環境を復元する根拠となる実物標本についても多く展示。最新の研究成果について随時更新を行う、新鮮で発見がある展示。地域の人びとの調査研究成果や標本を積極的に紹介する市民とつくる展示。

○ リニューアル前とリニューアル後の比較

現行の展示では、古い時代から新しい時代に向かって、時代ごとに地形、湖、気候、生き物の移り変わりを包括的に紹介している。リニューアル後の展示では、現在の環境を理解するために必要な数百万年～数万年という長い時間を要する自然の変化という視点から琵琶湖を捉え直すために、基本的に現在から古い時代へとさかのぼることで、過去から未来へつながる現在を考えるものとする。また、地形と湖、気候と森、生き物の変動とその要因について、個別のコーナーとして紹介し、それぞれの事象とその歴史、さらに現在とは大きく異なる環境であった過去についてわかりやすく伝える展示とする。

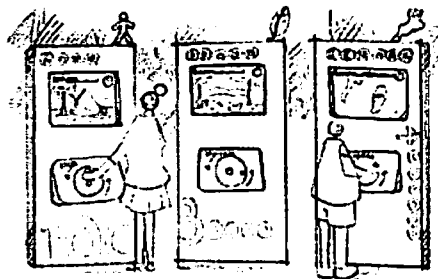
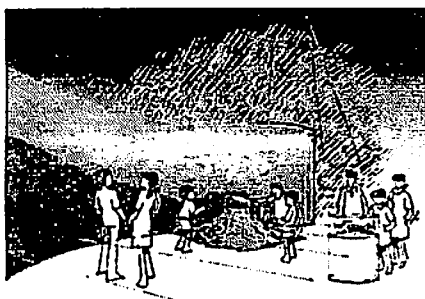
また、現行の展示では標本資料や研究の方法について、「コレクションギャラリー」と「研究室」という個別のコーナーの中で紹介している。リニューアル後の展示では、標本や研究の方法についても関連する各コーナー展示の中で紹介する。このことにより、過去の環境の変動について、その証拠や研究過程を含めて学ぶことができる展示とする。

さらに、これまでに「コレクションギャラリー」の中で、地域の人びとによる研究成果や収集標本の展示、さらに地域の専門家による来館者との交流活動を試験的に実施してきた。このような市民とつくる展示を常設展示のストーリーの中に位置づけてさらに進展させるため、リニューアル後の展示室には「地域の人びとによる展示コーナー」と博物館内外の人が利用できる「交流スポット」をそれぞれ有機的に結びつけられるように設置する。

○ 展示の詳細

1. 導入：いまの琵琶湖と生き物～風景の中にある過去～

展示物案(例)：琵琶湖と周辺山地の風景写真。魚の化石。河原の埋没木。時間スケール体感型展示。



## 2. 琵琶湖と生き物のものがたり (中央部)

## 2-1. 琵琶湖と生き物のものがたり

過去の琵琶湖と生き物の姿を映像で紹介。さまざまな証拠を基に過去の復元を行う研究者の視点を伝える。

展示物案(例)：最も古い古琵琶湖や 200 万年前の沼沢地の時代および 2 万年前の寒冷な時代など代表的な時期の環境復元映像。動・植物化石、地層などのトピックや地形や生き物の変化の関係性を紹介。

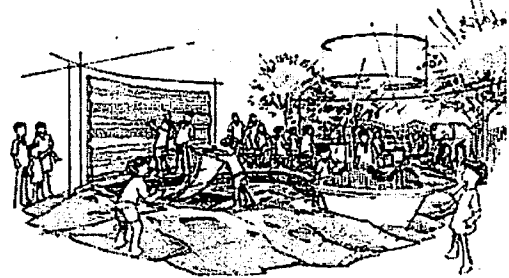
## 2-2. 琵琶湖のものがたりが眠る場所

琵琶湖のものがたりが理解されるようになった背景にあるフィールドの情報や調査・研究の仕方などを紹介し、フィールドの魅力伝える。

展示物案(例)：化石発掘現場のジオラマ。

休憩・交流用の椅子

(ジオラマの雰囲気になじむもの)。交流用移動式テーブル。発掘現場の中で地層の調査や化石を探す体験型展示。代表的な化石や地層の標本。ゾウのいる森のジオラマ。



## 2-3. 地域の人びとによる展示

フィールドの魅力に詳しい地域で活動をする人びとと協力して、フィールドの魅力伝え、誘う展示。人びとが採集した標本や研究成果等について展示を行う。定期的な更新を行うコーナー。

展示物案(例)：可変性をもった展示ケース。



## 3. 変わる大地と湖

## 3-1. 現在の琵琶湖のでき方

日本一広い湖がいつからどうやってできたのかを紹介。また、湖が存続する理由が断層運動にあることを紹介し、地震が起こりやすい場でもあること、40 万年前からある広い琵琶湖、広がっている琵琶湖、琵琶湖が存在し続けているわけを紹介する。

展示物案(例)：現在の琵琶湖周辺の風景画像。琵琶湖模型 (縦横比をかえて縦を強調)。

土砂部分を取り外し可能な基盤地形の模型。湖底ボーリングコア。堅田湖の時代の地層。高島丘陵の地層や火山灰。

## 3-2. 移動してきた湖

## &lt;古琵琶湖地層コレクション&gt;

琵琶湖の生い立ちは現在位置とは異なる場所から始まっていること、湖のある環境が一様ではなかったこと、移動が起こるメカニズムを紹介。

展示物案(例)：地層・火山灰層のはぎ取り標本。

琵琶湖の移動が断層の動く場所の変化で起こっていることを示す体験型展示。

火山灰が見られる顕微鏡。地形の変化を示す模型。



## 3-3. 琵琶湖以前の環境

現在の琵琶湖周辺の地形環境を知る上で必要な、より長い時間から知ることのできる環境変化や地球のダイナミックな変化について伝える。およそ千数百万年前の海だった時代や、日本列島の形成のわけ、地球規模の運動によって形成された琵琶湖地域の地盤をつくる岩石の形成について紹介する。

展示物案(例)：鮎河層群の時代の地層のレプリカ。海の化石。バイカル湖と日本海の形成の関係を示す模型。滋賀県の岩石。

## 3-4. 地質学研究者の部屋

地層の研究方法や火山灰の分析の方法を紹介。

展示物案(例)：同じ火山灰を探す体験型展示。

## 4. 変わる気候と森

## 4-1. 現在、そして旧石器人が生きた気候と森

現在の琵琶湖周辺の気候と森の姿について、極東アジア地域の琵琶湖という視点で紹介。さらに、旧石器時代に人類が体験した寒冷な時代の気候を、当時の森の体験展示で紹介。

展示物案(例)：現在の気候紹介パネル。現在の森

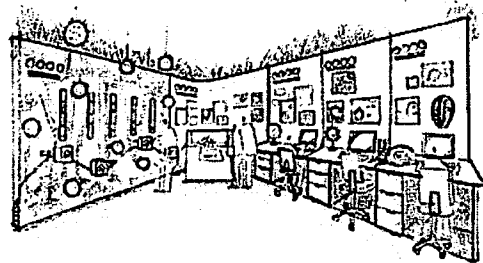
の写真、葉っぱや実の標本。旧石器時代の寒冷期の森ジオラマと植物化石、花粉化石（写真と花粉群集模型）、寒冷な時代の気候を感じる体験型展示。



## 4-2. 琵琶湖にのこる気候と森の変動の証拠

琵琶湖のボーリング調査からわかってきた、約40万年前から現在までの琵琶湖地域の気候変動を紹介。寒冷な時代と温暖な時代が周期的に繰り返され、その気候変動にあわせて森も姿を変えてきたことを、様々な研究例と合わせて紹介する。

展示物案(例)：ボーリングコア試料。微小な化石写真。花粉群集模型。気候復元図。気候変動に対する森の変化の紹介パネル。植物化石。気候変動を明らかにした研究や、温暖化研究の最前線の紹介パネル。



## 4-3. 古琵琶湖の時代の気候と森の変動

## &lt;古琵琶湖植物コレクション&gt;

古琵琶湖の時代の森の変化について、数百万年の時間スケールでみた気候変動と植物の絶滅を交えて紹介する。

展示物案(例)：今の植物相につながる森林、寒冷化現象の影響と変化、古琵琶湖が誕生した頃の常緑広葉樹のイメージ図。植物の消滅と絶滅を示す化石。寒冷な気候を好む植物化石。500万年間の気候変動と植物相の変化の図。水辺、山地の環境と森の変化の図。



## 4-4. 植物・花粉化石の研究室

植物化石や花粉化石の分析といった研究の方法を紹介。

展示物案(例): 葉化石・種子化石を探す体験型展示。いろいろな花粉の形を示す写真と模型。花粉が見られる顕微鏡。



## 5. 変わる生き物

## 5-1. 現在の琵琶湖の魚や貝類

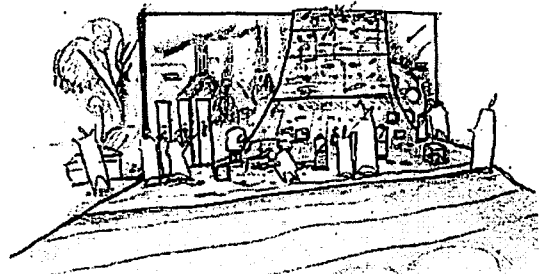
現在の琵琶湖にどのような魚貝類が生息しているのか、どのような固有種がいるのか紹介。琵琶湖周辺に生息する動物たちも紹介。周辺外来種についても、移入してきた生き物として紹介する。

展示物案(例): 魚類剥製標本。貝類封入標本。外来魚類、貝類の剥製。動物標本剥製(哺乳類、鳥類、両性類・爬虫類)。パネルによる DNA で見た生物境界線の説明。

## 5-2. 絶滅と進化のドラマ

スケールの違う絶滅の説明を行い、生物における絶滅現象について、近年の絶滅と関係させて紹介する。

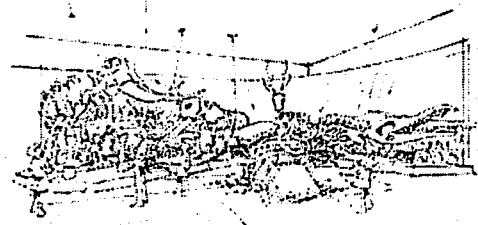
展示物案(例): 絶滅の時期とその状態、原因の説明パネル。絶滅を象徴する化石。絶滅動物の模型・実物標本。コウガゾウ骨格。アケボノゾウ骨格。カズサジカ骨格。ワニ骨格。足跡化石。



## 5-3. 琵琶湖の生き物の成立

「生き物」の変化のまとめとして、現在生息する魚や貝の固有種や琵琶湖の生き物の成立過程について説明する。

展示物案(例): フナ類、モロコ類、ナマズ類などの模型(剥製)展示。琵琶湖の生き物の成立過程の説明パネル。古琵琶湖層群からの魚類化石。



## 5-4. 動物化石の研究室

動物化石研究の方法について紹介。

展示物案(例): 化石発掘の様子画像。発掘用品、クリーニング道具。最新研究方法の紹介パネル。

## 6. 結び: 琵琶湖と生き物の歴史からみた人

## 6-1. ヒトという生き物

琵琶湖、地形、気候、森、生き物の変化をまとめ、ヒトの登場を示す。大きな環境変化の中でのヒトが生きてきた環境について考えてもらう。長い時間スケールからみたヒトという生き物について考えてもらいながら、B展示室へ導入する。

展示物案(例): 地形と湖、気候と森、動物の変化を概略した年表。旧石器における遺物(関津遺跡出土の石器レプリカ等)。現在の道具(スマートフォン等)



## (2) B展示室

### ○ 展示室のテーマ

「身近な自然と暮らしの歴史 一見えない未来が見えてくる」

### ○ 展示のねらいと全体構成

現在の風景や生き物に隠れている過去の痕跡を示し、琵琶湖と生き物が歩んできた過去のものがたりの重要性を伝える。

B展示においてはおよそ2万年スケールから200年スケールでの自然と人間との関係の歴史を取り扱う。海洋や大気の変動、そして地殻の変動などに関係し合いながら変化し続ける自然のなかで、自然そのものがどう変化したのかという問題と、人間が自然をどのように認識し、どのように自然と関わって暮らしを成り立たせてきたのかという問題を二つの柱とする。水田稲作や仏教など、主に中国大陸から導入された新しい文化や技術の受容と、自然に対する独自の文化をいかに育んできたのかという問題にも注目しながら、琵琶湖周辺の暮らしと密接に関わってきた丸子船などの木造船の紹介を加えて、近代ヨーロッパの自然観を受け入れ始める時期までの「身近な自然と暮らしの歴史」について、考古資料（自然分野の資料を含む）、歴史資料や美術工芸資料、民俗資料の実物やレプリカ、ジオラマ、情報機器も利用して展示する。

### ○ 各コーナー展示のねらい

#### 1. 導入・出口：琵琶湖地域のいま

今の琵琶湖から出発し、展示室内を観覧後、最後にまた導入部分に戻る構成とする。ICTを利用して、生き物（特にフナ）とどうつきあっているか問いかける。その上で、今の自然や生き物とのつきあい方として、現在に残る伝統的な要素を抜き出して展示し、一見伝統的とは思えない今の暮らしや文化が実は過去とつながっていることを、パネルを中心にレプリカなどで紹介する。

出口部分には、フィールドへの誘いのために、県内の特に歴史系地域博物館の企画展などの情報を提供する。

#### 2. 変わる自然、変わる暮らし

約1万年の間の森の変化を紹介し、琵琶湖周辺の環境変化の中で人びとがどのような暮らしを営み、その暮らしぶりを変えたのかを、おもに粟津湖底遺跡での縄文人の食生活に関する研究成果から展示する。また、土偶などにより縄文人の祈りのあり方から自然観についても紹介する。さらに琵琶湖湖底堆積物の花粉分析に基づく森の変遷を中心に、旧石器時代や弥生時代以降の状況にも触れ、過去2万年程度の時間スケールでみた湖と人のあり方を考えてもらう。

#### 3. 人がつくった自然

およそ2～3千年前に始まった水田稲作による自然や暮らしの変化を展示する。また、銅鐸に描かれた絵画から当時の人びとの自然観を紹介する。さらに弥生時代以降の人口

増加や技術革新にともなう、増大してきた自然への圧力とそれによる自然環境の変化について、森の変化と材木の利用を含めた人間活動との関わりを中心に紹介する。また、弥生時代以降の歴史時代も含めた人間活動による森の変化について紹介することで、2000年という時間スケールからみた調和的な利用とされる里山林やアカマツ林について考えてもらう。

#### 4. 殺生をめぐる葛藤

およそ1000年前から不殺生を戒律の第一とする仏教の思想が社会の隅々まで受容されていく中で、自然のとらえ方、特に漁撈を中心とした生き物との関わり方がどう変化し、「殺しておいて供養する」といわれる現在の文化がいかにかに成立したのかについて展示する。生き物が描かれた絵巻など絵画資料と、発掘によって出土した生き物の遺体などによって、中世の人々が生き物をどう認識していたのかを紹介する。また、古代・中世のエリやヤナなどの殺生の技術と、神饌や都市での魚介類の食文化を取り上げ、仏教の不殺生戒に基づく殺生禁断と神社の神饌を備えるための漁撈とがいかにかに葛藤し、折り合いをつけていたのかを紹介する。また、当時の信仰の場でだけでなく、教育の場でもあったムラのお堂を復元的に造作し、交流スポットとして展示室での交流を促す。

#### 5. 船とともにある暮らし

およそ400年前から記録に登場する丸船、丸子船を展示の中心として、琵琶湖集水域の暮らしが船とともにあったことを通時代的に紹介。琵琶湖という淡水環境のなかで生み出された丸子船はどのような技術によって造られていたのか、その造船技術とともに、誕生にいたる技術史的な展開過程を考古資料や絵画資料で紹介する。また、丸子船が江戸時代の輸送の主役だけではなく、薪、柴、炭、瓦や石など琵琶湖東西の地域間の資源の移動を担っており、他の木造船とともに暮らしを支えていたことを展示する。

#### 6. 自然へのまなざし

およそ300年前の庄屋の土蔵の収蔵品を拝見するような趣向で、地形や生き物や鉱物などへの関心が急速に幅広い層まで高まり、深い観察・測量に基づく著述や絵画・絵図が制作され始めることを、歴史資料や絵画資料をもとに、実際の生き物や鉱物の標本と対比させる形で紹介する。また、一方でヨーロッパ人によってニゴロブナなど琵琶湖の固有種の記載がなされたことも併せて紹介し、認識のしかたの違いを対比的に展示する。実際に標本をスケッチするコーナーも設ける。こうした系譜上に近代の琵琶湖研究者を位置づけ、その自然認識のあり方を紹介する。

#### ○ 展示の手法

展示室で多様な交流が生まれることを重視し、まず、展示室の中央にムラのお堂を模した交流スポットを制作して、絵解きやお話し会、紙芝居、体験活動などを行う。また、展示コーナー各所に体験コーナーを設置する。資料は、実物資料を重視しつつも、長期間は展示できないためレプリカを活用し、丸子船をはじめとする漁具や漁法の模型など現展示物で利用できるものは再配置して利用する。さらに、ICTを活用した県民・来館者・地域博物館の参加型展示を制作する。

## 資料3 展示空間の再構築詳細案

### ○ リニューアル前とリニューアル後の比較

現在のB展示は、「人と琵琶湖の歴史」をテーマとして、時代区分を厳密に明示せず、政治史的視点や社会経済史的視点をできるだけ取り上げない形で、縄文・弥生時代の生業、交通、漁撈、治水・利水の各テーマについて展示しており、人間活動に重点をおいたものである。新しいB展示は、現在の視点と展示テーマを継承しつつも、琵琶湖博物館などの環境史研究の成果を踏まえて、自然そのもののあり方と人間の活動との関わり、特に人間の自然認識や自然観、生き物観の変遷、自然に対する働きかけのあり方の変化を軸にして展示する。

### ○ 展示の詳細

#### 1. 琵琶湖地域のいま

##### 1-1. フナッコ大集合

ICTを利用して今のフナとのつきあい方について県民参加型・来館者参加型の調査を行い、その成果をリアルタイムで展示することで、現在の人びとと琵琶湖の生き物などとの関係やそれに対する意識を再認識してもらう。

展示物案(例)：ICTを利用した参加型調査システム。フナ料理のレプリカ。

##### 1-2. 交差するいま

現在に残る伝統的要素を抜き出して展示するだけでなく、一見、伝統的とは思えない今の暮らしや文化が過去とつながっていることを紹介する。

展示物案(例)：今の景観を示すパネルや看板、道具。

##### 1-3. フィールドの博物館

県内の特に歴史系地域博物館を紹介するコーナーをつくり、ICTを利用して、リアルタイムで各館の企画展などを紹介する。

展示物案(例)：ICTを利用した他館展示紹介システム。

#### 2. 変わる自然、変わる暮らし

##### 2-1. 変わる琵琶湖の自然と人

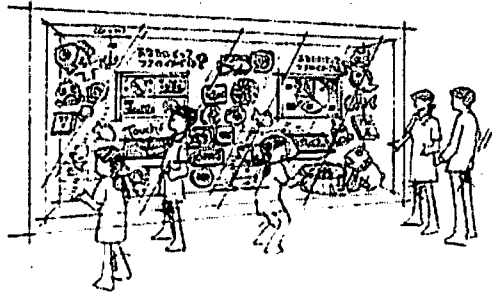
気候変動による約1万年の間の森の大きな変動を紹介し、人が暮らしてきた自然環境を考えてもらう。

展示物案(例)：現在・近世・中世・弥生時代・縄文時代・旧石器時代の道具。氷期の森と落葉広葉樹林の写真。地球規模での気候変動パネル。各時期の植物化石・遺物、動物層の変遷ミニ模型

##### 2-2. 縄文時代の自然と暮らしの移り変わり

遺跡の研究成果から見てきた縄文人の定住様式や食生活をとおした湖との関わりかたの変化を紹介。主に縄文時代中期頃までを扱う。

展示物案(例)：粟津湖底遺跡はぎとり資料。粟津湖底遺跡出土動植物遺体。食料グラフ。生業カレンダー。貯蔵穴とドングリ（発掘現場の様子と復元）、変わる季節的食料利用体験型展示。



定住様式の変化図。森の変化と定住様式の関係図。

### 2-3. 丸木舟がつないだ琵琶湖と人

丸木舟の利用によって変わった琵琶湖と人びととの関わりかたを紹介する。主に縄文時代後期以降を扱う。

展示物案(例)：丸木舟。初期型丸木舟と後期型の違い模型。釣針、魚類遺体。丸木舟により変わった漁撈の季節的变化図。丸木舟材料樹種表、スギ林復元図、屋外展示の埋没木映像、縄文のスギ花粉量。



### 2-4. 縄文の祈り

土偶や祭祀をとおして縄文人の祈りや自然観について紹介する。

展示物案(例)：滋賀県出土の土偶、石棒。

## 3. 人がつくった自然

### 3-1. イネが変えた人と琵琶湖のかかわり

弥生時代の人びとの生活様式を紹介し、自然や琵琶湖との関わりについて伝える。特に、木材資源利用に注目して、森との関係を紹介する。

展示物案(例)：水田遺構、出土稲。水田稲作の起源と伝搬図。農耕用出土木製品、農耕具の樹種とその変化図。弥生の森復元図。フナ遺体。水田とフナの関係模型。

### 3-2. 弥生の祈り

銅鐸に描かれた生き物たちを標本とともに紹介する。

展示物案(例)：銅鐸に描かれた生き物図

### 3-3. 増える自然利用

歴史時代以降の人口増加や技術革新、それによる自然への圧力の増大と森の変化について紹介する。

展示物案(例)：出土鉄器。滋賀の生産遺跡図。鉄を生み出すのに必要な森林資源量の模型。出土木材、鉄製伐採道具。人口変化図。必要燃料量と肥料量模型。木材や炭に必要な森はどれくらいハンズ・オン。変わる森の姿図と花粉模型。

### 3-4. 変わる森のすがた

人間による森林資源の利用による二次林化やはげ山、またある程度の調和をもって維持されてきた里山や木地山について紹介し、現在の森林問題を考える糸口としてもらう。

展示物案(例)：山が描かれた真景図。近江八景、華洛一覽図と描写の正確性について図。明治の森写真。天井川紹介パネル。現在の森と昔の森の写真。



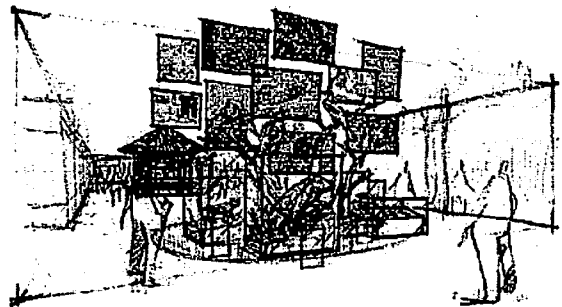
4. 殺生をめぐる葛藤

4-1. 中世生き物コレクション

中世の人びとが生き物とどう関わっていたのかを、当時に描かれた絵巻や実際の生き物と合わせて紹介する。

展示物案(例)：生き物が描かれた絵巻等

絵画資料。動物遺体。生物標本の複製や模型。涅槃図。



4-2. 六道めぐり

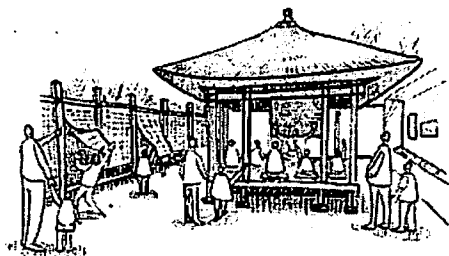
中世の人びとの自然観に大きな影響を与えていたと考えられる仏教を中心とした当時の自然観を紹介する。一切の衆生は六道を輪廻すると考えられていたことを紹介し、特に不殺生戒を犯した人間が堕ちるとされた地獄を取り上げ、それが飢饉や災害にあえぐ人々にとって現実的なものであった当時の皮膚感覚を伝える。

展示物案(例)：六道絵。

4-3. ムラの信仰 (交流スポット)

ムラの信仰のあり方を展示するため、惣堂を復元的に造作し、フロアトークや絵解きが行える交流スポットとする。また、ケース内に実物または復元した資料を安置し、その周辺に展示する。

展示物案(例)：ムラのお堂。観音菩薩立像、法具や経典、古文書。



4-4. 魚捕る技

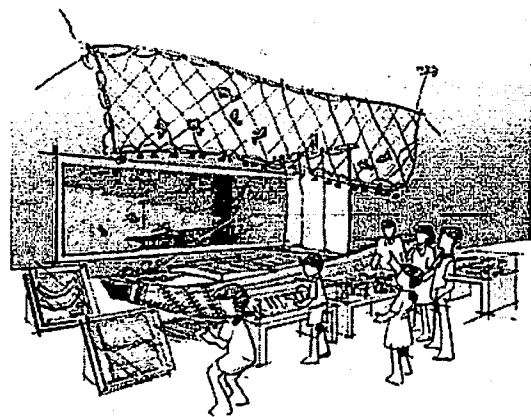
文献で明らかにされる中世から近世の琵琶湖の漁法を紹介するとともに、エリ漁を中心として漁獲技術発達の様子を紹介。また、文献には登場しない水辺の漁具も紹介する。

展示物案(例)：漁具。漁法紹介模型。

4-5. 殺生をめぐる葛藤

殺生禁断の資料を展示する一方で、神社に供えられた魚鳥類や都市で消費された魚類を展示し、説話などから、不殺生戒と漁撈との折り合いのつけ方を紹介する。

展示物案(例)：神饌や都市で売買される魚介類の模型、それらを使用した料理模型。殺生にまつわる説話紹介パネル。



5. 船とともにある暮らし

5-1. 琵琶湖の船とその歴史

琵琶湖地域の船が発達してきた過程を展示する。また、湖上交通の歴史の変遷についても展示し、丸子船という琵琶湖固有の木造船を生み出した歴史的、経済的な背景を紹介する。

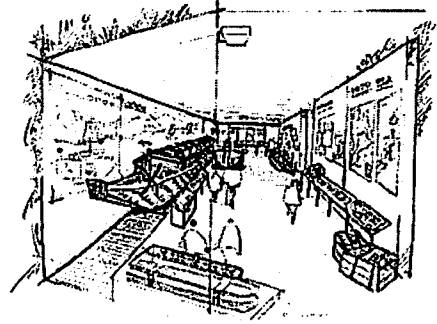
展示物案(例)：遺跡から出土した舟形木製品。

準構造船と構造船の違いを示す模型。

#### 5-2. 丸子船とその技術

復元した丸子船と丸子船断面を中心に、船道具一式を展示し、構造や技術を紹介。

展示物案(例)：船道具。丸子船に使われている木材。船をつくる技術体験展示。



#### 5-3. 暮らしを支えた船

丸子船が琵琶湖の地域間の資源の移動を担い、暮らしや産業に欠かせない存在であったことを紹介。漁船、タブネも展示し、暮らしの中に船が織り込まれていたことを紹介。

展示物案(例)：丸子船が描かれた絵画資料。船の利用の変化紹介パネル。丸子船古写真。

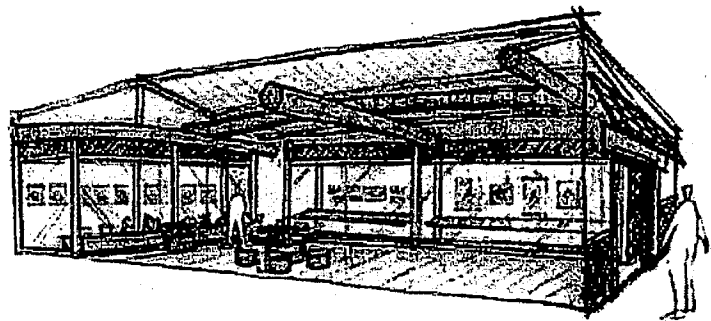
### 6. 自然へのまなざし

#### 6-1. 描かれた琵琶湖

日本国図屏風から伊能図まで琵琶湖が描かれた絵図や古文書等を紹介し、14世紀ごろから形状が琵琶に似ているという認識が生まれ、

やがて琵琶湖と呼ばれるようになったことを紹介する。また、琵琶湖周辺の植生についても併せて展示する。

展示物案(例)：琵琶湖が描かれた絵画資料、古文書。



#### 6-2. 観察された生き物

ニゴロブナ、ゲンゴロウブナ、ギンブナなどの標本を展示し、それが近世にはどのように観察され、描かれているのか、ヨーロッパ人による記載と対比する形で紹介する。また、標本を見ながら描いてみようというコーナーを設ける。

展示物案(例)：近世に描かれた生き物図、ヨーロッパに残される当時の記載。魚標本。標本を描く体験展示。

#### 6-3. 観察された石

『雲根志』に記載された石の標本を展示し、木内石亭がそれをどう描き、観察していたのかを紹介する。また、標本を見ながら描いてみようというコーナーを設ける。

展示物案(例)：雲根志。石亭の記述にある滋賀県産鉱物。明治以降の評価に関わる文献。

#### 6-4. 変わるもの、変わらないもの

明治になり新政権によって殺生禁断が解除され、また、近代主義的な自然観が強要されて、前近代的な自然観が否定されていく様子を紹介する。さらに、近代の琵琶湖研究者の事績や水産試験場などの開設を紹介する。

展示物案(例)：近代主義的な自然観紹介パネル

### (3) C展示室

#### ○ 展示室のテーマ

「琵琶湖地域のいま一身の回りの環境と暮らし再発見」

#### ○ 展示のねらいと全体構成

来館者が、琵琶湖地域で現在目にする風景を通じて、自分を取り巻く環境について発見したり、考えを深めたりできるようなヒントを提示する。

そのために重要と考えられる代表的な景観をとりあげ、その中に潜む面白さや現在に至る背景、来館者が自らとのつながりを読み解ける展示室とする。展示室を出た後の日常の中で、今まで気づけなかった物事を発見したり、興味を抱いて自らフィールドに出たくなるような仕掛けを行う。最新情報や、フィールドで活動する人びとを紹介し、フィールドへの第一歩を後押しする。フィールドで活動する人びとにとっては、成果の紹介や他の来館者などとの交流を通じて、活動の発展のきっかけとなることが期待される。

#### ○ 各コーナー展示のねらい

##### 1. 琵琶湖へ出かけよう

琵琶湖の全体像を紹介する。琵琶湖をほとんど知らない人には特徴的な景観を中心に魅力を伝え、フィールドへの誘いと観光への入り口の役割を果たす。琵琶湖とその環境について深く知りたい人には、理解の手助けとなる様々な情報を提供する。

##### 2. ヨシ原をあるいてみると

湖辺域の代表的な景観としてヨシ原を取り上げ、ヨシ原の中に分け入った時に、見えてくる世界を伝える。生き物たちが、陸域と水域の連続した移行帯でどのように暮らしているのかを伝える。また、湖辺の大湿地帯の変容と私たちの暮らしとの関係を紹介し、ヨシ原と来館者の暮らしとの間にある「つながり」を意識することができる。

##### 3. 田んぼをのぞいてみると

滋賀県の代表的な景観の一つである田んぼについて、田んぼをのぞいた時に見えてくる世界を伝えるとともに滋賀県の田んぼの特徴とこれからを考えるきっかけを提示する。

琵琶湖集水域の16%を占める水田は、固有種を含む多様な生物相が見られる。この生物相と、それを育ててきた独特な地理的条件の下での人間と自然の相互作用を紹介する。また、水田における農業の変化と生き物との関係や、新たに取り組まれている「魚のゆりかご水田」によって見えてく人間と自然の関係を紹介する。

##### 4. 川から森へ

琵琶湖地域の中・上流部の環境と琵琶湖、さらにそこに住む生き物と人との関係性を示す。雨水が森に落ち、川を流れてくることを示し、琵琶湖の水を生み出している集水域環境の恩恵を紹介する。あわせて、川や森で発生する水害や土砂災害という両面性も示し、現在取り組まれている治水・利水などの取り組みを紹介する。

また、両生類、カワウ、ニホンジカなどの生き物を通して、川と森、生き物と人との複雑な関係性を伝える。

### 5. 私たちの暮らし

暮らしが大きく変容した転換点として、昭和39年の暮らしを再現した富江家の展示をとりあげ、そこから、現在の私たちの暮らし、50年後の私たちの暮らしを考える。

富江家の暮らしの中にある物質循環や水利用の仕組みをわかりやすく示すことで、現在の暮らしと比較して考えるきっかけを提供する。この時代におけるヨシ原、田んぼ、森林とのつきあいを紹介することで、他のコーナーとの関係性を理解しやすくする。また、現在も生きている資源利用の知恵や技を紹介し、富江家の暮らしの中の様々な要素が各地に現在も残っていることを示し、フィールドへ誘う。

### 6. 生き物コレクション

琵琶湖とその集水域に生息する種類の生き物の実物標本を展示する。美しさと多様さを一目で感じられる空間を演出し、生き物への関心が薄い人にも関心の持てる展示とする。また、固有種の展示コーナーを設け、琵琶湖地域の特徴と独自性を際立たせる。

何度訪れても新たな発見が得られるよう、一部を可変性のあるトピック展示とし、例えば、生き物の変異や美しい色彩や面白い形の生き物等、生き物の変化を紹介する。

### 7. これからの琵琶湖

利用者が博物館やフィールドの最新の情報を入手できるコーナー。利用者によるフィールド情報の報告や、学芸員の最新の研究成果への質問や意見など、ICTも活用し、双方のやり取りが可能な展示とする。

## ○ 展示の手法

### ・ 利用者による展示への参加

利用者から、写真やフィールド情報を発信してもらい、ICTなどを活用して展示に生かす。これらを集約することで、利用者相互の情報交換が可能になる。フィールド活動のさらなる発展や、横のつながり作り、一般来館者の活動へのきっかけづくりが期待される。

### ・ 定期的な更新と追加展示

展示更新を前提とした展示コーナーを作成する。さらに移動式ボードや屋台式ケースなどを利用し、追加的な情報（各地の活動団体による成果、フィールドでの最新情報、研究者による研究紹介など）を期間限定で展示する。

## ○ リニューアル前とリニューアル後の比較

### ・ 身近な場面設定

現展示は、昭和30年代という「少し昔」を展示することで、現在と対比してもらおうという手法を行った。しかしこの「少し昔」を経験している世代が少なくなり、琵琶湖地域の代表的な自然環境との接点が少ない人びとが増えつつある。そこで、現在の景観を読み解く展示に変更する。

### ・ 何度来ても新しい発見がある展示

現場にでかける足がかりとして繰り返し利用される展示をめざし、季節の情報、最新の研究成果、地域の人による研究成果やフィールド情報などを展示していく。そのためにICTや、入れ替えが容易な可変型展示ユニットを活用する。



## 資料3 展示空間の再構築詳細案

### ・ 実物資料で本物の魅力が伝わる展示

各コーナーに水槽を配置し、カエル、サンショウウオ、カヤネズミなどの小型動物を生体展示する。生き物コレクションにおいて、蓄積してきた実物標本を展示し、本物の迫力と美しさを楽しめるようにする。これら実物資料の展示を強化することで魅力と説得力を高める。

### ○ 展示の詳細

#### 1. 琵琶湖へ出かけよう

##### 1-1. 空から見た琵琶湖

108 m<sup>2</sup>の航空写真(1/10,000 スケール)で琵琶湖-淀川流域を一望する。琵琶湖の大きさ、形状、自分の家との位置関係などを把握できる。様々な情報(観光名所や歴史的に有名な場所、大きな断層の位置など)もここで確認できるようにする。

##### 1-2. お気に入りの風景を見つけよう

琵琶湖とその周辺の見所を伝え、そこに行きたくなる観光案内の役目を持つ琵琶湖やその周辺の景観写真を収集し、場所や解説をカード形式で紹介。また、県民から「私のおススメの光景」を募集し、カードに加えるなど、参加型の展示としても行う。

琵琶湖湖上や山上からの展望を疑似体験できたり、音声のみで琵琶湖とその周辺のトピックを楽しめる番組を提供する。

展示物案(例): 琵琶湖と周辺の見所カード。

360度視界のゴーグル型ディスプレイ。

##### 1-3. 琵琶湖と湖をめぐる1000の話

琵琶湖や、日本・世界の湖に関する1000の話題をカードにまとめて雑学風に紹介する。

展示物案(例): 湖をめぐる1000の話カード。琵琶湖の大きさ比べ体験展示。

##### 1-4. 琵琶湖の容(かたち)と形

琵琶湖を3次的に捉えられる展示で、琵琶湖の形を紹介し、その形によって起こる水の動きなどを紹介する。また、内湖の干拓や、湖岸線の変化とその原因を紹介する。

展示物案(例): 湖底の立体模型。琵琶湖の水の立体構造。湖底世界の生き物たち紹介映像と模型。水の動き紹介パネル。水位観測データパネル。湖岸の変化今昔写真。

##### 1-5. 琵琶湖の水、その変化

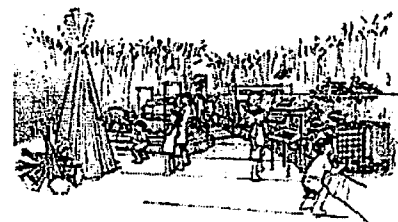
琵琶湖で観測されてきた水質などのデータを紹介し、水質向上に向けた取り組みなども紹介する。また、水草とプランクトンの関係などを紹介する。

展示物案(例): 琵琶湖の長期観測データ、水質年表、富栄養化の仕組み、湖底の低酸素化。

#### 2. ヨシ原を歩いてみると

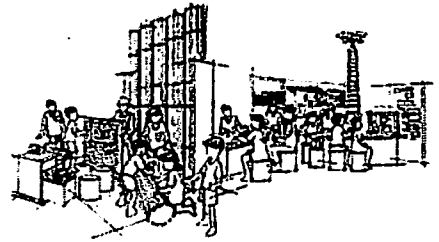
##### 2-1. ヨシ原の生き物たち

導入部から夏のヨシ原に分け入るようなジオラマで空間演出を行う。ヨシ原の音、光などヨシ原を五感で体感する。また、水辺の移行帯が存在していることが感覚的に理解できるように示す。水位の変動で水についたりつかなかったりする緩やかな環境の、生き物にとっての重要性や、ヨシの浄化の実態と迷信についても考える事例を紹介する。



ジオラマには、生物（植物・動物）の痕跡を入れておき、見つけるヒントを提示し、来館者に探してもらおう。また、水ヨシ帯に仕掛けられている漁具もジオラマに設置する。他の展示コーナーと合わせて、横断的に漁具の仕掛けがわかるようにする。

展示物案(例)：水草のジオラマと映像による水中の世界を表現したジオラマ。魚類の産卵、カイツブリの営巣等を表した水ヨシのジオラマ。ヨシの表面の付着生物の顕微鏡写真。季節毎に水位の変化に影響を受ける生き物。夏のヨシ地の生き物の剥製、レプリカ。カヤネズミの生体展示。広いエリアを利用する鳥のパネル展示。ヨシ原生き物図鑑。



### 2-2. 人とヨシとのつきあい

琵琶湖のヨシの利用、ヨシ原が景観や文化的な価値として評価されてきている現状とこれからのヨシと人の関わりを紹介する。ヨシ地の冬をヨシ屋や農家等の人の動きとともに表現する。また、体験的な展示物を使って、ヨシと接する機会を提供する。

展示物案(例)：冬のヨシ地を刈取り後のヨシとヨシの丸立ての原寸大模型。ヨシ地の1年史の紹介映像。ヨシの選別や結びなどヨシ刈りの作業体験コーナー。

### 2-3. かつての湖辺大湿地（ヨシ原と内湖）

琵琶湖の周囲（特に大きな河川の河口域デルタ地帯）に存在したヨシを中心とする湿地帯が、自然あるいは人の力で大きく形を変えてきたこと、そこから内湖、クリーク、（現存する）ヨシ原などになったことを紹介。内湖データベースを作成し、内湖の歴史や一つひとつの特徴などを調べられるようにする。地域の取り組みの紹介コーナーを設け、ヨシ原の大きな変化の中、これからのヨシとのつきあい方について考える機会を提供する。

展示物案(例)：湖岸に広がる湿地帯の変化を示す映像。琵琶湖の内湖の歴史や生物相、利用方法などのデータベース。ヨシ保全の取り組み紹介パネル。

## 3. 田んぼをのぞいてみると

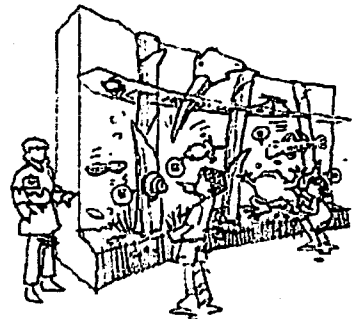
### 3-1. 田舟から軽トラへ

食糧増産への要請によって行われたヨシ帯や内湖など湿地帯の干拓による水田の拡大や、稲作の機械化、減反政策や現在の田んぼなど、水田稲作の変化を紹介する。また、水田稲作と関わりの深い食文化や神事を紹介する。

展示物案(例)：圃場整備前、圃場整備後、ゆりかご水田のジオラマ。

### 3-2. 田んぼで暮らす生き物たち

6月上旬の田んぼの無数の生物が蠢いている状態を拡大スケールのジオラマで表現する。ナゴヤダルマガエルやハッタミミズなど独特な生き物を紹介。滋賀県の水田の代表的な生き物を、21世紀に増えたいもの（カイエビなど）と減ったもの（アキアカネなど）を中心にピックアップして示す。生活史の中で田んぼと他の環境（森林・河川・湖など）を往来する生き物を、他の展示コーナーと関連づけて紹介し、異なる環境どうしの接続性の重要性を示す。ため池の働きについても解説する。



展示物案(例)：拡大スケールの田んぼの中の生き物ジオラマ(稲株、ニゴロブナ稚魚、アキアカネのヤゴ、コガムシ幼虫、マルタニシ、アオウキクサ、チビゲンゴロウ幼虫、ユスリカ幼虫、タマミジンコ、シカクカイミジンコ、ケンミジンコ等)。ナゴヤダルマガエル、ハッタミミズの生体展示。カイエビ、カブトエビ、アキアカネ(標本)、春の七草。水田利用魚類、両棲類、鳥類。ため池の植物と水生昆虫。



#### 4. 川から森へ

##### 4-1. 川と琵琶湖

上流域から下流域までを含めた琵琶湖集水域における治水や利水のための取り組みと、それに起因する河川生態系の問題を含めて紹介する。川と森とを生息場所とする生き物(タゴガエル、コガタブチサンショウウオなど)を生体展示し紹介する。

展示物案(例)：河川環境のジオラマ。生き物の生体展示。河川生態系の抱える問題紹介パネル。流域治水利水の取り組み例の概要模型+映像。水害や土砂災害の対策パネル。

##### 4-2. 琵琶湖をかこむ森

大きな数本の木のジオラマを配置し、森にいるような雰囲気の中で、カワウ被害林、シカ食害林、人工林問題を取り上げ、現在の森の問題について考えてもらう。琵琶湖へ注ぐ水の源としての森の保水や洪水調整機能など森林の機能や、現在進められている新たな森林利用、地域活動団体の取り組みなどを紹介する。

展示物案(例)：カワウの住む森ジオラマ、森の変化パネル。

昆虫標本。竹生島での人とカワウについての文書。カワウの基本的特徴と琵琶湖での減少と増加パネル。鶴の山紹介パネル。獣害問題の写真や映像。シカとイノシシ剥製。シン垣や電気柵。人工林の模型。枝打ちや間伐技術の体験型展示。花粉症の解説。山地の森と流れる水のジオラマ。森と裸地での水の流出の違い模型。斜面の深層崩壊の模型。昔の森林利用。



#### 5. 私たちの暮らし

##### 5-1. 変わる暮らし

1950年代から現在までの家電製品、流行の品、おもちゃなどを展示する。水利用形態の変化、お風呂の変化、琵琶湖地域において、暮らしに変化をもたらした事柄(橋の建設、電車の開業など)についても取り上げる。来館者が生きてきた時代をふりかえるとともに、現在と昭和39年の暮らしとをつなぐ場として位置付ける。

展示物案(例)：私たちの暮らし50年をしめす生活用品や食品、文化的な資料。琵琶湖の年表。古写真と現在の場や同様の内容を示す現在の琵琶湖周辺写真。

##### 5-2. 昭和39年富江家の暮らし

昭和30年代の農村の暮らしについて、当時の道具や仕事、暮らしの工夫などから、捨

てるものがない、電気に頼らない、水路を通した繋がりがある暮らしぶりや、当時の楽しみ、苦勞などを伝える。物質循環や水循環について、現在と比較する視点を提供する。

展示物案(例)：道具の使い方がわかるタブレット端末。富江家で座って見る語りの動画。

### 5-3. 自然の恵みを生かす知恵

現在も行われている、環境や生き物からの恵みを生かす工夫や知恵を紹介する。農作業、工芸など。展示替えを前提としたスペースとし、定期的に更新する。

展示物案(例)：青花紙、淡水真珠、近江雁皮紙、苧麻、水口かんぴょうなど

### 5-4. これからの暮らし

50年前(昭和30年代)の暮らしと現在の展示をヒントにしながら、50年後の暮らしがどうなってほしいかを考える機会を提供する。

展示物案(例)：富江家民家と本庄地区の模型。現在の新興住宅地の模型。未来の暮らしを考える体験型展示。

## 6. 生き物コレクション

### 6-1. 生き物のにぎわい

琵琶湖とその集水域の生き物の多様性を伝える。琵琶湖で独自に進化した固有種(50種以上)、生物の形態的多様性や遺伝的多様性などの生物多様性について紹介する。

展示物案(例)：ビワマスなど魚類17種、ナガタニシなど貝類30種、ビワミジンコなど甲殻類4種、水生植物2種、昆虫類2種、その他無脊椎動物4種、珪藻2種、寄生生物4種等の固有種。山地の大型猛禽類や水辺の主な鳥類。琵琶湖淀川水系の淡水貝類。陸産貝類。滋賀県産昆虫類、滋賀県の昆虫相紹介。哺乳類。外来種、草食哺乳類、絶滅種。陸生植物。水生植物。滋賀県産両生・爬虫類。カエルの見分け方紹介。普段見ることのできない生き物(ワラジムシ、ヒル、カイエビ、モクズガニ等)。ハリガネムシ、サナダムシなど魚類の寄生生物。触れる生き物模型。

### 6-2. トピック展示

生物多様性に関わるトピックを一定期間ごとに更新しながら展示。生物の変異、美しい色彩や面白い形の生き物を紹介し、昭和30年代から現在までの琵琶湖とその集水域の生き物の変化や、絶滅が危惧される生き物などを紹介し、生き物を見る視点を提供する。

展示物案(例)：地理的変異など変異を示す生き物(昆虫類、陸貝類等)。美しい色彩や面白い形の生き物。生き物の移り変わり紹介パネル。

## 7. これからの琵琶湖

### 7-1. 研究スタジアム

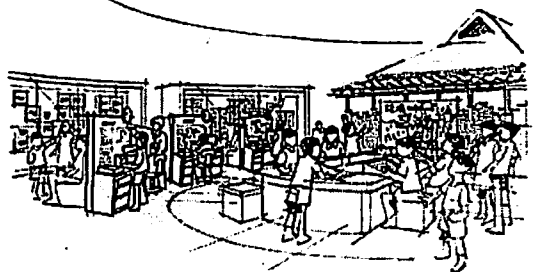
展示ブースで学芸員などがモノや動画などを使って、琵琶湖を知るための最新の研究成果を毎年更新しながら紹介する。来館者の意見を残すことにより、双方向のやり取りを行う。

展示物案(例)：最新研究紹介ブース。

### 7-2. みんなでつくるフィールド情報

フィールドからの情報が集まり、閲覧できる。インターネットページと連動させ、自宅のパソコンなどから見られる。登録メンバーは、ページ上で観察情報をあげられる。

展示物案(例)：フィールド情報発信コーナー。



## (4) 水族展示室

### ○ 展示室のテーマ

「琵琶湖地域のいま ～水中の生き物と私たち～」

### ○ 展示のねらいと全体構成

魚類、貝類、甲殻類をはじめとした琵琶湖とその集水域の様々な生き物を生きた状態で展示し、各種の特色やそれぞれの生息環境を通じて、琵琶湖の生物多様性とそこから育まれた「生き物と人との関わり」を伝える。また、季節によって違う生き活きとした姿などを紹介することで、驚きや発見を促し、興味深く接することのできる展示を行う。

### ○ 各コーナー展示のねらい

#### 1. 琵琶湖の生き物とその環境

生き物のすむ環境という視点から、沿岸帯、沖合、岩礁帯などの環境に生息する魚を紹介し、魚のすみかとしての琵琶湖にある環境の多様性を伝える。また、琵琶湖固有の生き物や、不思議な生態をもつ生き物を紹介する。魚の繁殖行動や、面白い習性をもつ魚などをトピック的に展示するなど、変化のある展示を行う。

#### 2. 琵琶湖の生き物と人との関わり

琵琶湖やその周辺の魚とともに発達してきた漁撈、食文化、水辺遊びを紹介することで、魚と人間活動との関係を伝える。

#### 3. 川の生き物とその環境

琵琶湖に流入する川を遡上していくイメージで、下流域、中流域、上流域の生息環境とそこに生息する生き物を紹介する。下流域では、川を模した水槽でアユの遡上とそれを漁獲するためのカントリーヤナを再現し、ヤナを上ろうとするアユの行動を見せる。また季節的な魚の行動を紹介する。

#### 4. 水辺の鳥たち

カイツブリやカモ類など水辺に生息する鳥について、陸域と水域の両側の生息環境や、その行動や生態を紹介する。

#### 5. よみがえれ!!日本の淡水魚

日本の各地で減少している希少淡水魚について、生体展示を行うとともに、減少した要因や希少淡水魚をとりまく現状を紹介。また、希少淡水魚の系統保存を行い、国内では琵琶湖博物館にしか設置されていない保護増殖センターの取り組みを紹介する。

#### 6. 古代湖の世界

長い歴史をもち、その湖にしかいない生き物(固有種)が生息する湖は古代湖とよばれる。世界一古い歴史をもつバイカル湖やアフリカの湖など世界の古代湖の生き物を紹介するとともに、世界でも数少ない古代湖の一つである琵琶湖の特徴を紹介する。

#### 7. 生きた化石 古代魚

古い時代から形態を変えず今日まで残った古代魚を紹介し、魚類の進化を解説する。

## 8. ふれあい体験室

琵琶湖に生息する魚やザリガニを直接触ることができるコーナーを設け、「触る」という体験を通じて魚類や水辺の生き物を身近に感じてもらう。

## 9. マイクロアクアリウム～琵琶湖の生態系を支える小さな生き物たち～

肉眼では見えないプランクトンなどの微小な生き物について、顕微鏡や映像で紹介し、見えないけれどそこにいる生き物が琵琶湖の生態系を支えていることを紹介する。

## ○ 展示の手法

生き物の生き活きとした姿を紹介すると同時に、人や環境との関わりを水槽内外の展示物によって紹介。不思議な生態がみられる季節限定の展示など、季節感を持たせた展示を行う。

## ○ リニューアル前とリニューアル後の比較

現展示の大きな水槽については、建物の躯体と一体で形を変えることはできないという制約の中で、多くは魚類などの紹介にとどまっていたが、新しい展示では生息環境に近い形で生き活きとした魚の姿を展示する。時には魚のダイナミックな産卵行動や稚魚など発育段階の異なる展示も行い、季節性に富んだ琵琶湖とその集水域の生き物を紹介する。

ニゴロブナとふなずしの関係、内湖や沖合における漁法など、「琵琶湖の魚と人の関わり」について、生きた魚とともに漁業や食文化を紹介。魚屋を模した展示で、水槽の中の魚は琵琶湖周辺で様々な料理で食されていることや、川を遡るアユとその習性を利用したカントリーヤナの設置など、従来水族館等では見られない手法で展示を構成する。

また、湖の生態系を支える微小生物を中心とした展示を新設。これまでの研究で明らかになった新種や琵琶湖のプランクトンについて、顕微鏡や大型スクリーン、模型などを用いて展示をするほか、スタッフが常駐し、飼育設備などのバックヤード設置やえさやりも展示室内で行なうことで、交流を深めながら「小さな生き物」とその役割について紹介する。

## ○ 展示の詳細

## 1. 琵琶湖の生き物とその環境

## 1-1. 内湖・ヨシ原の生き物たち

琵琶湖沿岸や内湖の植生帯を再現し、そこに生息する魚類や貝類、水草について紹介。陸域と水中の両方からそれぞれの環境を眺める水槽とする。ヨシ原部分を拡張し、魚類にとっての植生帯の重要性を紹介。

## 1-2. 沖合の魚たち

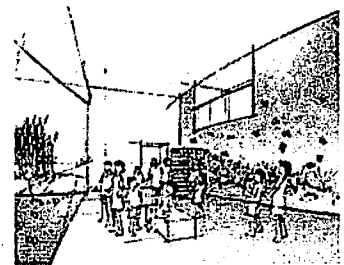
琵琶湖の沖合に生息するビワマス、ハス、ウグイなどをトンネル水槽で紹介する。トンネル水槽を出た部分には、沖合で行なわれる漁法についても紹介する。また、水槽付近に漁具を設置するなどにより人間活動との関わりを紹介する。

## 1-3. 琵琶湖の主、ビワコオオナマズ

日本最大級の淡水魚であり、琵琶湖淀川水系固有種のビワコオオナマズの生体展示と、当館の研究でこれまでに明らかになってきた産卵生態などについて紹介する。

## 1-4. 湖底の生き物たち

琵琶湖の湖底に生息するイサザ、ビワオオウズムシ、アナンデールヨコエビなどを生



体展示する。

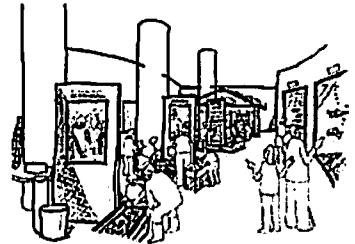
#### 1-5. 琵琶湖のコアユ

琵琶湖の沖合を回遊し、最も重要な漁業資源であるアユについて、大きな群れをつくった生体展示を行なうとともに、琵琶湖内では大きくなならない理由などを紹介する。

### 2. 琵琶湖の生き物と人との関わり

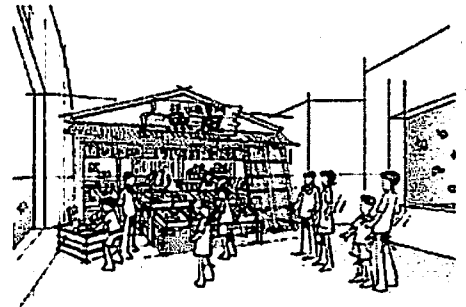
#### 2-1. 琵琶湖の固有種

ニゴロブナ、ゲンゴロウブナ、ホンモロコなどの琵琶湖固有種や沿岸域に生息する魚の生態や特徴について各水槽で紹介。固有種の成立や近縁種との関係もパネルで紹介する。



#### 2-2. 琵琶湖の魚を食べる

琵琶湖固有種を主とした漁業や湖魚料理などの食文化について紹介。琵琶湖の魚を獲る人、売る人、作る人、守る人などのインタビューパネルや道具などを展示し、湖魚がどのように利用されているのか、どのように水産資源管理がなされているのかを紹介。また、川魚屋を模したジオラマで、「琵琶湖の魚を食べること」から、湖魚料理の魅力と琵琶湖と人との関わりを知ってもらう。



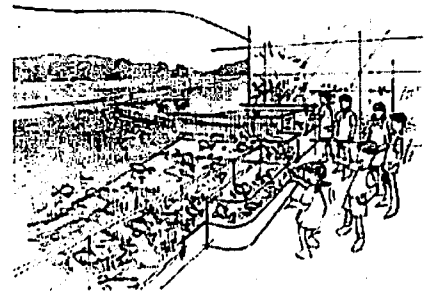
#### 2-3. 連れてこられた生き物たち

オオクチバスやブルーギル、ミシシippアカミミガメなどの外来生物を展示し、人との関わりによって滋賀県に定着していること、それらが生態系に引き起こしている問題について紹介する。

### 3. 川の生き物とその環境

#### 3-1. 下流域の魚と漁

河川の下流域を模した水槽を設置し、アユ、オイカワ、ヨシノボリなど下流域に生息する魚類を展示する。また季節に応じてカトリヤナを設置し、アユがそこをジャンプして上ろうとする姿を紹介する。



#### 3-2. 中流域の生き物たち

カワムツ、ウグイ、ズナガニゴイなど河川中流域に生息する魚を河川の環境を模したジオラマ水槽で紹介する。

#### 3-3. 上流域の生き物たち

滝壺をイメージした水槽の中で、アマゴやイワナが泳ぐ姿を紹介する。また小水槽では、ナガレヒキガエルやサワガニなど上流域に生息する水生生物を紹介する。

### 4. 水辺の鳥たち

#### 4-1. 琵琶湖の水鳥

カイツブリやカモ類など水辺に生息する野鳥を紹介する。陸域と水域の両側を見ることができるよう工夫し、えさやりタイムの実演などを通じて行動、生態を伝える。

## 5. よみがえれ!!日本の淡水魚

## 5-1. 絶滅のおそれのある魚たち

絶滅のおそれがある日本各地の淡水魚を水槽で紹介するとともに、その減少要因や現状、全国各地で行われている保全活動について紹介する。

## 5-2. 保護増殖センター

保護増殖センターを俯瞰する場所で、絶滅のおそれのある魚類を系統保存する意義と、国内の希少淡水魚の保全における琵琶湖博物館の先進的な取り組みを紹介する。

## 6. 古代湖の世界

## 6-1. 世界最古の湖 バイカル湖

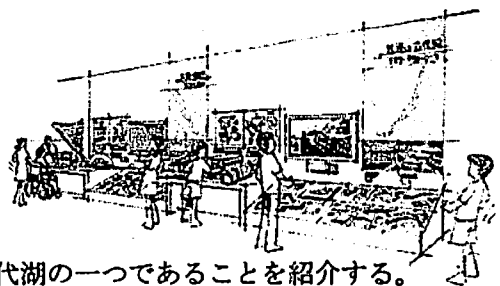
3000 万年の歴史を持つ世界最古の湖とされるバイカル湖の固有の生き物(カジカ類、バイカルヨコエビ類、バイカルアザラシなど)を紹介。その生い立ちの古さがどのような湖の環境をつくっているかを紹介する。

## 6-2. アフリカ大地溝帯の湖

古い生い立ちをもつ湖がいくつも連なっているアフリカ地溝帯にある湖(タンガニーカ湖、マラウイ湖、ビクトリア湖)に生息し、それぞれ固有に進化してきた淡水魚を紹介する。

## 6-3. 世界の古代湖

世界の古代湖を解説。琵琶湖は世界で数少ない古代湖の一つであることを紹介する。



## 7. 生きた化石 古代魚

## 7-1. 古代魚と魚の進化

古生代に繁栄したといわれるチョウザメやガーを展示。淡水魚の進化やその歴史について紹介する。

## 8. ふれあい体験室

## 8-1. タッチングプール

琵琶湖固有種のニゴロブナやザリガニに触ることができるプールを設置し、来館者と交流を行ないながら水辺の生き物について紹介する。

## 8-2. ふれあい水槽

横から手を入れることのできる水槽を設置し、魚の水中での動きを観察するとともに、水槽の水がなぜこぼれないか、水槽の構造・仕組みなどについても紹介する。

## 9. マイクロアクアリウム～琵琶湖の生態系を支える小さな生き物たち～

## 9-1. 小さな生き物たち

琵琶湖地域にいる小さな生き物のうち、肉眼でその存在を確認できるものを生体で紹介することで、その大きさ感をじてもらう。プランクトンや付着藻類を中心に、季節によって仔稚魚、カブトエビ、ホウネンエビなどを紹介する。



## 9-2. ヨシの表面世界

ヨシの表面を拡大して観察した時に見られる世界を、倍率の違う複数の場合で扱うことにより、その不思議な世界を紹介する。

## 9-3. マイクロバー

顕微鏡を設置して、来館者の興味によって小さな生き物のより詳しい観察を可能にする。

## 9-4. マイクロワールドシアター

だれもがゆったりと気楽に小さな生き物の観察ができるシアター形式で見られるコーナー。

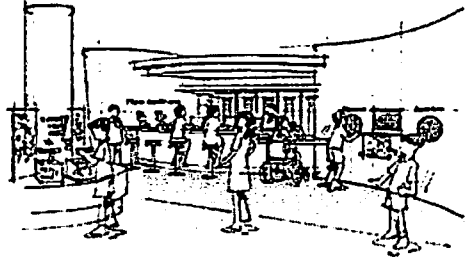
通常は、小さな生き物の形態、生態、行動などに特徴のあるものの映像を放映し、定期的に解説する時間を設ける。

## 9-5. マイクロワールドの物理学

小さな生き物が動きまわるのは、人間が思っているほど簡単なものではないことを、解説と実験器具を使った体験的な展示で紹介する。

## 9-6. 微小生物と人との関係

微小な生き物と人が直接的、間接的にどのように関係しているのかについて紹介する。



## (5) ディスカバリールーム

## ○ 展示室のテーマ

「体験をとおして自然と人の暮らしについての発見ができる展示室」

## ○ 展示のねらいと全体構成

子どもと大人と一緒に楽しみながら、琵琶湖を中心とした湖と人間の様々なことを自ら発見することを促す。また、他の展示室や活動の楽しみ方や使い方の導入になるようにする。

普段目にすることの少ない生き物の生息場所を探したり、昔の暮らしの知恵を発見したり、研究者が行っている研究を体験するなど他の展示室に関連するいくつかのコーナーと、ディスカバリーボックス(あるテーマにそった資料やつくられた資料が入れられた箱)からなる。各コーナーやボックスはテーマによって独立しており、どのコーナーやボックスからはじめても、またどれか一つだけでも楽しむことができる。

## ○ 主な展示のねらい

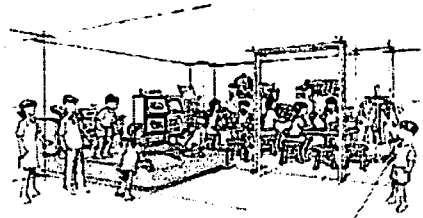
## ・ なりきり研究室

研究者になったつもりで顕微鏡をのぞいたり、レントゲン写真をみたり、標本・資料のはいったディスカバリー

ボックスを使ったりすることで、研究するということの雰囲気を経験し、身近に感じてもらう。また、資料の扱いなどについて知る仕掛けをつくることで、博物館利用の導入となる。

## ・ ディスカバリーコーナー

30 タイトル以上の様々なテーマのディスカバリーボックスがおかれ、利用者がタイトルからボックスを選んで使用できることで、多様な興味に対応可能。多くのボックスを用意す



ることで、何度も利用する人が別のことにも興味をもつきっかけを提供する。また、職員が対応するカウンターによって、この展示室での交流やイベント時の中心的コーナーとなる。

・ おばあちゃんの台所

滋賀県の古い民家の雰囲気を再現し、季節に合わせた暮らしや行事について、体験的に知ることができる展示とする。興味を持ってもらうことで、他の展示室の同様の内容の導入としても機能する。

・ わたしたちの宝物～地域を紹介～

主に子どもたちがフィールドから採取してきた宝物のような標本・資料を持ってきてもらって期間限定で展示することで、フィールドのおもしろさや不思議を紹介する。

○ 展示の手法

基本的にすべてのコーナーはハンズ・オン展示とする。ボタンを押すと生き物の鳴き声が聞こえる、顕微鏡をのぞく、生き物の目線で体を動かすなど、様々な手法を取り入れる。

○ リニューアル前とリニューアル後の比較

現在の展示室は子どもだけのための部屋ととらえられがちであるが、大人と子どもが一緒に楽しめる仕掛けを盛り込む。また、他の展示室との関係を強め、博物館利用の導入的な機能をもった展示やディスカバリーボックスを設置する。既存展示内容の一部をディスカバリーボックスで展開するなどによって、観覧や体験をゆったり行える空間とする。

○ 他の展示例

・ 世界の子どもたちと世界の湖

世界の子どもたちがどんな暮らしや遊びをしているのかを紹介。調査情報などの紹介も行い、定期的に入れ替える。展示ケースを追加し、実物資料などの展示も行う。

・ (仮)ザリガニになろう

生き物の大型模型の中に入って、動かしながらエサを獲得するなど、生き物の動作を体験的に行う展示。大人や車いすの子どもも使えるなどユニバーサルデザインに対応した作りにする。

・ 水の中の生き物・石の下の生き物

触ることができる琵琶湖地域の水中のジオラマ、また琵琶湖周辺の森にいる生き物のジオラマを展示。季節によってジオラマの雰囲気も変える可変性のある展示。

・ 動物のすみか

人の暮らしに関連した場所での動物のすみかを紹介する。

・ 人形劇場

来館者が、湖とその周辺地域の自然環境や人びとの人形を使って自ら創作した人形劇を行いながら、環境や暮らしについて考えられるコーナー。

・ 音の世界

人の暮らしや自然環境にある音を体験する。防音設備のある小規模な部屋で、世界の人が使う民族楽器や、暮らしの音、生き物の鳴き声や様々な環境の音などを紹介する。

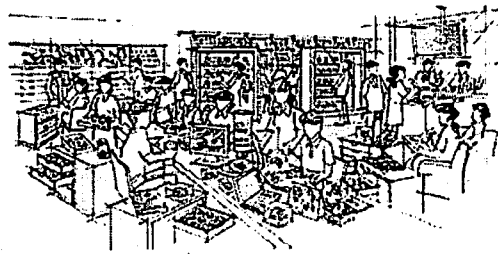
## (1) 大人のディスカバリー ～大人も遊べるリアルな知的空間～

### 1) 目的

大人の興味や探求心に応え、繰り返し利用されることを目的として、多様な実物資料（標本や剥製）を来館者が自由に触れられることができ、顕微鏡で観察できる知的空間を整備する。本物の博物館資料に触れながら、利用者自身が調べたいことを、ここで調べることができるようにする。学芸員など博物館スタッフがサポートすることで、博物館の楽しさが伝わり、琵琶湖や自然への関心を高め、地域や博物館での活動への参加意欲につながる学習交流空間とする。興味に応じた利用が出来るように、だれもが立ち寄りやすいように配慮する。

### 2) 内容

- ・ 相談コーナー：対面、電話、ネット、郵送での質問や相談に対応する。スタッフは学芸員、司書、展示交流員を中心に、博物館や地域で活動している人も参画できる場とする。
- ・ 調べるコーナー：パソコン、Wi-Fi 環境の整備、顕微鏡 (Discovery)
- ・ 標本コーナー：剥製、生物標本、液浸標本、骨、化石、岩石、歴史資料、民具など
- ・ 生き物コーナー：昆虫、両生類、は虫類などの生体展示
- ・ 映像コーナー：動画や静止画などが見られる情報ブース
- ・ 実演コーナー：[普段は見る事が出来ない博物館スタッフの資料整理などの実演]
- ・ 休息コーナー：だれもが立ち寄りやすいようなオープンスペース



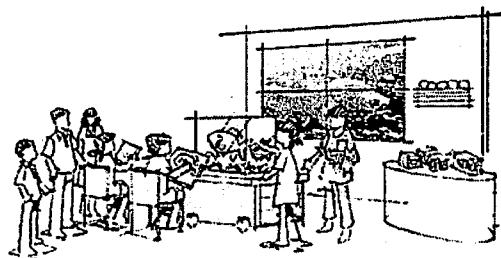
## (2) ワクワク体験スペース ～だれでも楽しく体験～

### 1) 目的

現在の館内での交流体験活動は、学校連携の一環で実施している学校団体向け体験プログラムを実習室で行っているのが主な状況である。そこで、より多くの来館者にとって魅力ある博物館として利活用してもらえるように、家族やカップル、シニア層など個人や小グループで来館されても博物館を楽しく体験できるプログラムを提供する。

### 2) 内容

- プログラムや自分で楽しめるワークシートを用意し、ハンズオン展示や ICT などの手法も活用して、だれもが展示を楽しめるようにする。
- 利用者の知的好奇心を刺激し、博物館活動や展示の利活用につながるよう、実習室にも多くの実物資料等を効果的にディスプレイできるようにする。また、来館者から体験活動が見えやすいように壁面や扉の材質、窓の設置等を検討する。



- 生活実験工房、企画展示室（展示が開催されていない期間）、ホール、セミナー室、実習室、アトリウムなどで、体験プログラムなどを開催する。必要に応じて提供しやすいように移動式の体験ワゴンセットなどを整備する。

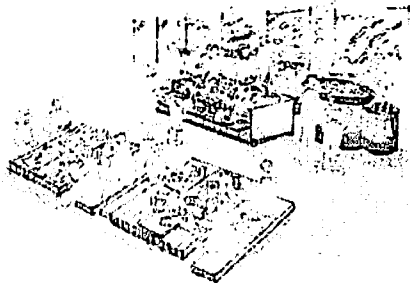
### (3) レストラン・ショップのアミューズメント機能強化 ～地域のオリジナルな魅力を発信～

#### 1) 目的

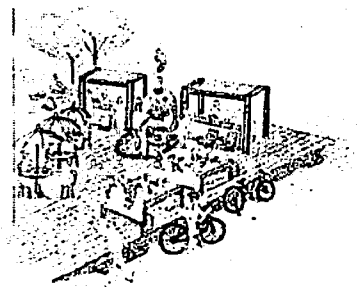
- 来館することの魅力向上を図るため、博物館内でしか味わえないもの、手に入らないものなど、オリジナル性に富んだ商品の開発と提供をミュージアムレストランとミュージアムショップにおいて増加させる。
- 博物館内でゆったりと過ごし、心を調えることができる空間整備の一環として、食の楽しみにあわせて寛げるスペースや環境を充実させる。

#### 2) 内容

- 季節に応じて琵琶湖の固有種やジビエ、環境こだわり農産物など、地元の食材料を用いた料理などの提供を、博物館や滋賀県のネットワークを活かし、ミュージアムレストランと連携して実施していく。
- 博物館としての空間の魅力を活かした音楽コンサートや、館内展示ツアーと合わせた特設レストランの開設など、オリジナル商品の魅力を発信するイベントや広報を工夫して実施する。



- 博物館の知見や研究内容を活かしたオリジナル商品の開発と提供、博物館ならではの書籍やグッズの品揃えなど、ミュージアムショップと連携して増やしていく。
- 展示見学だけで疲れる博物館疲労を生じさせないためにも、来館者が観覧や交流の合間にゆったりと過ごすことができる空間が必要であり、快適に過ごせる休憩スペースとして、レストランの外側に隣接する眺望あるテラスを活かしていく。
- ゆったりと寛ぎ、屋外空間にも誘えるよう、樹冠トレイルへの結節点としての機能を持たせて整備する。また、館外への飲食物のテイクアウトができるなど、屋外空間からの利便性も高める検討を行う。



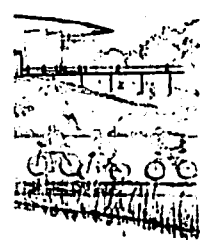
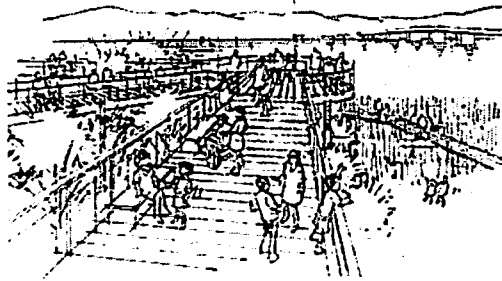
#### (4) 樹冠トレイル ～自然に近づき、琵琶湖を感じる～

##### 1) 目的

琵琶湖の湖畔にある立地条件を十分に活かし、来館者が琵琶湖や野外空間の自然をたっぷりと体感し、また心に残していくことができるように空間を整備する。

##### 2) 内容

- 樹冠トレイルは、開館以来育ててきた屋外交流空間の植栽マスタープランを基にして、様々な森の様子を観察、体感できるよう、「照葉樹林の森」、「落葉樹林の森」、「メタセコイアの森」の3ゾーンを横断できるようにルート設定を検討する。
- 昆虫や鳥などを観察しやすいように、緩衝地帯や林床を活用して食草や食樹を増やしていく。
- 樹冠トレイルを活用して、来館者が季節毎の樹木の変化や、夜間の森の生き物の様子を楽しめるように映像中継設備の設置等、観察会などが実施しやすい工夫を行う。
- 屋外展望デッキは、来館者が琵琶湖をゆっくりと眺めながら休息できる空間として、また琵琶湖の風景や博物館の建物をバックにして記念写真や集合写真を撮ることができるスポットとしても整備する。



#### (5) 環境学習センター ～多様な主体とのネットワークを活かす～

##### 1) 目的

滋賀県地球温暖化防止活動推進センター、滋賀県グリーン購入ネットワーク、滋賀県環境保全協会、淡海環境保全財団など県域の環境保全関連機関や団体をはじめ、国際湖沼環境委員会 (ILEC)、市町域、地域のNPOや団体等、多様な主体と連携して、環境保全活動を主体的に実施していく人材を育成する機能強化を図るため、交流や協働を進めていく空間と体制を整える。

##### 2) 内容

- 事業の展開内容は、改定された第4次滋賀県環境総合計画に規定のに基づき、次の事業について中間支援機関として取り組んでいく。

##### 展開1：一人ひとりの暮らしを見直す

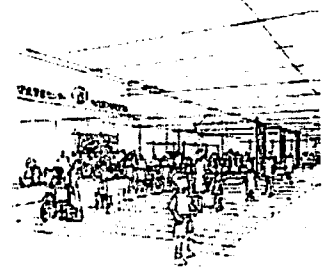
環境にやさしい消費学習や生活行動など、一人ひとりが暮らしの中から始める持続可能な社会づくりについて気運を高める。

展開2：実践行動を支える、広げる、高めあう

地域から人材を発掘し、一人ひとりの学びや実践行動を支え、導き、ファシリテートする人材（リーダー）育成を進める。

展開3：世代を超えて地域から学びあう、課題を解決する

自然環境やごみの問題のみならず、エネルギー、消費、歴史、文化など、持続可能な社会づくりに関連するあらゆる分野を対象とした、地域ならではの環境学習プログラムの展開を支援し、異なる世代をつなぎ、持続可能な地域づくりに資する。

展開4：学びをつなぎ、学校と地域をつなぐ

学年や教科等を通じた体系的な学びを、日々の暮らしの中での実践や地域の課題解決へつなぐなど、学びの場につながりを持たせるとともに、ライフステージに応じた環境学習の充実を支援する。

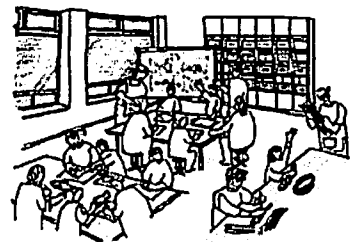
展開5：滋賀をまるごとつなぐ

環境学習に関わる主体の協働、連携を核とした交流機会づくり、企画サポート、コーディネート、ネットワークづくりを進める。

- ILEC（国際湖沼環境委員会）と協力連携して、海外の環境学習実習生の受け入れ、コーディネート、派遣事業など、国際的な取組を実施する。

**(6) 地域環境活動交流室 ～活動の輪を地域から広げる～****1) 目的**

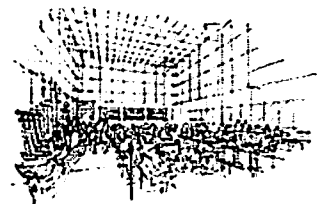
環境保全活動や伝統・文化歴史などについて地域で活動する取組の輪が広がっていくように、環境学習センターや琵琶湖博物館に関連する団体やグループ、ボランティアグループ、地域で活動している団体などが活動し、交流活動のネットワークが広がり、多様な環境学習や環境保全活動が展開できるよう環境自治の基盤強化に資する。

**2) 内容**

- 多様な主体が協働連携してワーキングや交流ができる共同利用の活動交流室を整備する。

**(7) 学校・団体向け屋内スペース ～団体利用の快適性向上～****1) 目的**

学校等の大規模団体の利用促進を図るため、開館以来ニーズの高い昼食スペース、待合・休憩スペース、体験学習も行える多目的な屋内スペースを、ユニバーサルデザインに配慮して整備する。

**2) 内容**

- 団体へのオリエンテーション、多人数の昼食利用や荷物保管ができるようにする。
- 障害のある方も利用できるUD対応の休息スペースとして整備する。
- 多人数の利用に対応できるように、水回り、大型映像を活用できるなどの設備を整える。

琵琶湖博物館の交流活動の魅力が、さらに多くの来館者に見える形で伝わり、広がる新しい機会を提供する。琵琶湖というフィールドを存分に活かして、琵琶湖を体感する楽しさや、発見する面白さを共有する交流を展開する。

## (1) 見える、伝わる、広がる 参加と交流

### 1) 博物館から生まれる楽しさが見えて伝わる交流

琵琶湖博物館で行われている様々な研究や資料収集、展示、交流などの活動には、新たなことを発見する楽しさや感動がある。その魅力や、博物館を利用し楽しんでいる人びとの活動を来館者に伝えることにより、新たな博物館ファン層が広がる交流を目指す。

#### ・ 展示と来館者をつなぐ「展示交流員」

展示交流員は琵琶湖博物館が開館時に始めたスタイルで、展示を通して来館者と交流し、興味を引き出し、展示を身近に感じ親しみ、楽しんでもらえる交流活動を展開している。

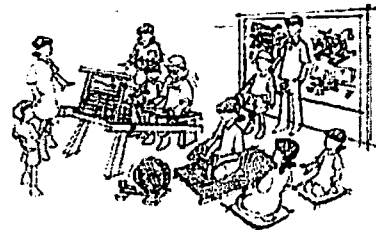
展示と来館者をつなぐ交流を大切にする琵琶湖博物館にとって、展示交流員は欠かせない役割を担っている。しかし、現在の展示交流員の配置数は、本来の目的である展示室での交流を実現するためには不十分な状況にある。リニューアルでは展示交流員の配置を検討し、展示室での交流活動を活発に行っていく。

### 2) 自らを発見し実践できる参加と交流

琵琶湖博物館は、市民参加型の博物館として「はしかけ制度」や「フィールドレポーター」など先進的な取組みが国内外から注目されてきた。しかし、これらの活動の発信が弱く、来館者にはその魅力が十分に伝わってこなかった。そこで、展示室や交流空間において、交流を来館者に見えやすくすることで、その魅力を伝え、交流の輪を広げていきたい。一方で、博物館の社会的役割は多様化しており、琵琶湖博物館においても17年間様々な活動をする中で、博物館が初めての人や、何か関わってみたい人が気軽に参加できるような新しい仕組みへのニーズが生まれてきている。そのようなニーズに対して、だれもが個人の能力を発揮できる場や交流を始めるきっかけとなる制度を整える(図1)。その方法については、試験的な事業を行いながら利用者とともに検討していく。

#### <はしかけ制度>

はしかけ制度は、平成12年に開始し、現在17グループが活動している。活動はグループに分かれて行われ、興味のある特定の分野を深く追求することができる。このような活動の様子を実際に見てもらうことで、さらに多くの人々にその魅力を伝えられるように、はしかけと来館者との交流の場や機会を提供する。



#### 新たな交流案

- ・ はしかけとじっくり話ができるはしかけ発表交流会を開催する。

## 資料5 交流機能の再構築詳細案

- ・初めてでも楽しんで参加できるはしかけオープンハウスなどの交流イベントを実施する。

### <フィールドレポーター制度>

開館前行われていた参加型調査から発展したフィールドレポーター制度は、会員数は平成18年度には170人を超えたが、近年は100人前後で推移している。調査は年2回行われており、現在は展示室で調査結果をポスターにより発表している。今後はICTを活用し、フィールドレポーターからの地域情報をタイムリーに展示室に届けるようにする。

### 新たな活動案

- ・みんなで見つめる滋賀の生き物・暮らし調査  
滋賀県内の季節の生き物や暮らしの情報について、毎年決めたテーマで記録を蓄積し、変遷について調査する。ホームページやスマートフォンを活用し、気軽にだれもが参加できるものにする。(調査例：たんぽぽ咲いた調査、つばめ見た調査、ヨシ刈った調査など)
- ・進行中の調査状況や調査結果を展示室等にリアルタイムに反映  
調査の進行や経過について、展示室やホームページなどで発信する。
- ・地域での交流会や合同調査会  
調査報告交流会や調査会を地域の活動グループと共同で実施し、地域と参加者の交流のきっかけとする。調査方法や普段の活動について互いに伝え、楽しく学びあえる場とする。
- ・学芸員との共同調査  
これまで行ってきた40回を超えるアンケート型調査は、学芸員とフィールドレポーターがテーマや調査方法について議論し、共同で実施してきた。これは、互いに学びあう効果の高い手法であり、今後も学芸員の積極的な参加により計画的に実施していく。

### <新たなニーズに向けて試行的に取り組む事業>

琵琶湖博物館に関心を持った人、ファンでありサポーターである人たちが集まり、博物館の新しい交流についてともに考え、博物館を使って実践できる場を整える。参加者各自のステップに合わせて実践ができ、将来にわたり「湖と人間」のより良い関係を多様な視点から考え、地域でも活動できる人材が持続的に育つことを目指す。

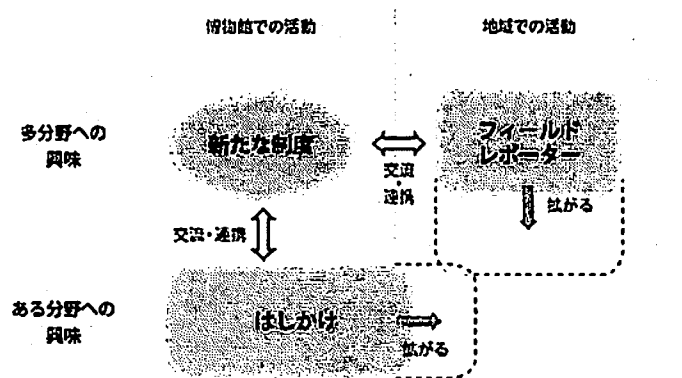


図1 新たなニーズと交流活動の概念図

## (2) 琵琶湖を感じる・体験する交流

琵琶湖博物館と周辺のフィールドを活用し、フィールドの楽しみ方や発見することの面白さを、体験や実践を通して伝える。



## 資料5 交流機能の再構築詳細案

### 1) 博物館で琵琶湖を楽しむプログラム

- ・展示室や標本を使った琵琶湖を楽しむプログラムを開発し実施する(図2、表1)。また、季節に合わせた琵琶湖、森、田んぼ等周辺のフィールドでのプログラムを企画し提供する。

自分で楽しめるワークシートや物づくりなどの体験型、テーマに沿った環境学習まで、個人、団体向け、交流型など幅広く対応する多様なプログラムにより、効果的に琵琶湖に関する情報を得て、フィールドに出ていくきっかけにするとともに、いつでも楽しめる博物館を目指す。シートやガイドブックはコレクションしたくなるようなものとし、リピーターにも毎回新しい発見ができるものにする。

	博物館の屋内	博物館の屋外	地域の屋内	地域の屋外
<b>いつでも</b> (時間を決めずに常に行ける)	<ul style="list-style-type: none"> <li>●セルフ型 フロアガイド トライシート</li> <li>●交流型 質問コーナー 展示交流員</li> <li>●体験型 地域の人の体験イベント</li> </ul>	屋外観察マップ	<ul style="list-style-type: none"> <li>学習シート</li> <li>琵琶湖データベース</li> </ul>	びわ湖フィールド図鑑
<b>定時開催</b> (決まった日時に参加できる)	<ul style="list-style-type: none"> <li>●交流型 学芸員スタジオ</li> <li>●体験型 展示室プログラム 体験プログラム(個人) バックヤードツアー はしかけ/FR/の体験プログラム</li> </ul>	屋外体験プログラム	<ul style="list-style-type: none"> <li>サテライト博物館 移動博物館</li> <li>●観覧会・講演形式 はしかけ/FR交流会</li> </ul>	
<b>予約制</b> (事前予約で参加できる)	<ul style="list-style-type: none"> <li>●体験型 体験プログラム(団体向け)</li> <li>●観覧会・講演形式 講演会・セミナー</li> </ul>	屋外体験プログラム		びわ湖BOXの貸出(団体向け)
<b>登録制</b> (参加登録をした人ができる)	●博物館と共に交流活動をするメンバー	はしかけ制度 フィールドレポーター制度(FR)	観覧会 地域との連携事業	

図2 交流活動の概念図

### プログラム案

- ・琵琶湖へ出る「漁師さんと行くエリ漁体験」、「船で琵琶湖を体感」など
- ・屋外展示を活用：「樹冠トレイルから琵琶湖を見よう」、「葉っぱでお絵かき」など
- ・湖や森の恵みをいただく：「湖魚の料理教室」、「森のめぐみを食べよう」など
- ・地域の人々の技を学ぶ：「ヨシ笛演奏会」、「よしず作り体験」など

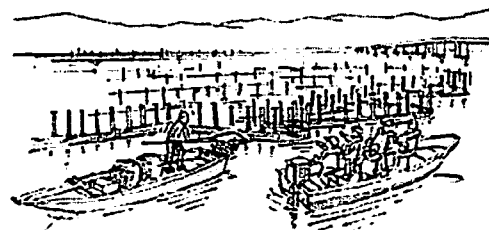
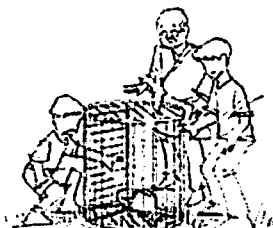


表1 プログラムの例

プログラムの例					対象		
強化 新規	プログラム名	実施場所	種類	内容詳細	個人		学校・地域の 団体
					ファミリー層 (こどもガイド)	大人層 (おとなガイド)	
強化	フロアガイド	展示室A・B・C・水族	セルフ型 いつでも	館内マップ・みどころ・観覧年表 (パンフレットとガイドブックとして 展示のみどころを端的に伝える)	・パンフレット(大人用、子ども用) ・ガイドブック(こどもガイド ・おとなガイド)	○ ○	○
強化・ 新規	トライシート	展示室A・B・C・水族	セルフ型 いつでも	すべての展示室をテーマに沿って 観覧するシート。通りシートを挿入 れば巡回し易い楽しみ方が可能。巻 き込む、やってみる、考える、など 自分で作るオリジナルシート。	・ニゴロブナの森 ・どんぐりの暮らし ・人と琵琶湖の知恵比べ	○	○
新規	四季のフィールド観察 マップ	屋外交流空 間	セルフ型 いつでも	四季の自然、文化、琵琶湖の情報を 示した屋外の案内マップ。見ど ころを端的に伝え、触る、匂う、聞 く、など五感を使った体験で楽し む。	・四季の屋外観察マップ	○	○
新規	展示室プログラム	展示室A・B・C・水族	体験型 時間制	各展示室のテーマを使った体験プ ログラム。フロアワークをより交流 型に発展させ、各展示室の交流ス ポットで定期的に行う、自由参加 型のプログラム。	・A展：ソウの虫探し ・B展：植物のふし ・C展：生き物紹介、琵琶湖ツアー ・水族：飼育員によるお魚お食事タイム	○	○
新規	バックヤードツアー	水族バック ヤード、収蔵 庫	体験型 時間制	展示室から、普段は見ることので きないバックヤードへ、博物館の 資料収集・保管の役割を紹介。	・水族バックヤードツアー ・収蔵庫バックヤードツアー	○	○
新規	屋外体験プログラム	屋外交流 空間・樹冠 トレイル・工 房	体験型 時間制/予 約制	琵琶湖を使ったフィールド体験型 プログラム。	・漁師さんといくエリ漁 ・琵琶湖のふし ・船で琵琶湖に出てみよう ・琵琶湖の生物調査 ・樹冠トレイルから琵琶湖を見よう ・魚のめぐみを食べよう	○	○
強化	学芸員の質問コーナー	大人のデ ィスカバリー	交流型 常時	毎日でも、学芸員に直接、質問、 相談ができるコーナー。	・学芸員の質問コーナー	○	○
新規	学芸員スタジオ	展示室交 流スポット	交流型 時間制	学芸員によるスペシャルトーク。 テーマと時期を決めて定期的に行 い、学芸員と交流、質問できるプ ログラム。	・学芸員スタジオ ・サイエンスカフェ	○	○
新規	はしかけ・FRの体験プ ログラム	展示室交 流スポット・ 他	体験型 時間制	はしかけやFRで活動している人々 と交流するプログラム。 子供向け、大人向け、学習型、体 験型など来場主体によって多様な 活動、プログラムを実施する。	・民具を使ってみよう ・骨格標本の作り方 ・里山のめぐみを食べよう ・役立つ藻草	○	○
新規	地域の人々の体験プ ログラム	展示室交 流スポット・ 他	体験型 いつでも	地域で活動する人々と交流するプ ログラム。 地域の人々が持つ技を学び、体 験する活動を不定期で実施する。	・ものづくり体験 ・ヨシ沼漬漬	○	○
新規・ 従来	体験プログラム (個人向け)	わくわく体 験スペース	体験 時間制	毎日誰でも参加できる体験プ ログラム。家族や一般向けに、気軽 に楽しめるものづくりや体験プ ログラムを実施する。	・ヨシ沼よしず作り ・湖魚の料理教室 ・木エクラフト ・窯っぱで絵を描こう	○	○
従来	学習プログラム (団体向け)	実習室	体験 予約制	現在、団体向けに実施している学 習プログラムの継続	・昔くらし ・ヨシ沼作り ・化石レプリカ ・琵琶湖模型 ・シジミストラップ	○	○
強化	学習シート	実習室・地 域	セルフ型 いつでも	館内および館外利用可能な環境 学習に使える学習シート。	・暮らしの水(上下水道) ・身の回りの生き物(琵琶湖湖沼/四川編/農 圃/田んぼ編)	○	○
新規	びわ湖フィールド図鑑 (フィールドの情報)	地域・フィ ールド	アプリ いつでも	HPやスマートフォンのアプリを 使って、びわ湖内の自然、文化、 歴史の情報を得られるフィールド 図鑑。	・街道地図でぶらり歩き ・遺物の博物館めぐり ・琵琶湖の果物の油と湖産料理 ・遺物の長り文化	○	○
強化	琵琶湖データベースの 公開	地域・フィ ールド	データベ ース いつでも	琵琶湖に関する基本的な資料、 データや博物館情報などを館外 利用可能なものとして、HP等で公 開。	・琵琶湖のいろは ・収蔵資料データ	○	○
新規	びわ湖BOXの貸出 (資料活用)	地域・フィ ールド	貸出 予約制	地域で活動する団体や学校向け に、学習テーマにあわせて琵琶湖 や遺物の学習、観察会に役立つ オリジナルキット、観察道具や標 本、学習要領もセットになった教 材。	・琵琶湖の魚(標本・骨格) ・昔の暮らし(民具) ・太古の生き物(化石)	○	○

## 2) 地域で琵琶湖を学ぶプログラム

- ・最新の琵琶湖に関する環境学習の種(教材)をつくり、地域でその芽(活動)が育つよう、情報発信と活動の支援をする。学校や地域の団体には、琵琶湖について学べる資料や標本などの貸出キット「(仮称)びわこBOX」を用意し活動の幅を広げる。

## 3) 地域の人々とともに学び、実践するプログラム

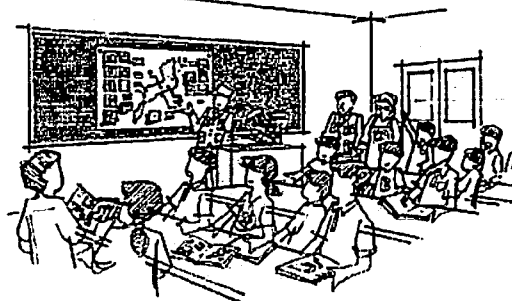
- ・何度来ても楽しめる博物館であるために、展示更新や季節による情報に対応したプログラム開発を持続的に行う。楽しく分かりやすいプログラムを作るため、学芸員、教員、教育やコミュニケーションなどの専門知識を持つスタッフでプログラム開発を進める。さらに地域の人たちとも共同で作業を行い、ともに学び合う場を作る。また、学校と地域をコーディネートして、連携の強化をはかり、地域の人たちがプログラムを実践できる場として、博物館や学校を利用できるようにする。

## (3) 地域をつなぐ 交流

琵琶湖博物館の持つネットワークやノウハウを活かし、博物館がつなぎ役となり、地域に人材が育つことを応援する。

### 1) 地域・学校・博物館の3者連携

- ・「地域だれでも・どこでも博物館」の実現に向けて、地域と連携した観察会等を通して、ネットワークやノウハウを地域に還元し、地域に新たな人材が育つことを応援する。
- ・博物館利用に関心のある教員のネットワークを広げ、発表、交流の場としても博物館の施設を利用するなど教員の博物館利用を促進する。利用しやすいように、環境や地域学習のプログラム、資料貸出キットなどを整える。
- ・地域や学校の活動発表や交流ができる場として、ホールやセミナー室など博物館施設を有効利用する。



### 2) 地域企業・大学との連携

- ・琵琶湖博物館の専門知識や地域のネットワークを活かし、企業や大学との有益な連携体制を構築する。
- ・これまで博物館にかかわりのなかった人びとに、暮らしの中で博物館を楽しめる企画など、新しい博物館の使い方を提案し、利用機会を拡充する。

#### ○ 企業

琵琶湖博物館のもつ専門知識やネットワークを活かして、企業のCSR(企業の社会的

責任) 活動の支援や連携を行う。また、滋賀県をあまり知らない転入者向けの研修などでの博物館活用を働きかける。企業社員の家族や顧客も含め関心を持つ人びとが増えるよう、幅広く滋賀県や琵琶湖の魅力を伝え、積極的な共同事業や、企業パートナーシップ協定などの企業の博物館利用の機会を提案する。

○ 大学

- ・ 実習や授業、学生利用の特典のある大学パートナーシップ協定を行い、大学生の博物館利用の向上をはかる。
- ・ 学生にとっての地域交流や社会経験の実践の場として様々な連携を推進し、学生と地域とのつながりを深める場とする。
- ・ 環境、人文系をはじめ、福祉分野、教育分野、芸術分野等の学生の実践の場としても博物館の活用機会が広がるようにするとともに、社会との関わりや、その後社会へ出る際の実績となるような連携を行い、活動をともに行うパートナーを目指す。
- ・ 学生が研究や博物館への関心をもつきっかけとなるよう学芸員との交流機会を増やすなど、多様な興味を引き出し、若い世代が育つ場となり、また博物館ニーズを見出す機会ともなる。

大学との連携例

分野	連携事業の例
文学・文化・心理学	ユニバーサルデザイン
社会学・社会福祉学	世代間交流、地域の人びとから知恵、技、文化の継承
教育	博物館における子どもの学び
国際関係	国際交流における通訳、翻訳
外国語	海外利用者へのユニバーサルデザイン
経済・経営・商学	博物館における広報、運営戦略
食物・被服・生活科学	体験型の展示作りや交流プログラム、湖魚を使った食文化の伝承
芸術学	ミュージアムグッズの開発、共同ギャラリー展
看護・健康・スポーツ・保健学	回想法による高齢者の博物館利用
人間科学・総合科学	自然観察会の企画、運営
工学	ICTを使った博物館の情報発信
理学	ホームページやICT利用展示の開発
農学・水産・環境科学	自然調査や研究発表

### 3) 県内外の団体・施設との連携

- ・ 環境学習センターと協力し、県内外の施設とのネットワークを強化する。環境学習のプログラム開発・実施、展示、研修、活動の場が集まることで、最新の情報を得て活動に踏み出すことができる関西地域における環境学習の拠点を目指す。

#### 4) 世界の古代湖に関わる研究を活かした国際交流

- ・協定を結んでいるフランス国立自然史博物館、中国科学院水生生物研究所、湖南省博物館や ILEC（国際湖沼環境委員会）、JICA（国際協力機構）などと連携して、資料や情報を相互提供し、研究活動や展示、地域と海外の人的交流を促進する。
- ・古代湖である琵琶湖をテーマに海外にも目を向け、国際的な湖沼研究の一拠点として、ILEC との連携により研究発信を強化する。また、JICA と共同主催している博物館学集中コースの実績を生かし、研究や展示、研修などの連携を強化する。



### (4) 利用者とともに成長する交流

時代とともに変化する博物館利用者のニーズに対応するため、博物館と利用者がともに楽しみながら学び考え、成長できる交流の場で有り続けることを目指す。

#### 1) 新たなニーズに目を向け発展しつづける交流

- ・リニューアルに向けて利用者とともに新しい琵琶湖博物館を作っていく。
- ・博物館の魅力を分かりやすく伝えるため、教育やコミュニケーションの専門性を持つ人材とともに、交流機能の持続的な発展のための体制を整える。

#### 2) 博物館と地域がともに成長する人々の集いの場作り

- ・子どもから高齢者まで幅広い世代の人びとが博物館に集い、未知の人、物、情報に出会い、多様な視点から考え行動ができる人材が育つ場を作る。
- ・博物館での発見や学びの面白さを楽しく分かりやすく伝えるためには、コミュニケーションやインタープリテーションの専門的知識と技能を持つ人材が必要である。また、博物館の外に楽しさを伝えるには、ネットワークを構築するノウハウが必要である。地域の人々とのプログラムの実施や、コーディネートなどを通して、そのような人材が育つ体制や環境を整え、最終的には社会や地域で活躍するような仕組みを整備する。

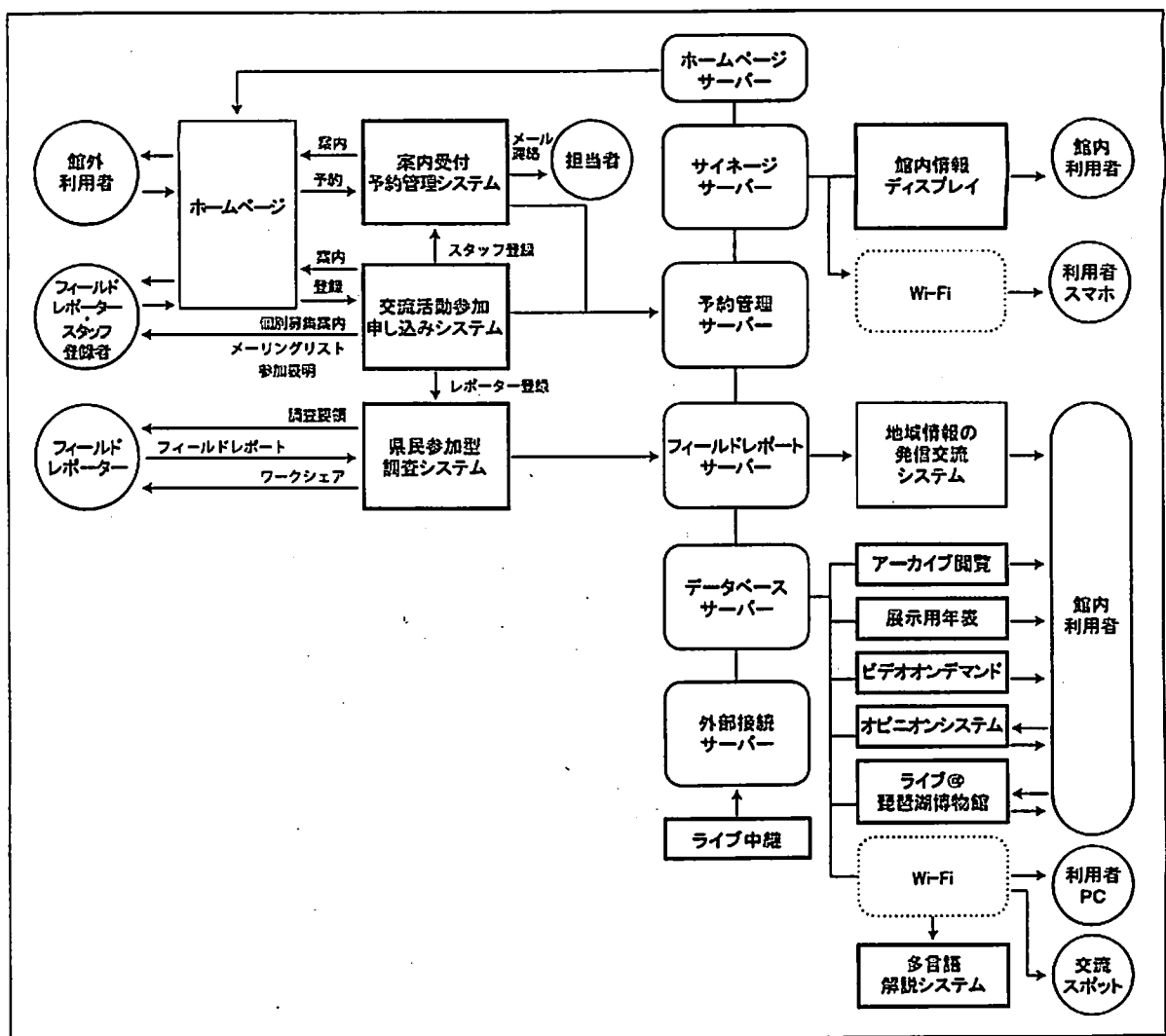
#### 3) 分かりやすく使いやすい情報の受発信機能

- ・「欲しい情報」がすぐ手に入る使える博物館として、交流活動の受発信機能を整える。
- ・何から始めたらいいかわからない場合にもまず気軽に相談できる窓口を設け、自分に必要な情報を分かりやすく手に入れることができるようにする。
- ・受付や館内案内、広報、ホームページによるリアルタイム情報の受発信を強化する。
- ・広報を強化し、交通機関などとの連携により、滋賀県、周辺市町、関西圏にむけた発信を積極的に行う。

ICT (情報通信技術) の活用

- 利用者と学芸員、利用者とプログラム、フィールドと展示などを、ICTを使ってつなぐことにより交流を推進する。タイムリーな情報提供による交流の推進で、フィールドの「今」を伝えあい、学びあうことをさらに盛んにしていく。
- 館の交流活動に参加しやすくなるよう、見やすくわかりやすい案内情報を届けるとともに、予約などもできるようにして利便性を高める。
- フィールドレポートなどの活動に気軽に参加でき、レポートの様子が来館者にも伝わりやすいように見せたり、フィールドからの情報をタイムリーに展示室に届けることができるようにして、フィールドと展示室とをつなぐ。

<活用イメージ図>



## (1) 来館者が快適で楽しく情報を得られるシステムの整備

### (1) 案内情報ディスプレイ (デジタルサイネージ) の設置

- インフォメーションは、館内数か所のデジタルサイネージで、多言語で表示。館に関する情報だけでなく、観光情報や周辺案内などの地域情報についても提供する。入り口、アトリウム、休憩コーナーに大型のディスプレイを設置する等、情報が目にふれやすくする。
- 屋外交流空間での見どころなども紹介する。樹冠トレイルなど、現地で見ることができる生き物や風景に関する情報や、開花情報など日々更新される情報を工夫して提供していく。
  - ・ ホームページの催し情報と連動して、本日の開催プログラムを案内する。
  - ・ 屋外展示情報、今日の見どころを案内する。
  - ・ タッチパネル操作で、館内案内、周辺の地域情報などを提供する。
  - ・ 緊急情報の一斉配信を行う。
  - ・ サイネージのコンテンツを個人用スマートフォン向けにアプリ化して、催し案内を行う。

### (2) 資料検索システムの設置

直観的に見たい資料を楽しく検索できるシステムを整備する。また、来館者の興味に応じて、展示資料の詳しい説明、収蔵資料の検索、動画資料 (ビデオ等) の観賞などがわかりやすく興味を持って行いやすいようにする。

#### <活用例>

##### (例1) アーカイブ閲覧システム

データベースサーバーを設置しタッチパネルモニターで検索できる。多数の画像を一度に表示し、自由に拡大することで見たい資料を選びやすくする。

##### ○ 設置場所 (例)

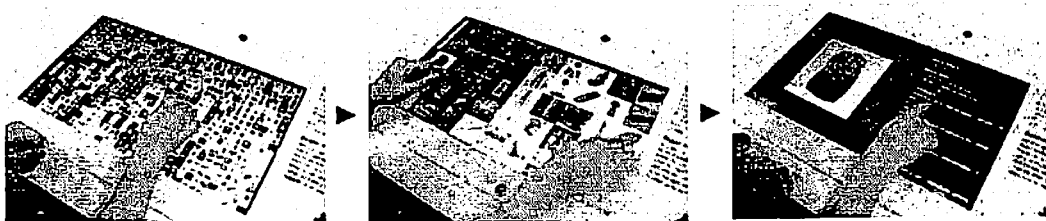
- ・ C展示室：風景のカード検索、琵琶湖と湖をめぐる1000の話、内湖データベース

##### (例2) 展示用年表ディスプレイ

画面いっぱいに多数の画像を時代順に表示する年表で、全体を一目でつかめるようにする。画面にふれることで時代を行き来し、画像を拡大して詳しい情報を得ることができる。

##### ○ 設置場所 (例)

A展示室 B展示室 C展示室 などの各展示室



##### (例3) ビデオオンデマンド

視聴用の大型モニターと映像選択用のタッチモニターを用意して、DVDの映像記録を視

聴することができるようにする。

○ 設置場所 (例)

- ・ 大人のディスカバリー、ホール

(例4) オピニオンシステム

来館者の意識や展示への意見を広く求め、入力された情報を記録、閲覧できるようにする。

○ 設置場所 (例)

- ・ B展示室：フナっ子システム
- ・ C展示室：これからの琵琶湖

研究スタジアム

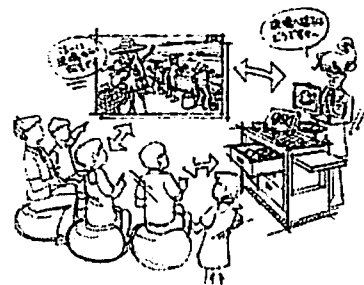
研究を紹介する展示PCから、それぞれ意見をキーボードで入力することができたり、別の手書きでも入力できる装置も設置し、入力した意見を一定時間大画面に表示することができる。

(例5) ライブ@琵琶湖博物館 (双方向ライブ中継)

フィールドでの調査の様子をICTを活用して展示交流空間にライブ中継し、リアルタイムのライブ感を現地の人たちと共有しながら、展示と関連づけて印象深く体験することができる。

- インターネット環境を利用して、双方向の動画通信を行う。フィールドからはモバイル機器で、博物館には大型画面を設置し、展示室の交流スポットや可動型のプロジェクターで実施することができる。

- フィールドからはインタビューやレポートが動画とともに届き、博物館では、進行役をたてて来館者とともに視聴し、フィールドの学芸員や当事者に質問することもできる。展示室にいる学芸員とフィールドにいる活動する人との対話や議論が行われ、来館者も参加することができ、気づきや議論の深まり、意外性のある発見が生まれるようにする。



- いつでも記録を視聴

記録を蓄積し、いつでも視聴できるようにする。パートごとに分けて見どころをわかるようにしてネットでも気軽に見ることができるようにする。

○ 設置場所 (例)

- ・ B展示室：交流スポット (共用)
- ・ C展示室：研究スタジアム (オピニオンシステムと共用)
- ・ 大人のディスカバリー：映像視聴用大型画面 (共用)
- ・ 可動型：A展示室交流スポット わくわく体験プログラム開催場所等

(3) 多言語解説システムの整備

複数言語による展示ガイドシステムを整備する。携帯型端末により、文字と音声でガイド



することができる。

- ・ 貸出用端末を用意し、日本語を含む6か国語が利用できるようにする。
- ・ 該当する場所で利用者が番号を入力する、または表示に携帯型端末をかざすことでスタート。
- ・ 個人用スマートフォン端末等でも利用対応できるように整備する。

#### (4) Wi-Fi利用可能空間の整備

展示に関心を持った来館者が探究心に応じて自分の端末等で必要な情報をタイムリーに調べられるように、Wi-Fi 基地を整備する。

館で設置する端末や貸出用端末は館の設備を使用し、個人スマートフォンには公衆 Wi-Fi で対応することも検討する。

大人のディスカバリーでは、持ち込んだ自分PCでの館データベースをはじめとするインターネットの利用や、標本を顕微鏡で撮影して自宅にメール送信することができるなど、利用者の活動に拡がりや継続性が生まれるようにする。

#### ○ 適応場所 (例)

- ・ A展示室：入口付近 交流スポット
- ・ B展示室：入口付近 交流スポット
- ・ C展示室：入口付近 中央部
- ・ 水族展示：入口付近
- ・ 企画展示室：室内
- ・ アトリウム：全般
- ・ 大人のディスカバリー：室内
- ・ 樹冠トレイル：デッキコンコース

## (2) 展示や交流活動に参加しやすいシステムの整備

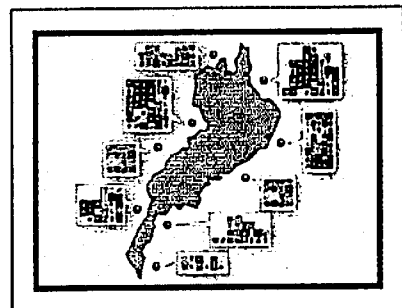
### (1) 地域情報の発信交流システムの整備

#### <活用例>>

#### フィールドレポートシステム

登録したレポーターからの情報を展示室に届け、フィールドの「いま」を展示することができる。

- 地図型ワークシートを用意する。フォームからの情報は自動でプロットすることができる。
- 活動予定、活動記録のページを設け閲覧できるようにしてフィールドでの活動に勝うことができる。
- 一般からの投稿写真募集など、単発の情報を受け付け、取りまとめることにもこのシステムを活用することができる。



○ 設置場所 (例)

- ・ A展示室：地域の人びとによる展示
- ・ B展示室：フィールドの博物館
- ・ C展示室：ヨシ原の生き物たち 田んぼで暮らす生き物たち 川と琵琶湖

琵琶湖をかこむ森 自然の恵みを生かす知恵 みんなでつくるフィールド情報

(2) 県民参加型調査システムの整備

身近な環境を題材にしたフィールド調査に、多くの人びとが手軽に参加できるように、オンライン化した調査システムを整備する。

<活用例>

- それぞれの調査活動を台帳で管理することができる。
- 概要はホームページに転載して広報案内に活用できる。
- フィールドレポートを入力する地図型ワークシートを用意する。フォームからの情報は自動でプロットされ、レポートの取りまとめを行い、メンバーで共有することなどができる。また、従来からの紙ベースのものも担当者が入力できるようにする。
- 活動予定、活動記録のページを設けて参加者が閲覧できるようにする。調査経過を知らせたり、このまま展示等で活用したり、記録として集積できるよう、時系列型ワークシートを検討する。

(3) 交流活動参加管理システムの整備

<活用例>

(例1) 案内受付予約管理システム

申込・予約、会場の確保、予約状況管理、プログラム実施者への連絡・スケジュール管理、情報や資料の受付など、人的対応が必要なものを集約して一元管理できるようにする。

(例2) 交流活動参加申込みシステム (スタッフ・サポーターの募集など)

琵琶湖博物館と関わり、個人の能力を発揮できるよう、博物館活動への参加の在り方を多様に用意する仕組み作りを行い、幅広い利用者の欲求にこたえることができる。博物館がイベント情報とともにスタッフ募集情報なども発信することで、イベント参加側と、準備・資料整理などスタッフ側の両方から博物館活動に参加することができるようにし、参加への一歩を踏み出しやすくすることができる。

- ニュースやイベント案内を随時発信することができる。

(例3) ホームページへの掲載

上記、プログラムやフィールドレポーターの活動について、ホームページを活用して、案内、受付を行い、案内にはプログラムの記録なども活用することができる。

- プログラムの案内受付予約、スタッフ・サポーター募集、フィールドレポーター募集をシステムに連動して行うことができる。
- 動画を使って活動の楽しさを訴求し、応募を促進することができる。

## (1) ユニバーサルデザイン化の向上

### 1) ユニバーサルデザインの推進

高齢者、障害者等の移動等の円滑化の促進に関する法律、だれもが住みたくなる福祉滋賀のまちづくり条例等、最新の条例・規則に則り、だれにでも使いやすい施設となるよう、施設設備の改修を行う。

#### (1) 整備方針

多様な人が訪れる施設として、「だれもが能力を最大限に生かして楽しめるよう、はじめから考えて計画し、絶えず良くしていくことを考える」というユニバーサルデザインの考え方に基づく施設づくりをさらに進め、施設整備、危機管理、来館者対応、展示・交流について計画していく。

- 動線の円滑化、段差の改善など、より快適で安全に移動できる空間づくりを行う。
- さまざまな知覚による体感ができ、まただれにでも使いやすい設備・機器を導入する。
- わかりやすい館内サイン、読みやすい解説パネル、多言語での対応など、来館者が楽に、簡単に移動でき、理解できるような表示を行う。
- 整備にあたっては、障害のある方や子育て中の方など、多様な人びとが参画するワークショップにおいて使い勝手の良さを検討する。
- ハード・ソフト両面からユニバーサルデザイン化を向上するよう、総合的に勘案していく。

#### (2) 来館者の移動の円滑化

- 来館者が快適に移動できるよう、経路について多様な人びとの視点から検証し、通路等の幅、材質、必要な設備を整備する。
- 多様な人びとがわかりやすいように、様々な手段を総合的に活用して現在位置や目的場所への順路を示す、内装、サイン、色彩計画や照明計画等を企画する。  
例えば床面誘導サインは弱視者や色覚障害のある方にもわかりやすく、輝度差の大きなもので、なおかつ車いす等利用者の障害にならないようにするなど、それぞれについて個別に検討し、さらに総合的に勘案する。
- 駐車場
  - ・ 屋根付き車いす駐車場、車いす駐車場、思いやり区画の趣旨を広く啓発し、また各場所にわかりやすいサインを表示する。
  - ・ 一般駐車場についても、サインや区画の線引き、色分けの標示をわかりやすくし、館への円滑な誘導につとめる。

## ○ 通路(廊下・階段・スロープ等)

- ・手すり、誘導鈴、誘導灯など、場所に応じて円滑に移動できる設備を設置する。
- ・床材は、滑りにくく、転んでも大きなけがとならないよう、また長時間歩いても疲れのない歩行感のよい材料を選定する。色分けにより展示ゾーニングを示すなど、直観的にわかりやすい空間づくりに役立てる。

## (3) 館内設備の改善

## ○ トイレ

多機能トイレを拡充し、清潔で快適なトイレを整備する。

- ・多機能トイレの各機能と設置場所を検討し、オストメイト対応、ベビーベッド、ベビーチェア、介護ベッド、滑りにくく識別しやすい床材、手すりや紙巻器、鏡の位置、ドアの仕様など、障害のある方、小さい子ども連れの方など多様な人びとがより快適に利用できるように整備する。
- ・一般トイレについても、洋便器化、ベビーチェア、手すりや紙巻器、荷物掛けの位置、洗面台の高さや自動水栓化など、より使いやすくなるよう改修を行う。

## ○ 授乳室

- ・プライバシーに配慮し、適切な利用をされるよう来館者に案内を行う。
- ・調乳用シンクやおむつ替えシート、授乳イスなど快適化を図る。

## ○ 介護場所

- ・障害のある方等が団体で来館される場合に際しては、あらかじめ相応な介護場所を確保し、円滑に利用できるようにする。

## ○ セミナー等での音声伝達(骨伝導ヘッドセット)

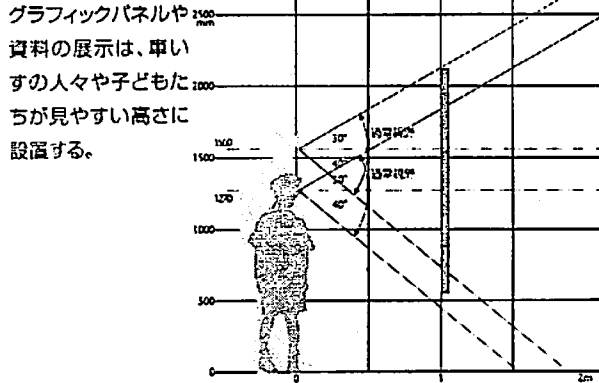
- ・セミナー等室内でマイクを通した音声聞く場合、無線によりマイク音声を受け取り、骨伝導(耳から空気の振動を介して音を入れず、振動を聴覚器官に直接伝え音として聞く原理)用ヘッドセットを通して音を伝えやすくする。他室での音声ガイドにも使用できる。

## (4) サインの改善

- 多国語表記で、明度と彩度の差がはっきりした直観的に分かりやすいサインを、位置や高さ、デザイン等を考えて設置する。
- 文字表示のほか音声案内や触知案内板も設けるなど、できるだけ多様な手段で必要な情報を伝えられるよう計画する。

(5) 展示関係のユニバーサルデザイン

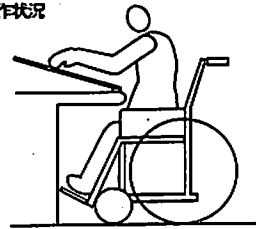
展示物の高さ



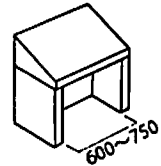
車いす対応

- ・車いすによる利用に支障のない通路幅および利用環境を確保する。
- ・展示テーブル下に車いす座ごと入れる空間を設けるなど、車いすの寄りつきやすさに配慮する。

操作状況



軌立間寸法



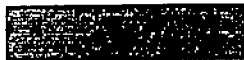
色覚異常対応

- ・男性の10人に1人もいわれる色覚異常に配慮した配色とする。色だけでなく形でも識別できるようにする。

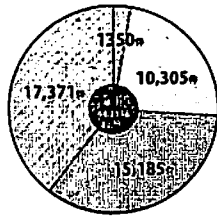
見やすい例



見にくい例

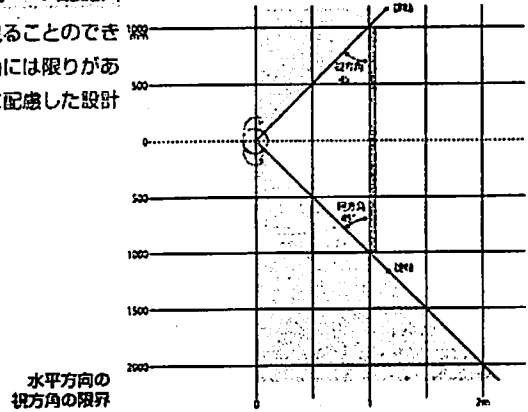


線種や塗り分けパターンの違いなどを併用した例



視野角への配慮

- ・一度に見ることのできる視野角には限りがあることに配慮した設計とする。



文字の大きさ

- ・ルビを必要とする専門用語などが多いことから、子どもや高齢者にも読みやすいルビの大きさを基準に文字の大きさを設定する。

びわこ  
琵琶湖

ルビ：視認性を考慮し、文字の35~45%程度の高さで設定

原研文：文字天地 12mm以上

タイトル：文字天地 40mm以上  
外圍罫(4カ画組)：文字天地 15mm以上

触察対応

- ・さわって、大きさ、形を確認する。



## (2) 展示室の再構築にかかる建築設備の改修

展示室の再構築に付帯した建築・設備の改修を行う。

### 各展示室

展示の更新にともない、必要な内装の改修を行う。

### 水族展示

水槽がより見やすくなるような塗替えや更新を行う。

床：展示イメージに合わせて既存仕上げの更新を行う。

壁：塗替え（一部結露防止対策）

天井：塗替え

### 水族飼育設備

水族展示室の更新にともない、必要な水族飼育設備の改修を行う。

- ・水族展示改修にともなう設備更新
- ・水族用専用熱源の設置（熱源機器の系統分離）
- ・バックヤード内飼育設備改修
- ・水槽内改修

## (3) 現状の課題を踏まえた施設設備整備計画(ストックマネジメント)

開館より17年が経過し、老朽化に伴う改修や更新の時期を迎えてきていることから、予防的な維持保全により既存建築物の長寿命化、施設の有効活用と維持保全費用の削減を図る。

社会的な面では地球温暖化対策などの環境対策も大きな課題であり、当館においても省エネルギー、低炭素建築などに取り組み、環境負荷を低減させる役割は大きい。当館のストックマネジメントを確実なものとするために、以下の取組を進める。

### ○計画的・効率的な維持保全

「国土交通省大臣官房官庁営繕部監修 建築物のライフサイクルコスト」平成17年版を参考としながら施設長寿命化保全計画を作成し、適切な時期に改修などを効率よく実施する。

### ○日常の適正な維持管理

日常・定期点検を実施し、不具合の早期発見・早期対応を確実なものとする。

### ○施設情報の一元化と保全情報の提供

修繕、工事履歴などの情報を一元的に共有し、他の県施設の保全情報も活用する。

### ○あわせて、ストックマネジメントを進める中で、維持管理の効率化、来館者サービスの向上、博物館機能の向上につながる施設・設備の改修となるよう努める。

外部資金確保の取り組み例として、以下のようなものが考えられる。

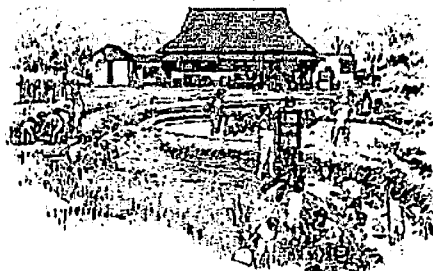
〈例1〉 企業連携による展示・交流空間の整備および運営

リニューアルでは、「大人のディスカバリー」や「マイクロアクアリウム」などの話題性の高い新しいコーナーを計画している。また、琵琶湖が展望できる樹冠トレイルを整備し、琵琶湖と博物館をつなぐ空間とすることが検討されている。

こうした施設の整備および運営について、企業のCSR活動に沿うものとして協力いただける企業を募り、施設に企業名を冠するネーミングライツを実施するなど、企業との連携のもとリニューアルを進める。

ネーミングライツ例：

「〇〇（企業名）環境学習の森」など



〈例2〉 企業との共同開発

リニューアルでは、ICT（情報通信技術）を活用して、全館Wi-Fi化や多言語化対応など、快適で充実した学びの場の実現を目指している。

来館者サービスとして博物館コースガイドなどを整備する際に、情報通信企業等と連携することにより、新しい博物館利用に向けた先進システムを共同で開発する。

〈例3〉 サポーター制度

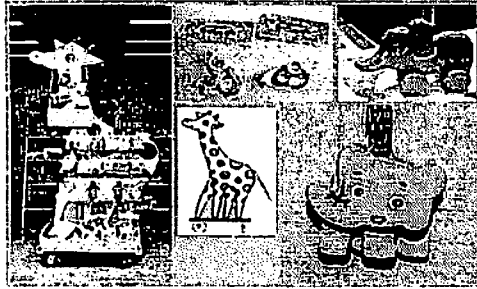
特定の展示について運営を支援していただくサポーター制度の創設を検討する。例えば、水族展示では、トンネル水槽など特定の展示について運営をサポートしていただく水槽サポーターを募集するとともに、物品・技術提供サポーターの創設も検討する。



(姫路市立水族館の例)

〈例4〉 ビジネスパートナーの公募

企業・NPO等から博物館の魅力向上のための事業提案を公募し、オリジナルキャラクターの開発やユニークなミュージアムグッズの企画・政策、刊行物の発行などを企業と協力して実施する。



(天王寺動物園のキャラクター開発の例)



## あたらしいびわこはくぶつかん

ぼくは、小学校からの帰り道、トンボをつかまえた。緑の目玉と、トラみたいな模様。見れば見るほど、なんだか不思議で、かわいい。

おじいちゃんに言ったら、土曜日に琵琶湖博物館に連れて行ってもらえることになった。おじいちゃんが教えてくれて、行って見たのは、大人のディスカバリー。トンボの標本って、こんなにたくさんあるんや。

「トンボをもってきたんか？」近くにいたおじさんに声をかけられた。

「これはいいもんを見つけたねえ。ここにある標本の中に、同じ種類があるんやけど、見つけれられるかな？」おじさんは、トンボばかりが並んだ標本箱を出してくれた。じっくり見くらべると、体の色、羽の形、しっぽの形、今まで気にならなかった部分がよく見えてきた。



「ぼくの持ってきたトンボに近そうなんは、この辺りやとは思うんやけど。うーん。」

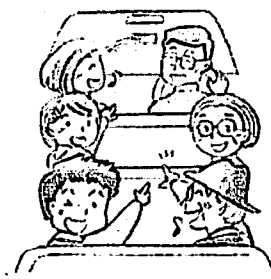
「目玉をよーく見てみ。」おじさんが言った。

「あっ、ぼくのトンボは、目玉が離れてる！」

「そう。これは、サナエトンボっていう仲間なんや。君が見つけたんは、その中でもメガネサナエって言って、滋賀県にはたくさんおるけど、よその県に行ったらなかなか見つけられへん種類やねんで。」

「へえー！」ぼくはなんだかうれしくなって、トンボのことがもっと知りたくなってきた。それから、おじさんは、小さな小さなハッチョウトンボのこと、滋賀県には100種類もトンボがいること、いろいろ話してくれた。ぼくもまた、他のトンボを探してみよう。

「また何でも聞きにおいでな。」おじさんはそう言ってくれた。



それから、ぼくの家族は休みの日に、ドライブがてら、よく琵琶湖博物館に行くようになった。

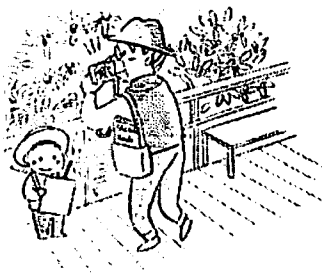
お父さんのお気に入り、マイクロアクアリウム。好きなプランクトンを見ることが出来るマイクロバーの常連だ。行くたびに、カウンターから出される「本日のプランクトン」をのぞきながら、マスターと話している。最近じゃ、いろんなところで汲んできた水を博物館に持って行っては、顕微鏡で観察している。「父さんが、新種のプランクトンを見つける日が来るかも。」なんて言ってるけど、ほんとな。



お母さんは、来るとまず、その日のイベントをチェックする。フロアトークは、行くたびに違う学芸員さんのお話がおもしろくて、おすすめだって。わら細工とか、プランクトンの模型とか、ちゃっかりお土産をもらっていることもある。イベントのあいまにはカフェで本を広げて、のんびり過ごしている。



お姉ちゃんは、展示室をうろうろするのが好き。行くたびに違うワークシートに挑戦したり、出会った人や展示交流員さんと話をしたり、何度行ってもわくわくするって。知っていることや思ったことを投票したり書き込んだりするコーナーもあるから、この前来た時と見比べるのも楽しみにしている。



おじいちゃんはカメラとスケッチブックを持って、樹冠トレイルから森や琵琶湖に出ていく。散歩をしながらいろいろ写真を撮るのは、いい運動にもなるんだって。気に入った景色や、変わった形の木の实なんか見つけては、椅子に座ってゆっくり絵を描くこともある。お気に入りの写真や絵は、博物館のホームページに投稿して、載ったらみんなに自慢するんだ。ホームページに集まってくる仲間の情報を見るのも楽しみにしている。

おばあちゃんは、博物館にたくさんお友達ができた。機織りをするグループに入ったんだって。仲間とおしゃべりするのが楽しみみたいで、ぼくが学校に行っている間に、一人で博物館に行くこともあるらしい。生活実験工房の田植えやかきもちづくりのイベントの時には、ぼくやお母さんにも、やり方や昔のことなんかをいろいろ教えてくれた。おばあちゃんが、実はすごい物知りで手先が器用なこと、博物館に来て知ったんだ。



ぼくは、やっぱり、標本を見るのが一番好き。博物館に来ると、他にもいろんなものがあるし、物知り的人也たくさんいるから、化石や魚なんかにも詳しくなった。めずらしい石とか、小さなカタツムリとか、おもしろいものや不思議なものを見つけるのが上手になったよ。ハテナ?と思うものを見つけたら博物館に持って行って聞いてみるんだ。お話を聞いたり、資料を見たりして、帰るころには、持ってきたものが、今までよりもっともっと大切に不思議なものに見えてくる。琵琶湖には、まだわからないこともたくさんあるんだって。今まで周りに当たり前にあってなんとも思わなかったものに大発見があるのかも。

今週末も琵琶湖博物館に行く予定。ぼくが話したら、同じクラスの未来ちゃんも行きたいっていうから、一緒に行くんだ。